大宰府政庁周辺官衙跡Ⅶ

― 大楠地区 遺構編 ―

2015

九州歴史資料館

大橋地区から四王寺山を望む（92次，南から）

(1) 88次調査区全景（右が北）

(2) 92次調査区全景（上が北）

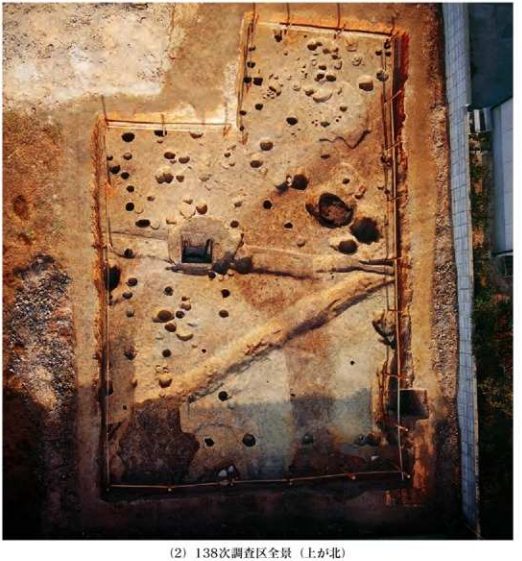
(1) 92次調査区全景（東から）

(2) 92-2次調査区全景（上が北）

(1) 94次調査区南半全景（北から）

(2) 94次調査区北半全景（南から）

(1) 94次調査区北半全景（南から）



(2) 138次調査区全景（上が北）

(1) 掘立柱建物SB2655（南から）

(2) 井戸SE3970（下が北）

(3) 地鎮遺構SX2670（北から）

序

当館では，平成14年３月に大宰府政庁跡の正式報告書を刊行して以来，観世音寺，水城跡，そして大宰府政庁周辺官衙跡の発掘調査の正式報告書を刊行し，昨年度は『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅴ』として不丁地区遺物編２を発刊いたしました。今年度は，その続編として不丁地区の表・図版編と大楠地区遺構編の報告書を刊行する運びとなりました。

大楠地区は，政庁周辺官衙跡のなかでも前面域の西側に位置し，発掘調査の結果，奈良時代から平安時代に至るまでの建物群や区画施設などが見つかっています。確認した遺構や遺物からは，これまで報告を行ってきた日吉地区や不丁地区とは性格の異なる地区であったことが推定されますが，大宰府に関わる官衙域の範囲や時期変遷を考察する上で，重要な地区と考えられます。本書の発刊により，地域住民や研究者に対して，当該地区の歴史的重要性についてさらに広く知っていただくこととなれば，望外の喜びでございます。

最後になりましたが，大宰府政庁周辺官衙跡の発掘調査に際しましては，日頃より大宰府史跡調査研究指導委員会をはじめ，文化庁・太宰府市教育委員会や地元の関係者各位から，多大なる御指導と御協力をいただいております。ここに記して，深く感謝申し上げます。

大宰府史跡の保存・整備・活用に際しましては，今後とも関係者の皆さまと連携を密に図りながら，万全を期したいと存じております。

平成27年３月31日

九州歴史資料館
館長　杉光　誠

例　　言

1　本書は，昭和46年度（1971）から福岡県が国庫補助を受け，福岡県教育委員会及び九州歴史資料館が発掘調査を実施した，大宰府政庁周辺官衙跡・大楠地区の正式報告書であり，大宰府政庁周辺官衙跡発掘調査報告書の第７集にあたる。

2　本書には，大宰府政庁周辺官衙跡の解明及び整備にかかる資料を得ることを目的として発掘調査を実施した，大宰府史跡第14次・76次・88次・92次・94次・104次・110次・125次・138次・139次・146次・152次・171次・194次・196次調査の成果を掲載した。

3　発掘調査は，大宰府史跡調査研究指導委員会の指導と承認のもとに実施した。検出遺構及び出土遺物については，各指導委員の御指導と御教示を得た。

4　本書掲載の遺構実測図は，各次調査担当者もしくは補助員が実測したものである。

5　本書掲載の写真は，当館元参事石丸洋及び各次調査担当者が撮影したものである。

6　出土遺物の整理・復元は，調査概要報告時の調査員及び補助員，並びに第Ⅰ章の調査組織の中に記した人員で行っている。

7　図面の浄書は，小田和利・杉原敏之・下原幸裕・高田いく子が行った。

8　目次と要旨の英訳は，西谷彰氏にお願いした。

9　本書の執筆分担は，以下のとおりである。

第Ⅰ章		小田
第Ⅱ章	（1）	下原
	（2）	杉原
第Ⅲ章	（1）・（2）	小田
	（3）	杉原
	（4）・（5）・（7）	下原
	（6）	岡田
第Ⅳ章		小田

10　本書の編集は，下原が行った。

目　次

頁

第Ⅰ章　緒　言…… 1
（1）特別史跡大宰府跡 …… 1
（2）調査の経過 …… 2
（3）調査組織 …… 5

第Ⅱ章　調査の概要…… 9
（1）調査の概要 …… 9
（2）基本層序 ……17

第Ⅲ章　検出遺構……23
（1）建　物 ……23
（2）柵 ……60
（3）溝 ……69
（4）井　戸 ……84
（5）木棺墓 ……94
（6）地鎮遺構 ……94
（7）炉　跡 ……95

第Ⅳ章　総　括……96
（1）はじめに ……96
（2）大楠地区の範囲 ……96
（3）検出遺構 ……96
（4）おわりに ……97

英文目次・要旨 …… 101

Fig. 目 次

頁

Fig. 1 大宰府政庁周辺官衙跡調査地一覧図 (1/6,000) …… 2
Fig. 2 大宰府史跡地域小字図 (1/7,500) …… 8
Fig. 3 大宰府政庁跡及び周辺官衙跡検出遺構配置図 (1/3,000) …… 折込
Fig. 4 大宰府政庁跡及び周辺官衙跡地区割図 (1/7,500) …… 9
Fig. 5 大楠地区調査区配置図 (1/1,500) …… 10
Fig. 6 14・14補足・14 - 3次調査区 (1/600) …… 10
Fig. 7 76次調査区 (1/600) …… 11
Fig. 8 88・196次調査区 (1/600) …… 12
Fig. 9 92・92 - 2・92 - 3次調査区 (1/600) …… 12
Fig.10 94次調査区 (1/600) …… 13
Fig.11 104次調査区 (1/600) …… 14
Fig.12 110次調査区 (1/600) …… 14
Fig.13 125・194次調査区 (1/600) …… 14
Fig.14 138・139・146・152次調査区 (1/600) …… 15
Fig.15 大楠地区基本土層図作成箇所 (1/1,500) …… 17
Fig.16 大楠地区 (92・92-3次・125次) 基本土層図① (1/60) …… 19
Fig.17 大楠地区 (146・196次) 基本土層図② (1/60) …… 20
Fig.18 大楠地区建物・柵配置図 (1/1,000) …… 22
Fig.19 掘立柱建物SB2018実測図 (1/80) …… 23
Fig.20 掘立柱建物SB2550実測図 (1/80) …… 折込
Fig.21 掘立柱建物SB2555実測図 (1/120) …… 25
Fig.22 掘立柱建物SB2560実測図 (1/80) …… 26
Fig.23 掘立柱建物SB2565実測図 (1/80) …… 27
Fig.24 掘立柱建物SB2570・2575実測図 (1/80) …… 28
Fig.25 掘立柱建物SB2580・2590実測図 (1/80) …… 29
Fig.26 掘立柱建物SB2585・2595・2616実測図 (1/80) …… 31
Fig.27 掘立柱建物SB2610・2613，柵SA2609・2611実測図 (1/80) …… 32
Fig.28 掘立柱建物SB2615・2617実測図 (1/80) …… 33
Fig.29 掘立柱建物SB2620・2689，柵SA2686実測図 (1/80) …… 35
Fig.30 掘立柱建物SB2625AB・2650実測図 (1/80) …… 36
Fig.31 掘立柱建物SB2630・2672実測図 (1/80) …… 37
Fig.32 掘立柱建物SB2635・2640・2645AB実測図 (1/80) …… 折込
Fig.33 掘立柱建物SB2655・2675・2683実測図 (1/80) …… 40
Fig.34 掘立柱建物SB2660実測図 (1/80) …… 41
Fig.35 掘立柱建物SB2665・2668・2688実測図 (1/80) …… 42

Fig.36　掘立柱建物SB2673・2687AB実測図 (1/80) …… 43
Fig.37　掘立柱建物SB2674・2691・2695実測図 (1/80) …… 44
Fig.38　掘立柱建物SB2676・2696，柵SA2708実測図 (1/80) …… 46
Fig.39　掘立柱建物SB2677・2679・2685実測図 (1/80) …… 47
Fig.40　掘立柱建物SB2681・2682実測図 (1/80) …… 48
Fig.41　掘立柱建物SB2692・2693・2697実測図 (1/80) …… 51
Fig.42　掘立柱建物SB2694実測図 (1/80) …… 53
Fig.43　掘立柱建物SB2728・2739実測図 (1/80) …… 54
Fig.44　掘立柱建物SB3223・3225・3229実測図 (1/80) …… 55
Fig.45　掘立柱建物SB3227・3228実測図 (1/80) …… 56
Fig.46　掘立柱建物SB3711・3968・4078実測図 (1/80) …… 57
Fig.47　掘立柱建物SB4620・4625，柵SA4624実測図 (1/80) …… 59
Fig.48　柵SA321・2564・2612・2684実測図 (1/80) …… 61
Fig.49　柵SA2701 ～ 2704・2714実測図 (1/80) …… 折込
Fig.50　柵SA2707・2709・2721・2753・3969・3971・3972実測図 (1/80) …… 64
Fig.51　掘立柱建物SB3978，柵SA3977・3981・4021・4079・4652・4654実測図 (1/80) …… 66
Fig.52　大楠地区溝配置図 (1/1,000) …… 68
Fig.53　境界溝SD2680・2700・2705 (94次) 土層図 (1/60) …… 70
Fig.54　境界溝SD2705 (194次) 土層図 (1/60) …… 71
Fig.55　区画溝SD2011・2012 (76次)・2581・2582 (88・196次)・2350 (92-2・110次)・2710 (94次)・3985 (139次) 土層図 (1/60) …… 73
Fig.56　大楠地区井戸・木棺墓・地鎮遺構・炉跡配置図 (1/1,000) …… 83
Fig.57　井戸SE2551 ～ 2554実測図 (1/40) …… 85
Fig.58　井戸SE2556 ～ 2559・2561 ～ 2563実測図 (1/40) …… 87
Fig.59　井戸SE2621 ～ 2624実測図 (1/40) …… 89
Fig.60　井戸2715・2720・2725・2730・2735・2740・3069・3070・3975実測図 (1/40) …… 91
Fig.61　井戸SE3960・3965・3970実測図 (1/40) …… 92
Fig.62　木棺墓SX2600実測図 (1/40) …… 94
Fig.63　地鎮遺構SX2670実測図 (1/40,1/10) …… 94
Fig.64　炉跡SX2751・4019実測図 (1/20) …… 95

付　図　目　次

付　図　大楠地区遺構配置図 (1/400)

Tab. 目 次

頁
Tab. 1 大楠地区調査次数一覧 …… 4
Tab. 2 大宰府史跡調査研究指導委員会委員一覧 …… 5
Tab. 3 大楠地区遺構一覧（官衙跡Ⅶ掲載分）…… 98

PL. 目 次

巻頭PL. 1 大楠地区から四王寺山を望む (92次，南から)
巻頭PL. 2 (1) 88次調査区全景 (右が北)
(2) 92次調査区全景 (上が北)
巻頭PL. 3 (1) 92次調査区全景 (東から)
(2) 92-2次調査区全景 (上が北)
巻頭PL. 4 (1) 94次調査区南半全景 (北から)
(2) 94次調査区北半全景 (南から)
巻頭PL. 5 (1) 94次調査区北半全景 (南から)
(2) 138次調査区全景 (上が北)
巻頭PL. 6 (1) 掘立柱建物SB2655 (南から)
(2) 井戸SE3970 (下が北)
(3) 地鎮遺構SX2670 (北から)
PL. 1 大宰府政庁跡と大楠地区 (上が北)
PL. 2 四王寺山から大宰府政庁周辺を望む (北から)
PL. 3 大宰府政庁跡と政庁周辺官衙跡遠景 (北から)
PL. 4 政庁周辺官衙跡遠景 (西から)
PL. 5 大楠地区から四王寺山を望む (92次，南から)
PL. 6 大楠・広丸地区から南を望む (北から)
PL. 7 (1) 88次調査区全景 (右が北)
(2) 88次調査区全景 (南から)
PL. 8 (1) 92次調査区北半全景 (上が北)
(2) 92次調査区北半全景 (東から)
PL. 9 (1) 92次調査区南半全景 (上が北)
(2) 92次調査区南半全景 (東から)
PL.10 (1) 92-3次調査区全景 (東から)
(2) 92-3次調査区西側 (北から)
PL.11 (1) 94次調査区南半全景 (上が北)

(2) 94次調査区南半全景 (北から)

PL.12 (1) 94次調査区北半全景 (上が北)

(2) 94次調査区北半全景 (南から)

PL.13 (1) 94次調査区から西側を望む (東から)

(2) 125次調査区全景 (南から)

PL.14 (1) 138次調査区全景 (上が北)

(2) 138次調査区全景 (西から)

(3) 138次調査区全景 (北から)

PL.15 (1) 139次調査区全景 (下が北)

(2) 139次調査区全景 (東から)

PL.16 (1) 146次調査区東半部 (西から)

(2) 146次調査区西半部 (東から)

PL.17 (1) 152次調査区全景 (北から)

(2) 171次調査状況 (西から)

(3) 171次調査状況 (東から)

PL.18 (1) 194次調査区全景 (南から)

(2) 194次調査区南半部 (北から)

PL.19 (1) 196次調査Aトレンチ (西から)

(2) 196次調査Bトレンチ (東から)

PL.20 (1) 196次調査C・Dトレンチ (北から)

(2) 196次調査C・Dトレンチ (南から)

PL.21 (1) 掘立柱建物SB2550, 木棺墓SX2600 (南から)

(2) 掘立柱建物SB2555 (南から)

(3) 掘立柱建物SB2560・2610 (北から)

PL.22 (1) 掘立柱建物SB2565, 溝SD2572 (南から)

(2) 掘立柱建物SB2575 (東から)

(3) 掘立柱建物SB2580・2590・2616, 溝SD2581・2582 (東から)

PL.23 (1) 掘立柱建物SB2620・2689, 柵2686 (北から)

(2) 掘立柱建物SB2625A・B, 土坑SK2642 (南から)

(3) 掘立柱建物SB2625A・B, 土坑SK2642 (東から)

PL.24 (1) 掘立柱建物SB2630 (南から)

(2) 掘立柱建物SB2635 (南から)

(3) 掘立柱建物SB2635 (東から)

PL.25 (1) 掘立柱建物SB2665・2688 (東から)

(2) 掘立柱建物SB2640, 地鎮遺構SX2670 (東から)

(3) 掘立柱建物SB2645A・B (東から)

PL.26 (1) 掘立柱建物SB2650 (東から)

(2) 掘立柱建物SB2655・2675 (南から)

(3) 掘立柱建物SB2655・2675・2697 (東から)

PL.27 (1) 掘立柱建物SB2660, 柵SA2707, 溝SD2350 (北から)

(2) 掘立柱建物SB2660, 柵SA2707, 溝SD2350 (東から)

(3) 掘立柱建物SB2692, 柵SA2708 (東から)

PL.28 (1) 掘立柱建物SB2550柱掘方

(2) 掘立柱建物SB2555柱掘方

(3) 掘立柱建物SB2620柱掘方

PL.29 (1) 掘立柱建物SB2620柱掘方

(2) 掘立柱建物SB2625A・B柱掘方

PL.30 (1) 掘立柱建物SB2625A・B柱掘方

(2) 掘立柱建物SB2630柱掘方

(3) 掘立柱建物SB2635柱掘方

PL.31 (1) 掘立柱建物SB2645A・B柱掘方

(2) 掘立柱建物SB2655柱掘方

PL.32 (1) 掘立柱建物SB2655柱掘方

(2) 掘立柱建物SB2660柱掘方

PL.33 (1) 掘立柱建物SB2660柱掘方

(2) 掘立柱建物SB2675柱掘方

PL.34 (1) 柵SA2701・2702・2704 (北から)

(2) 柵SA2703・2714 (北から)

PL.35 (1) 柵SA4652・4654 (西から)

(2) 溝SD2350A・B, 2636 (東から)

PL.36 (1) 溝SD2350A・B土層 (西から)

(2) 溝SD2581・2582 (東から)

PL.37 (1) 溝SD2680・2700・2705南半 (北から)

(2) 溝SD2680北半 (北から)

PL.38 (1) 溝SD2700・2705北半 (南から)

(2) 溝SD2705A (194次, 西から)

PL.39 (1) 溝SD2680土層 (南から)

(2) 溝SD2700土層 (北から)

(3) 溝SD2705土層 (北から)

PL.40 (1) 溝SD2700・2705土層 (南から)

(2) 溝SD4653 (北から)

(3) 溝SD4655 (南東から)

PL.41 (1) 井戸SE2551 (西から)

(2) 井戸SE2552土層 (南から)

(3) 井戸SE2552 (南から)

PL.42 (1) 井戸SE2553 (東から)

(2) 井戸SE2554 (西から)
(3) 井戸SE2554 (南から)
PL.43 (1) 井戸SE2556 (東から)
(2) 井戸SE2557 (東から)
(3) 井戸SE2558 (南から)
PL.44 (1) 井戸SE2561 (南から)
(2) 井戸SE2562 (東から)
(3) 井戸SE2563 (南東から)
PL.45 (1) 井戸SE2621 (東から)
(2) 井戸SE2621下部 (東から)
(3) 井戸SE2622 (北から)
PL.46 (1) 井戸SE2623 (東から)
(2) 井戸SE2623細部 (東から)
(3) 井戸SE2624 (西から)
PL.47 (1) 井戸SE2715 (北から)
(2) 井戸SE2715 (西から)
(3) 井戸SE2720・2725 (東から)
PL.48 (1) 井戸SE2730 (東から)
(2) 井戸SE2735 (東から)
(3) 井戸SE2740 (南から)
PL.49 (1) 井戸SE3960・3965，土坑SK3965 (北から)
(2) 井戸SE3960 (南から)
(3) 井戸SE3965 (南西から)
PL.50 (1) 井戸SE3970 (下が北)
(2) 井戸SE3970 (北から)
(3) 井戸SE3970 (東から)
PL.51 (1) 井戸SE3975 (東から)
(2) 木棺墓SX2600 (北から)
PL.52 (1) 地鎮遺構SX2670 (北から)
(2) 地鎮遺構SX2670 (蓋除去後，北から)
(3) 炉跡SX2751 (南から)

凡　　例

1　本書に掲載の遺構実測図は，国土調査法第Ⅱ座標系（日本測地系）をもとに基準点を設け作成している。

2　遺構番号の頭に付した記号は，以下の遺構を示す。

SA：柵，SB：建物，SD：溝，SE：井戸，SK：土坑，SX：その他の遺構

第Ⅰ章　緒　言

（1）特別史跡大宰府跡

万葉歌人柿本人麻呂により「大王之遠乃朝庭」と詠まれた大宰府は，古代律令国家において西海道諸国島に対する内政総監の府として君臨し，海辺防備及び中国大陸・朝鮮半島との外交・交易の拠点としても重要な役割を担った。また，自らを「天下之一都会」（『続日本紀』神護景雲三年（769）十月甲辰条）と称した如く，碁盤目の街割りが施行され，平城京・平安京に次ぐ規模を誇る最大の地方都市であった。しかし，他に類をみない大宰府のみの特質として，大野城・基肄城・水城大堤等の古代山城及び土塁からなる堅固な防衛施設によって護られた城郭都市という二面性を持つ。その大宰府の中核となる遺跡が，福岡県太宰府市域の北側に位置し，都府楼跡とも称される国指定特別史跡の「大宰府跡」（以下，政庁跡）である。

「天下の一都　会」

特別史跡大宰府跡

現在，政庁跡のすぐ南側を県道筑紫野太宰府線が東西方向に走るが，県道以北は国指定特別史跡として面積約29.9haもの土地が保存され，政庁跡は史跡公園として整備・活用されており，梅・桜の開花時期ともなると大勢の花見客で賑わっている。また，政庁跡の背後には，天智天皇四年（665）に築城された朝鮮式山城の一つである大野城跡を擁する四王寺山が望め，四王寺山より派生した月山及び蔵司二つの丘陵が，恰も政庁跡を抱くかの如く南へと延びる。一方，県道以南に目を転じると，打って変わって個人住宅・アパートが蝟集し，住宅エリアとして開発されている。この様に，県道を挟んで，開発の手から逃れた政庁跡から観世音寺にかけての一帯は，自然豊かな風光明媚の様相を呈するに至っている。

ここで，大宰府史跡の調査歴について概要を記しておこう。政庁跡の発掘調査は，昭和43年10月19日，政庁中門跡の調査を嚆矢とする。調査の結果，Ⅰ期（7世紀後半）・Ⅱ期（8世紀前半～10世紀半ば）・Ⅲ期（10世紀後半～12世紀前半頃）に渡る遺構が確認され，Ⅲ期の建物は天慶四年（941），藤原純友の乱で焼失したⅡ期の建物を10世紀後半に再建したものであることなど重要な事実が次々に明らかとなった。昭和47年に九州歴史資料館が発足して以降は，当館が大宰府史跡の発掘調査を担当し，出土品の展示・保管を行うとともに，九歴講座，九歴論集等により調査研究成果を公開し，大宰府史跡に関する情報発信を行っている。

また，政庁跡前面域の県道以南から御笠川にかけての地区は，今でこそ大宰府に関連する官衙が広がっていると判明したが，土地区画整理事業が始まった昭和54年頃は誰しも予想し得なかった。大宰府史跡17次調査で礎石建物が発見されたのを初めとして，32次調査では掘立柱建物が2棟発見され，その後，官衙と呼ぶに相応しい大規模な建物群や柵，地域を区切る南北溝等が続々と発見され，特に南北溝SD2340からは天平六年（734）・同八年（736）の紀年銘が書かれた木簡，紫草に関する木簡等が出土し，鏡山猛が想定した県道を南限とする方2町の府庁域が県道以南にも広がっていることが明らかとなった。

大宰府関連の官衙群

現在では，政庁跡前面域の建物群は，東から日吉地区官衙，政庁前面広場を挟んで不丁地区官衙，大楠地区官衙，広丸地区官衙と小字の名称で区分している。なお，政庁前面の区画整理事業地の調査においては，将来の史跡指定に備え遺構の完掘は行わず，地権者に対しては発見された遺構の内容を文書で示すとともに，遺構の保存に協力を頂いている次第である。

（2）調査の経過

本報告書は，大宰府政庁周辺官衙跡の正式報告書の７冊目にあたり，政庁跡南西側の大楠地区で検出された遺構・遺物を網羅的に報告する予定であったが，大楠地区は遺構密度・遺物量が不丁地区に次いで多量で，建物の数では不丁地区官衙と遜色はない。ただ，単年度での報告となると予算的・時間的制約により当方の意図した報告内容と大きく乖離する恐れがあった。そこで，大楠地区官衙跡の報告にあたっては，遺構編・遺物編の２分冊とし，遺構編を当年度に刊行し，遺物編は次年度刊行の予定とした。従って，本報告書では遺構の時期については特にふれず，遺物編において改めて言及したい。

今回，大楠地区官衙として報告する範囲は，南北が県道筑紫野太宰府線から御笠川までの長さ約200mで，東縁は不丁地区官衙と大楠地区官衙とを区切る南北溝SD320西肩部までとなる。西縁は，94次調査区東端の南北溝SD2680とSD320との心々距離が官衙域一区画の東西幅（単位幅）に近似する約90mを測ることから，SD2680を境界溝とすることが可能である。しかし，小字の「大楠」と「広丸」との境は，政庁中軸線から西に約330mの地点に存在した里道が境界となっており，一区画90mを単位幅とすると政庁中軸線から４区画目の2/3の位置にあたり，小字でいう大楠地区官衙は約２区画分を占めることとなる。

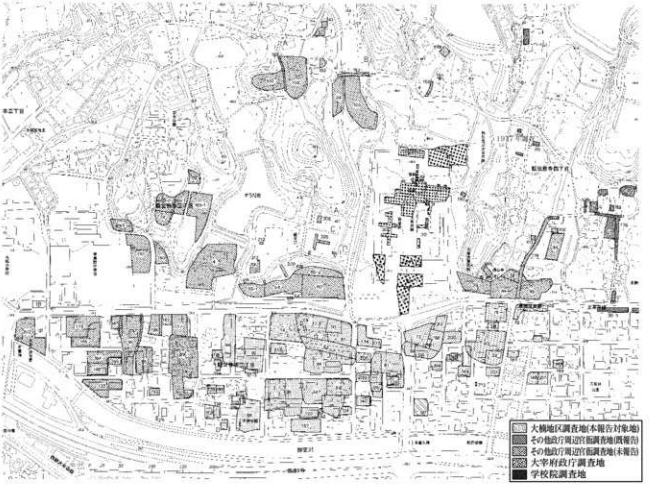


Fig.1　大宰府政庁周辺官衙跡調査地一覧図（1/6,000）

報告する調査次数は，大宰府史跡14・14補・14-3・76・88・92-1～3・94・104・110・125・138・139・146・152・171・194・196次調査である。なお，14・14補・76・104・110次調査に関しては，SD320以東を不丁地区として報告しているので，今回はSD320西肩部以西の遺構を掲載した。14・14補・14-3・76・88・92-1～2・94次調査が観世音寺地区土地区画整理事業に係るもので，92-3次調査及び104次調査以降が住宅建設に伴う緊急調査として実施したものである。

14・14次補足調査区は，県道筑紫野太宰府線の南縁に接し，大楠・不丁地区官衙に跨がり，両官衙との境をなす南北溝SD320を検出した。溝は幅約16mで，溝中からは延暦十一年（792）と推定される紀年銘木簡を含む15点が出土し，最下層からは奈良時代の土器が多量に出土するなど貴重な成果が得られた。他の遺構としては，掘立柱建物・柵・井戸等がある。

76次調査区も大楠・不丁地区官衙に跨がり，鏡山条坊復原案による右郭六条二坊に該当する。調査の結果，14次調査で検出された南北溝SD320の南延長部が確認され，溝の最終埋没が11世紀後半代であることが明らかになった。溝からは11点の木簡が出土し，76次調査では合わせて17点の木簡が確認された。掘立柱建物（SB2005）は不丁地区官衙に含まれるが，朱雀門推定地から東西に延長した線から北に約30mの位置にあたり，御笠川付近まで建物群が広がっていることを確認した。

境界溝SD320

88次調査区は76次調査区のすぐ西側に位置し，鏡山条坊復原案による右郭六条三坊に該当する。発掘調査では，掘立柱建物10棟，溝７条，井戸11基，土坑，木棺墓等を検出していたが，掘立柱建物に関しては図面検討の結果，新たに５棟を確認した。SB2550は桁行８間規模の二面廂建物で，SB2555はそれより規模が大きい桁行10間の二面廂建物であり，またSB2560は桁行７間の四面廂建物であった。ただ，不丁地区官衙の建物に比して，柱掘方が小規模な円形を呈し，柱間も狭く，井戸を伴うことなどから官衙ではなく，官人居宅の想定がなされた。これにより，大楠・広丸地区は官人居住域と呼称されてきた。

官人居住域

92次調査区は14次調査区の南西側にあたり，88次調査で官人居宅とされた建物の広がりを捉むことを目的とした。調査の結果，掘立柱建物９棟，柵３列，井戸４基，溝，地鎮遺構，土坑等を検出した。東西溝SD2350は，不丁地区官衙の83次調査区から110次調査区を経由して94次調査区東端で検出した南北溝SD2680まで延びるもので，官衙域の南北を画す溝と考えられる。また，調査区の南東部においては，製塩土器が纏まって出土しており，厨的施設が存在した可能性を示す。

厨的施設

94次調査区は92次調査区の西側に接し，92次調査区の南西隅で確認した南北溝SD2680の延長部を把握することを目的として調査を行った。その結果，SD2680とSD320の心々距離は約90mを測り，不丁地区官衙で確認した一区画の東西幅（溝心々距離で約87m）に近似する数値で，SD2680は官衙域の東西を画す溝であることが確かめられた。

104次調査区は76次調査区の北側に位置する。南北溝SD320の再確認を目的としたためSD320の調査においては上面検出に留めた。その西側のトレンチでは井戸２基を検出した。110次調査区は14次調査区の南側で，東西方向の区画溝SD2350の延長部を確認することを目的とした。調査の結果，SD320とSD2350の接続部を確認し，SD2350は東西両方向に延長していることが判明した。125次調査区は94次調査区の西側に位置する。土坑を数基検出した程度で，顕著な遺構はみられなかった。

138次調査区は88次調査区の西側にあたり，狭小な調査区ながら建物・柵・溝・井戸・土坑等を検出した。なお，建物及び柵は図面検討の結果，確認したものである。139次・146次調査区は138次調査区の北側で，建物・柵・溝・土坑を検出した。柵SA3981は両調査区を東西方向に走るもので，区画施設になるとみられる。152次調査区は138次調査区の西隣で，ピットを検出したにすぎない。171次調査区は138次調査区の南側で，大楠地区の最南端にあたる。また，この場所は小字「大楠」と「油田」との字境の段落ちとなっており，旧御笠川の流路痕跡とみられる。重機により地表面から2.3m掘り下げたが，再堆積の砂層を確認したに留まる。

194次調査区は125次調査区の南側にあたり，94次調査区で検出した南北溝SD2705の西延長部を確認した。SD2705は逆L字形に屈曲する溝であるが，性格的には今ひとつ判然としない。196次調査区は88次調査区の北西側に設定したトレンチで，一部88次調査区と重複する。調査の結果,88次調査区から西側に延びる柵SA2664と東西溝SD2582の西延長部を確認した。

以上のように，大楠地区官衙においては，19を数える調査が行われているが，92次調査区の北・東・南側及び88次調査区の南西側には未調査箇所が存在し，様相が不明な部分が多い。

先に報告した不丁地区官衙と比較すると，建物の出現は不丁地区官衙よりも遅れる。製鉄・鋳造関連遺物や漆付着土器等の生産に関わる遺物や製塩土器の出土量も少なく，工房と言えるような状況ではない。また，88次調査で確認した桁行８間・10間の掘立柱建物は，大規模ではあるが柱掘方が小規模な円形を呈し，柱間も狭いことなどから官衙建物ではなく，官人居宅との見解が示された。しかし，居宅にしては８間・10間という規模は余りにも大規模で，ましてや行政の中枢部である政庁域に官人の居宅が侵入することが可能か再検討する必要がある。

Tab.1　大楠地区調査次数一覧

No.	次数	地区略号	面積㎡	調査期間	地　番（太宰府市）	報告書
1	14	6AYM	333	710820～710930	観世音寺字大楠333	略S46
2	14補	6AYM-B	655	831121～840124	観世音寺字大楠333-1	概S59
3	14-3	6AYM-B	121	831116	観世音寺字大楠333-1	不掲載
4	76	6AYM-B-N	1,150	810401～810911	観世音寺字大楠325	概S56
5	88	6AYM-C-L	1,200	840306～840508	観世音寺字大楠323-1	概S59
6	92-1	6AYM-C-Q		840702～841008	観世音寺字大楠328･331･335-1	概S59
7	92-2	6AYM-C-R		841019～841209	観世音寺字大楠328･331･335-1	概S58
8	92-3	6AYM-C	24	070411～070420	観世音寺２丁目153	史跡Ⅴ
9	94	6AYM-B-T	1,380	841210～850405	観世音寺字大楠330-1	概S60
10	104	6AYM-B-P	740	861127～870128	観世音寺字大楠326･327	概S62
11	110	6AYM-B-T	350	871130～871214	観世音寺字大楠332-2	概S63
12	125	6AYM-C-U	130	901029～901031	観世音寺字大楠329-6	概Ｈ２
13	138	6AYM-C-M	137	911109～911218	観世音寺字大楠322-4	概Ｈ４
14	139	6AYM-C-P	21	911109～911112	観世音寺字大楠329-18	概Ｈ４
15	146	6AYM-C-P	41	920907～920924	観世音寺字大楠329-21	概Ｈ４
16	152	6AYM-C-N	140	931027～931104	観世音寺字大楠321-5	概Ｈ５
17	171	6AYM-C-J	48	950426	観世音寺字大楠433-10	不掲載
18	194	6AYM-C-U	105	051109～051227	観世音寺２丁目166	史跡Ⅳ
19	196	6AYM-B	18	060605～060608	観世音寺２丁目129･130	史跡Ⅴ

（概S○：大宰府史跡昭和○年度発掘調査概報，史跡○：大宰府史跡発掘調査報告書○平成△年度）

（3）調査組織

九州歴史資料館は，大宰府史跡の計画調査・研究，住宅改築等に伴う緊急発掘調査，歴史資料の収集・保管・調査研究，展示及び整備等を所掌する機関として，昭和47年４月，太宰府市に設置され，それ以降は同館調査課が主として大宰府史跡の発掘調査を担っている。

大宰府史跡の発掘調査及び報告書刊行にあたっては，５ヶ年を一つの括りとした年次ごとの調査計画を立案し，調査の実施に際しては諮問機関である10名の委員で構成される「大宰府史跡発掘調査指導委員会」（昭和59年に「大宰府史跡調査研究指導委員会」と改称し，委員も15名に増員）に諮り，その指導・助言のもとに行っている。現在，委員の構成は，国史学５名，考古学４名，建築史学２名，造園学２名，都市工学１名，土木工学１名の15名からなる。

Tab.2　大宰府史跡調査研究指導委員会委員一覧　（在任年順，◎は委員長経験者を表す）

氏　名	分　野	職（就任時）	在任期間
◎竹内　理三	国　史	早稲田大学教授	S43～S58
鏡山　猛	考　古	九州大学教授	S43～S46
浅野　清	建　築	大阪市立大学教授	S43～S62
井上　辰雄	国　史	熊本大学教授	S43～S58
井上　光貞	国　史	東京大学教授	S43～S56
大田　静六	建　築	九州大学教授	S43～S58
◎岡崎　敬	考　古	九州大学助教授	S43～H２
岸　俊男	国　史	京都大学教授	S43～S61
坂本　太郎	国　史	國學院大学教授	S43～S55
坪井　清足	考　古	奈良国立文化財研究所 平城宮跡発掘調査部長	S43～H7
◎小田富士雄	考　古	九州大学助手	S43～
◎平野　邦雄	国　史	東京女子大学教授	S59～H7
狩野　久	国　史	奈良国立文化財研究所 飛鳥藤原宮跡発掘調査部長	S59～
◎笹山　晴生	国　史	東京大学助教授	S59～H22
澤村　仁	建　築	九州芸術工科大学教授	S59～H24
杉本　正美	造　園	九州芸術工科大学教授	S59～
中村　一	造　園	京都大学教授	S59～H19
◎横山　浩一	考　古	九州大学教授	S59～H11
渡辺　定男	都市工学	東京大学教授	S59～
八木　充	国　史	山口大学教授	S63～
川添　昭二	国　史	九州大学教授	S63～H17
鈴木　嘉吉	建　築	奈良国立文化財研究所長	S63～
西谷　正	考　古	九州大学教授	H4　～H19
佐藤　信	国　史	東京大学教授	H6　～
坂上　康俊	国　史	九州大学教授	H8　～
田中　琢	考　古	奈良国立文化財研究所長	H8　～H10
町田　章	考　古	奈良国立文化財研究所長	H11～H16
山中　章	考　古	三重大学教授	H12～
田辺　征夫	考　古	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所長	H17～H22
林　重徳	土木工学	佐賀大学教授	H18～
石松　好雄	考　古	元九州歴史資料館副館長	H20～H23
尼崎　博正	造　園	京都造形芸術大学教授	H20～
松村　恵司	考　古	独立行政法人国立文化財機構 奈良国立文化財研究所長	H23～
森　公章	国　史	東洋大学教授	H23～
高橋　章	考　古	求菩提資料館長	H24～
箱崎　和久	建　築	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所	H25～

前述した如く，当館は昭和47年に発足し，調査体制も一応整備され，大宰府史跡を総合的・学術的に解明することを目標に掲げた調査計画を立案し，実施しているところである。大宰府史跡の発掘調査は，昭和43年度に始まる１次調査から平成26年度に実施した220次調査（蔵司地区）の47年間にも及び，その間多くの職員の出入りがあった。また，平成11年度までは概要報告書という体裁で発掘調査の成果を公表し，正式報告書の刊行を先送りしてきた。しかし，政庁前面域の発掘調査に携わった担当職員も殆どが現役を引退し，発掘調査及び概要報告書の作成に全く携わっていない職員が正式報告書の作成を行っている状況である。こうした弊害をなくすため，平成12年度以降は概要報告書ではなく，報告すべき遺構・遺物を網羅した年次ごとの報告書を作成し，従前のやり方を改めている。

なお，平成19年度までは，九州歴史資料館調査課が大宰府史跡の発掘調査を担当してきたが，平成20年度の組織改編により，学芸一課・学芸二課・調査課が学芸調査室として統合され，その下に学芸班・調査班がおかれ班体制となり，調査班が発掘調査を担当することとなった。また，平成22年７月１日には太宰府の地にあった九州歴史資料館が小郡市に移転し，同年11月21日に新施設が開館した。さらに，平成23年度の組織改編により，総務室・学芸調査室・文化財調査室の三室構成となり，学芸班が学芸普及班に，調査班が調査研究班へと改称し，以後，大宰府史跡の調査研究は調査研究班が担っている。

大宰府政庁跡周辺官衙跡大楠地区調査関係者一覧

大楠地区官衙の発掘調査及び報告書関係者は，以下のとおりである。なお，館長は昭和47年度から，副館長は関係年度のみ氏名を掲載した。

九州歴史資料館

館　長	鏡山　　猛(S47 ～ 55)	副館長	牟田　重夫(S56)
	田村　圓澄(S56 ～H３)		武久　耕作(S57・58)
	吉久　勝美(H４～７)		藤井　　功(S59)
	高橋　良平(H８・９)		高木　康生(S61 ～ 63)
	光安　常喜(H９～ 13)(兼務)		前田　栄一(H１～３)
	森山　良一(H14 ～ 19)(兼務)		石松　好雄(H４～８)
	西谷　　正(H20 ～ 24)		柳田　康雄(H14)
	荒巻　俊彦(H25)		橋口　達也(H16)
	杉光　　誠(H26 ～)		木下　　修(H19)
調査課長	石松　好雄(S56 ～H１)	学芸調査室長	児玉　真一(H20)
	栗原　和彦(H２～H８)		小田　和利(H21 ～)
	横田賢次郎(H９～ 13)		
	高橋　　章(H14 ～ 16)		
	児玉　真一(H17 ～ 19)		

14次(S46)	石松好雄	倉住靖彦	高倉洋彰	横田賢次郎	森田　勉	高橋　章
14補(S58)	石松好雄	倉住靖彦	高倉洋彰	横田賢次郎	森田　勉	高橋　章
76次(S56)	石松好雄	倉住靖彦	高倉洋彰	横田賢次郎	森田　勉	高橋　章
88次(S59)	石松好雄	倉住靖彦	高倉洋彰	横田賢次郎	森田　勉	高橋　章

92次(S59)	石松好雄	倉住靖彦	高倉洋彰	横田賢次郎	森田　勉	高橋　章
94次(S59)	石松好雄	倉住靖彦	高倉洋彰	横田賢次郎	森田　勉	高橋　章
104次(S61)	石松好雄	◎高倉洋彰	横田賢次郎	森田　勉	赤司善彦	
110次(S62)	石松好雄	○高倉洋彰	○横田賢次郎	森田　勉	赤司善彦	
125次(H2)	栗原和彦	橋口達也	横田賢次郎	赤司善彦	吉村靖徳	
138次(H3)	栗原和彦	橋口達也	横田賢次郎	赤司善彦	吉村靖徳	
139次(H3)	栗原和彦	橋口達也	横田賢次郎	赤司善彦	吉村靖徳	
146次(H4)	栗原和彦	橋口達也	○横田賢次郎	小田和利	◎吉村靖徳	
152次(H5)	栗原和彦	○横田賢次郎	小田和利	吉村靖徳	◎小川泰樹	
171次(H7)	◎栗原和彦	横田賢次郎	小田和利	小川泰樹	杉原敏之	
194次(H17)	児玉真一	小田和利	杉原敏之	◎岡寺　良		
196次(H18)	児玉真一	杉原敏之	◎岡寺　良	坂本真一		
92-3次(H19)	児玉真一	杉原敏之	岡寺　良	◎坂本真一		

本報告書作成にあたり，保存処理については横田義章・加藤和歳が，写真撮影は各調査担当の他に石丸洋・北岡伸一が担当した。上記調査に関係した補助員は，山本信夫・齋部麻矢である（◎印：調査主任，○印：調査担当）。

本報告書作成に係る平成26年度の関係者は，以下のとおりである。

九州歴史資料館

総　括	館　　長	杉光　　誠
	副 館 長	伊崎　俊秋
庶　務	総務室長	塩塚　孝憲
	総務班長	山崎　　彰
	事務主査	南里　成子
	事務主査	宮崎　奈巳
	主　　事	秦　　健太
報　告	学芸調査室長	小田　和利
	調査研究班長	杉原　敏之
	主任技師	下原　幸裕
	主任技師	岡田　　諭
整　理	整理補助員	高田いく子
	整理作業員	市川千香枝　　中田千枝子　　堤　　直美

なお，本報告書作成にあたり，太宰府市教育委員会文化財課諸氏には有益な御教示を賜わった。末筆ながら，記して感謝したい。

〔追記〕

本年度，大宰府史跡調査研究指導委員会において多大なる貢献をされた元委員長の平野邦雄氏と元委員の澤村仁氏の二人が逝去された。謹んでご冥福をお祈りいたします。

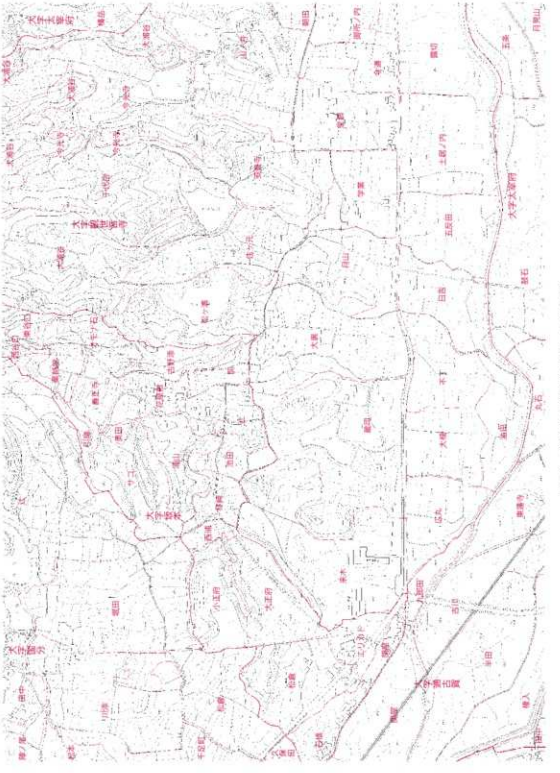


Fig.2　大宰府史跡地域小字図（1/7,500）

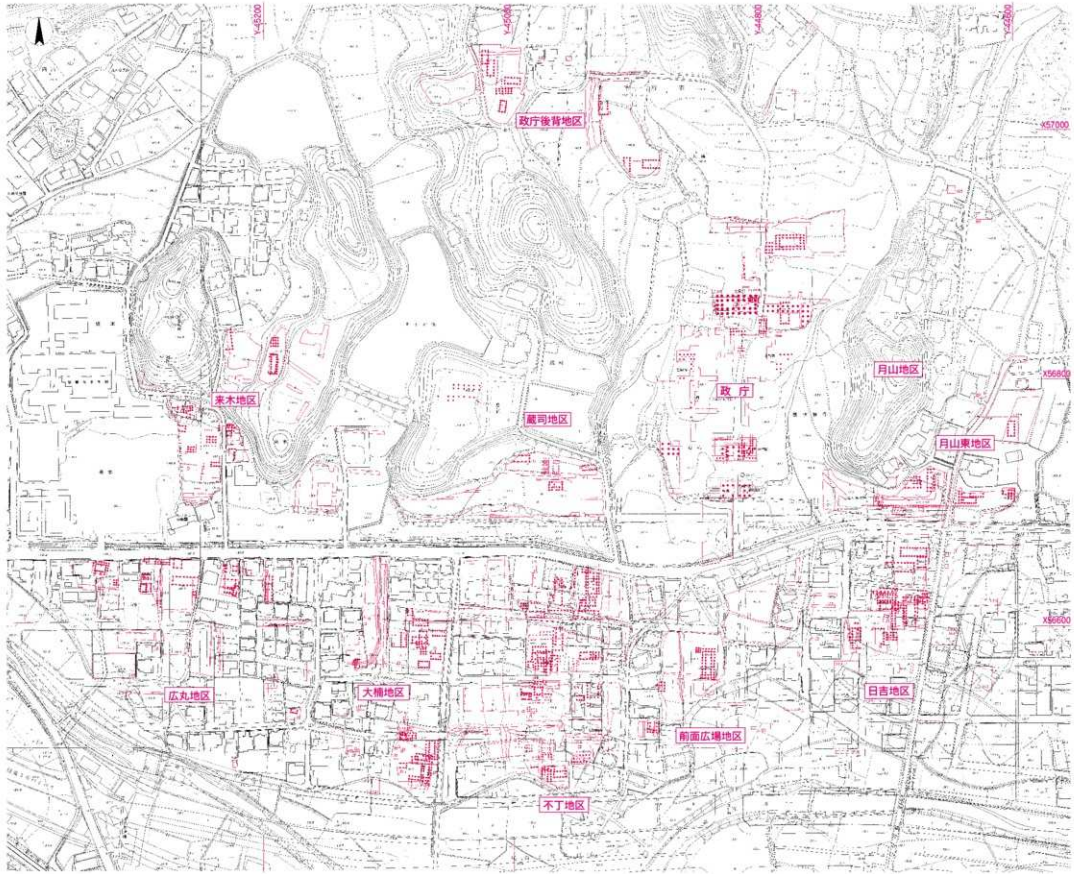


Fig. 3　大宰府政庁跡及び周辺官衙跡検出遺構配置図（1/3,000）

第Ⅱ章　調査の概要

（1）調査の概要

大宰府政庁周辺官衙跡・大楠地区は，調査略号でいうと6AYM-C区にあたる（Fig. 4）。そのなかで，19地点（補足調査を含む）の調査を実施してきた。ここでは，昭和46年度より実施した，各次の調査の概要について述べる。なお，14次・14次補足・76次・110次調査については，既刊の不丁地区の報告において既に概要を述べているが，範囲としては大楠地区にも属する部分があることから，改めて触れることとしたい。

1）14次・14次補足調査（Fig. 6）

調査期間：1971年8月20日～9月30日（14次）
1983年11月21日～1984年1月24日（14次補足）
1983年11月16日（14-3次）

調査面積：333㎡（14次）・655㎡（14次補足）・121㎡（14-3次）

概　　要：調査地は大楠地区の北東隅に位置する。14次調査は住宅建設に先立ち実施したものであるため部分的な調査にとどまったが，1983年度になって区画整理事業が及んできたことから隣接地を含め補足調査を実施した。遺構面は床土直下に存在し，全体に浅いが，南側では若干深くなる。調査地の西側はトレンチによる遺構の確認を行っているが，顕著な遺構が確認

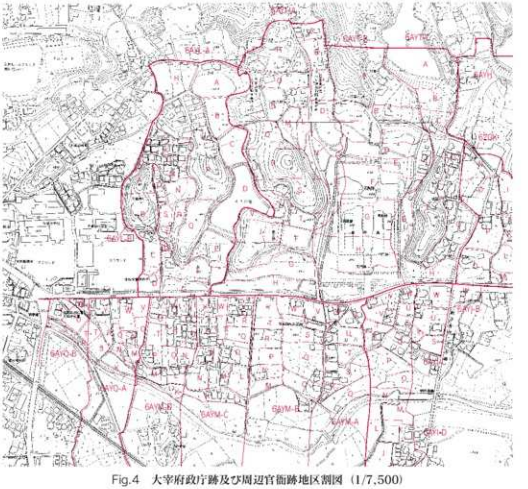


Fig.4　大宰府政庁跡及び周辺官衙跡地区割図（1/7,500）

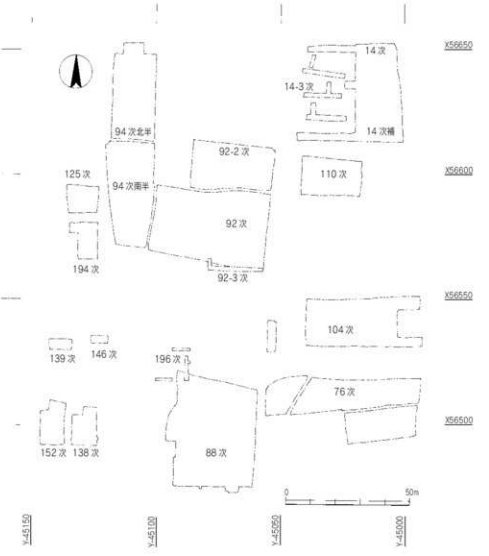


Fig.5　大楠地区調査区配置図（1/1,500）

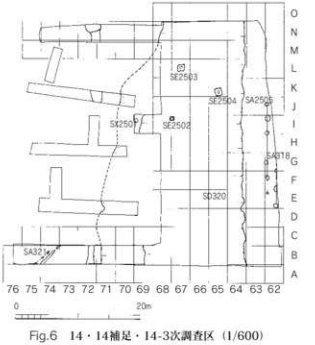


Fig.6　14・14補足・14-3次調査区（1/600）

できなかったため，それ以上の拡張は行っていない。

主な検出遺構は，柵１列，溝１条，井戸３基，瓦組遺構１基，土坑２基などである。このうち南北方向の大溝SD320は，76・104・110次調査によって東側の不丁地区との境界をなす溝であることが判明している。特に，不丁地区東側の境界溝SD2340とともに木簡が出土している点が特筆される。

2）76次調査（Fig. 7）

調査期間：1981年４月１日～９月11日

調査面積：1,150㎡

概　　要：太宰府町（当時）の土地区画整理事業に伴う事前調査で，大楠地区の南東部に位置する。調査の主目的は，14次調査で発見した境界溝SD320の続きを確認することであった。調査地周辺は，南に向かって緩やかに下っていく地形で，調査区の南15m付近で約２mの段落ちとなり，すぐ近くまで御笠川の氾濫原が迫っていたことが窺える。調査区の東西端部付近では表土・床土を除去すると僅かに暗茶色土が残り，これを除くと地山面となる。南側では暗灰色土，茶灰色土，暗茶色土の３層が堆積し，SD320の上では約70㎝の厚さを測る。この３層は主要遺構が廃絶し，埋没した後に堆積したもので，暗茶色土中に中世以降の遺物は認められない。なお，SD320よりも新しい溝SD2010では，埋土の上層に暗茶色土が入る。

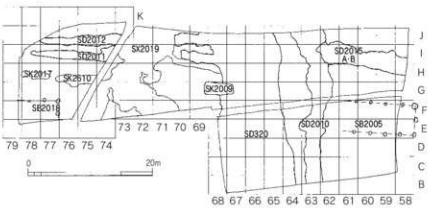


Fig.7　76次調査区（1/600）

主な検出遺構は，建物１棟，溝５条，土坑４基などで，中世以降の遺構は確認していない。この調査では，境界溝SD320に直交する東西方向の溝SD2015A・BやSD2011・2012を確認し，南北にも区画溝が存在することが明らかとなった。

3）88次調査（Fig. 8）

調査期間：1984年3月6日～５月8日

調査面積：1,200㎡

概　　要：調査地は大楠地区の南端に位置する。土地区画整理事業に伴う事前調査で，不丁地区との境をなすSD320の西側一帯にどのような内容の遺構が所在するのかを解明する目的で実施した。遺構面は，調査区の東半では床土の直下で検出したが，西半では北辺を除いて20～30㎝ほどの厚さの黒褐色土に覆われていた。この部分では黒褐色土を除去した後に遺構を確認したことから，遺構の層位的な区分はできなかった。

主な検出遺構は，掘立柱建物10棟，柵１列，溝７条，井戸11基，土坑，木棺墓，柱穴などで，政庁前面官衙域の西側では初めてまとまった遺構群を確認した。各遺構は，８世紀後半段階の第Ⅰ期，９世紀前半の第Ⅱ期，９世紀後半の第Ⅲ期，10世紀代の第Ⅳ期に分けられ，それらの遺構が黒褐色土で覆われた後に11世紀中頃以降に木棺墓SX2600が営まれるという変遷が明らかとなった。

4）92次調査 (Fig.9，PL.８～10)

調査期間：1984年7月2日
～12月9日（92次）
1984年10月19日
～12月9日（92-2次）
2007年４月11日
～４月20日（92-3次）

調査面積：1,939㎡

概　　要：調査地は大楠地区の中央付近に位置する。88次調査で建物や井戸などが多数見つかったことを受けて，当地区における建物群の構造や配置などを解明する目的で調査を実施した。92次及び92-2次調査は一連の調査で，排土置き場の都合により南半部と北半部に分けて実施したため，調査次数名を区別している。92-3次調査は住宅建設に先立つ確認調査である。

北半部が表土下で遺構面となるのに対して，南半部では表土と床土を除去すると暗褐色土となり，これを除去すると遺構面となる。

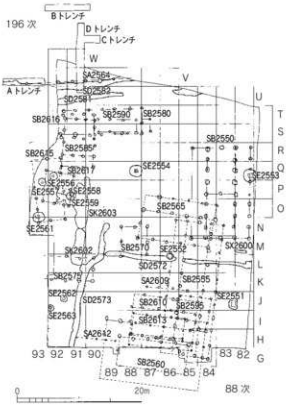


Fig.8　88・196次調査区（1/600）

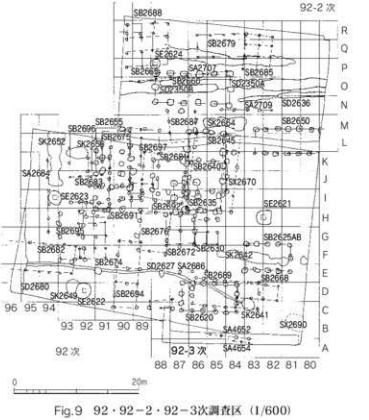


Fig.9　92・92－2・92－3次調査区（1/600）

主な検出遺構は，掘立柱建物９棟，柵３列，井戸4基，溝，土坑，ピット多数で，なかでも大楠地区の西限を画するとみられる南北溝SD2680や地鎮遺構SX2670の発見が注目される成果である。当調査区の遺構群は，８世紀中頃の第Ⅰ期，８世紀後半から９世紀初頭の第Ⅱ期，９世紀から10世紀の第Ⅲ期，12世紀を下限とする第Ⅳ期の変遷が明らかにされている。

5）94次調査（Fig.10，PL.11 ～ 13）

調査期間：1984年12月10日～ 1985年４月５日

調査面積：1,380㎡

概　　要：調査地は大楠地区の北西側に位置する。92次調査で大楠地区の西限とみられるSD2680が見つかったことから，その溝の規模や構造，さらに西側における遺構の存在やその性格の解明を主な目的として調査を実施した。

調査は排土置き場の確保のため，北半部（W地区）と南半部（T地区）に分けて実施した。調査区の北半では表土・床土の直下で遺構面となるが，南に向かうにつれて遺構面上に灰褐色土が堆積しており，一部では暗褐色土が堆積している箇所もある。

主な検出遺構は，溝４条，井戸６基，土坑，ピットなどである。92次調査でも一部が見つかっていた南北溝SD2680の規模が判明し，さらにSD2700・2705の２条の南北溝が新たに見つかったことで，区画溝が西側へ移動し，最終的な理没は12世紀前半と推定される。

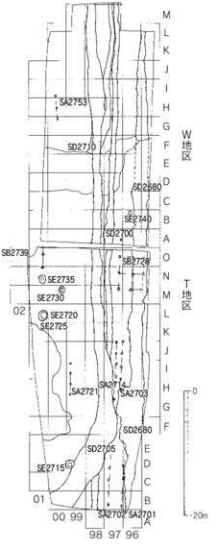


Fig.10　94次調査区（1/600）

6）104次調査（Fig.11）

調査期間：1986年11月27日～ 1987年1月28日

調査面積：740㎡

概　　要：調査地は大楠地区の東端に位置し，14次調査と76次調査で確認された境界溝SD320の中間部分における状況を把握するため調査を実施した。なお，調査地の西側で住宅建設に先立つ事前調査を実施した。

主な検出遺構は，境界溝SD320と井戸２基で，他にはピットが散在する程度で，遺構密度は極めて希薄である。なお，SD320については，溝幅を確定させることが目的であることから，最上層のみを掘削して，完掘はしていない。

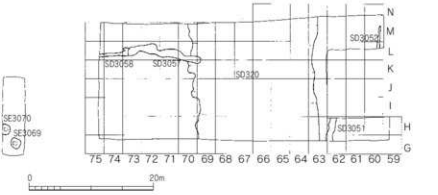


Fig.11　104次調査区（1/600）

7）110次調査（Fig.12）

調査期間：1987年11月30日～12月14日

調査面積：350㎡

概　　要：調査地は大楠地区の東側に位置し，14次調査地の南側にあたる。境界溝SD320と不丁地区で確認した東西溝SD2350との交点になる箇所で，そうした区画施設の在り方の把握が主たる目的であった。調査時は既に土地区画整理事業が完了しており，旧表土は除去されていた。整地土である真砂を除去すると床土があり，その下に遺物包含層である灰褐色土が堆積している。この灰褐色土は調査区南側に向かって厚くなり，南端部では約30cmの厚さとなる。北側では，灰褐色土はほとんど認められず，床土除去後に遺構面となる。また，東側では灰褐色土の下層に暗灰色粘質土があり，これを除去した段階でSD320を検出した。

Fig.12　110次調査区（1/600）

主な検出遺構は，溝２条，土坑などで，南側ではピット群が広がるが，区画溝以外はとくに特筆するほどの遺構・遺物はない。

8）125次調査（Fig.13，PL.13）

調査期間：1990年10月29日～10月31日

調査面積：130㎡

概　　要：調査地は大楠地区の北西側に位置し，94次調査地の西側にあたる。94次調査で見つかった南北溝よりも西側に位置し，大楠地区と広丸地区との間にあたる地域の調査がほとんど行われていなかったことから，大楠地区西側の状況を把握することを目的に調査を行った。

区画整理時の盛土を除去すると，旧耕作土と床土があり，その下に灰褐色砂質土，茶褐色粘質土，茶灰色粘質土などの遺物包含層があり，それらを除去したところで遺構面となる。

主な検出遺構は，土坑６基とピット数基で，遺構の密度は疎らである。

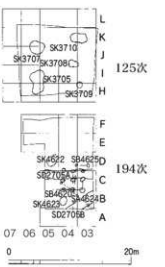


Fig.13　125・194次調査区（1/600）

9）138次調査（Fig.14，PL.14）

調査期間：1991年11月9日～12月18日

調査面積：137㎡

概　　要：調査地は大楠地区の南西部に位置し，152次調査地の東隣にあたる。調査地周辺は大楠地区のなかでもほとんど調査が行われていなかった地域であることから，遺跡の広がりやその性格を考える上での資料を得ることを目的とした調査を行った。表土と盛土を除去すると，茶褐色の遺物包含層があり，その直下が遺構面である。

主な検出遺構は，溝2条，井戸4基，土坑4基，ピット多数で，狭い調査区ながら井戸が密に存在し，周辺に建物群の存在が示唆される。

Fig.14　138・139・146・152次調査区（1/600）

10）139次調査（Fig.14，PL.15）

調査期間：1991年11月9日～11月12日

調査面積：21㎡

概　　要：調査地は大楠地区の西側に位置し，146次調査区の西隣にあたる。調査は住宅建設に先立ち，遺構の存在やその性格を把握することを目的に実施した。区画整理時の盛土（真砂土）を除去すると，旧耕作土と床土となり，その下に黒褐色土が堆積し，さらに下が地山面となる。遺構は，黒褐色土の上面から掘り込むものと，その直下の地山面から掘り込むものとがあり，前者にはSD3979・3980・3985などがある。

主な検出遺構は，溝3条，土坑1基で，その他にピットを確認した。

11）146次調査（Fig.14，PL.16）

調査期間：1992年9月7日～9月24日

調査面積：41㎡

概　　要：調査地は大楠地区の中央に位置し，139次調査地の東隣にあたる。調査は住宅増築に先立ち実施した。区画整理時の盛土を除去すると，旧耕作土と床土となり，その下に遺物包含層を挟んで，地山へ至る。遺構は遺物包含層の上面から掘り込むものと，地山面に掘り込むものとがあり，前者は黒褐色土を埋土とし，後者は茶褐色土を埋土とする。

主な検出遺構は，溝1条，土坑状遺構2基，炉跡などで，この他ピットを多数確認した。坩堝や銅滓等も出土し，周辺に鋳造関係の遺構が存在する可能性が推測される。なお，遺構出土ではないが，新羅土器壺が1点出土している。

12）152次調査（Fig.14，PL.17）

調査期間：1993年10月27日～11月4日

調査面積：140㎡

概　　要：調査地は大楠地区の南西側に位置し，138次調査地の西隣にあたる。調査は集合住

宅建設に先立ち，大楠地区南西部の状況を把握することを目的として実施した。138次調査地では表土と盛土を除去すると茶褐色の遺物包含層がみられたが，本調査区では地山のすぐ上まで撹乱が及んでおり，遺物包含層はなかった。

主な検出遺構は，溝状遺構とピットで，調査区東側にのみ分布し，西側には広がらない。

13）171次調査（PL.17）

調査期間：1995年４月26日

調査面積：48㎡

概　　要：調査地は大楠地区の南西側に位置し，御笠川にほど近い位置にある。調査は住宅建設に先立ち実施した。重機によるトレンチ調査で，地表下2.3mまで掘削したが，御笠川の氾濫に伴う二次堆積砂層が認められたのみである。周辺の地図との照合からも，本調査地は御笠川の氾濫原とみられる。

14）194次調査（Fig.13，PL.18）

調査期間：2005年11月９日～ 12月27日

調査面積：105㎡

概　　要：調査地は大楠地区の西側に位置し，125次調査地の南側に位置する。調査は住宅建設に先立ち実施した。現表土と区画整理時の盛土を除去すると，旧表土，旧耕作土･床土となり，その直下で黄灰色の地山となる。

主な検出遺構は，掘立柱建物２棟，溝３条，土坑２基，整地層１ヶ所で，他にピットなどを確認した。

15）196次調査（Fig. 8，PL.19・20）

調査期間：2006年６月５日～６月８日

調査面積：18㎡

概　　要：調査地は大楠地区の中央に位置し，88次調査地の北西端と一部重複する。調査は住宅建設に先立ち実施した。現表土と区画整理時の盛土を除去すると，旧表土，旧耕作土（床土）があり，その直下には褐色～黒褐色の整地層が堆積しており，さらに下に暗褐色の地山がある。トレンチ調査であるが，Ａ～Ｄの４ヶ所のうちＡトレンチでは整地層が確認できなかった。遺構は整地層の面から掘り込んでいる。

主な検出遺構は，柵１列，溝２条である。

以上のように，大楠地区ではこれまで15地点19次に及ぶ発掘調査を実施しており，掘立柱建物跡や溝，井戸などが多数見つかっている。なお，ここで述べた主要遺構は概報段階のものであり，特に建物や柵については数や規模が異なる場合がある。本書の刊行に際しては，遺構の再整理・再検討を行っており，次章に示す遺構番号や規模等が正式なものとなる。

（2）基本層序（Fig.15～17）

大楠地区官衙は，政庁前面域の西側に位置する。前面域官衙の立地を理解する上で重要なのは，北の四王寺山南麓より派生する丘陵の先端部に位置することや，南側には御笠川が東西方向に流れている点である。こうした地質環境から，各地区の遺構は北側で遺存状況が良く，南側で希薄なことが多い。また，北から派生する丘陵先端部付近では黄褐色粘質土の基盤となる地山を確認することができるが，丘陵谷部の延長では砂層堆積がみられる。本来ならば，これ

地質環境と層序

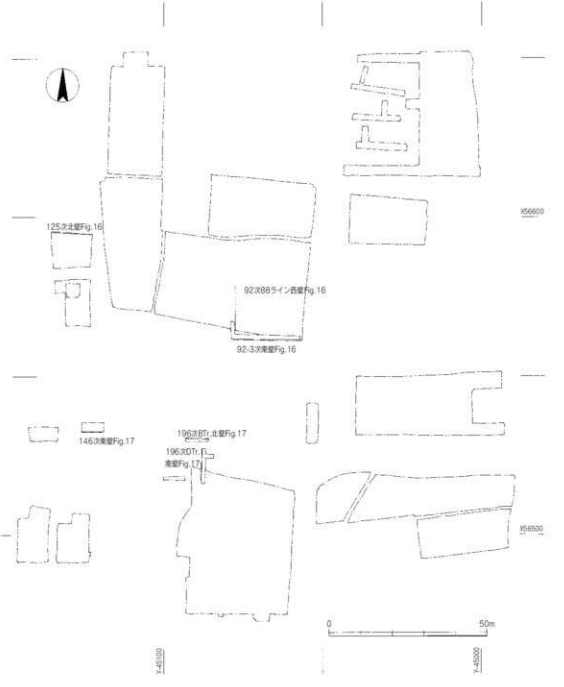


Fig.15　大楠地区基本土層図作成箇所（1/1,500）

ら基盤層の上層に施された施設造営時の整地層が拡がっていたと考えられるが，現状では断片的にしか残っておらず，遺構の前後関係を含めた層位的，時期的検討に支障をきたしている。

ここでは，本地区の建物と整地層との関係を理解する上で基準となる各地区の基本土層を幾つか取り挙げて説明する。

92-2次調査区（Fig.16）

調査区北壁で東西方向の土層観察を行った。厚さ20㎝程度の床土（1）下位で遺構面を覆う暗褐色土（2）を検出した。観察地点での厚さは，20～30㎝程度である。この暗褐色土層は調査区全域に亘って認められる。ただし，遺構面が東北から南西へ傾斜していることから，東北部では総じて薄く，南西部では厚く堆積している。また，この暗褐色土層中位でもSB2665を検出していることから，堆積状況を厳密に把握できない状況がある。さらに，この層を除去後，黒褐色土の整地面を確認し，多くの遺構を検出することができた。検出面の標高は31.80mである。そして，この黒褐色土下位でも一部遺構を確認できる。

92-3次調査区（Fig.16）

調査区南壁で東西方向に土層観察を行った。現表土と床土下位に攪乱層（3～7）がある。そして，その下位に遺構検出面となる暗褐色砂質土（19）の整地層が広がっている。SD4566・4653，SA4654等はこの面で確認することができる。検出面の標高は32.50mである。この整地層は厚さ30㎝程度あり，その下位で灰色砂の地山面となる。さらに，この地山面に切り込む形で南北溝SD4655がある。この検出面の標高は31.80mである。

125次調査区（Fig.16）

調査区北壁で土層観察を行った。この地区は遺構面を覆う包含層が薄い。旧表土下位に僅かに残る床土除去後，灰褐色砂質土，茶褐色砂質土の包含層がそれぞれ15～20㎝程度堆積している。SK3705・3707～3710，SX3706等の遺構は，これらの層の下位となる茶灰色粘質土で確認できる。検出面の標高は31.50m前後である。

146次調査区（Fig.17）

調査区南壁で土層観察を行った。調査地点は真砂土による盛土の下位で旧水田耕作土（灰黒色土）（7）を確認できる。この下位に僅かに残る床土を除去すると，遺構検出面となる黒褐色土（9）の整地層や黒色土（22）の遺物包含層に達する。この面に掘り込まれた遺構は黒褐色土を埋土としている。SX4028等があり，検出面の標高は31.50m前後である。さらに灰黒色土（15）下位となる地山の黄褐色粘質土（24）や茶褐色粘質土の面でも遺構を確認することができる。SK4020やSD4025等があり，遺構埋土は茶褐色土である。以上のように本地区では整地層を挟んで上下２層に遺構が展開している。

196次調査区（Fig.17）

Ｂトレンチ北壁で土層観察を行った。約60㎝の厚さがある区画整理事業の盛土下位に旧耕作土となる黒褐色土，旧耕作土の床土がある。そして，その下位に遺構面となる褐色・黒褐色土の整地層が30～50㎝程度堆積している。ただし，Ｂトレンチ内では，全て溝状遺構のSX4646の堆積層（9～14）である。遺構検出面の標高は31.50mである。そして，本遺構の最下層には黒色粘性シルト層で枝葉を含む腐植土が堆積し，その下位で青黄灰色粘性シルト層（15）の地山に達する。他のトレンチでは，灰色砂や黄褐色土，淡灰橙色粘性土の地山面を確

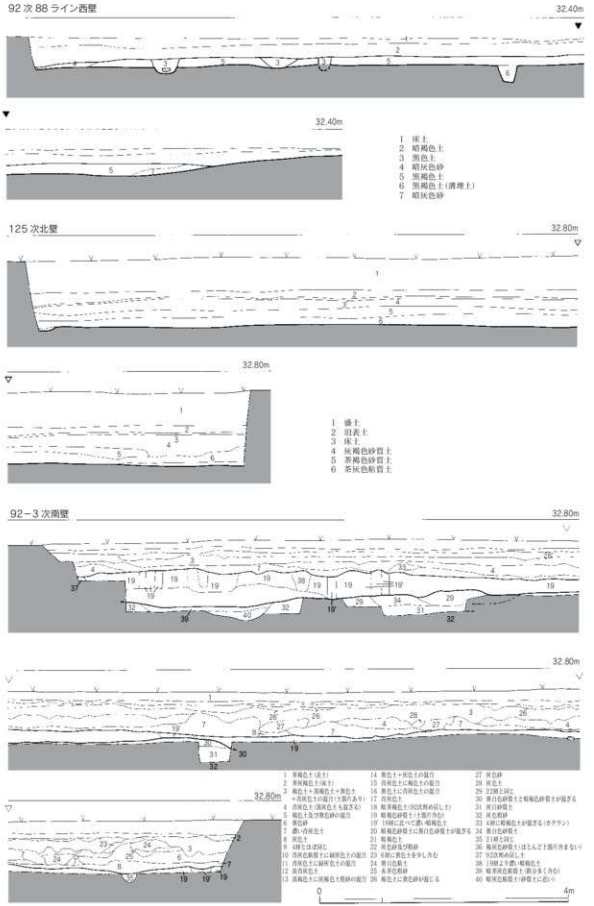


Fig.16　大橋地区（92・92−3・125次）基本土層図①（1/60）

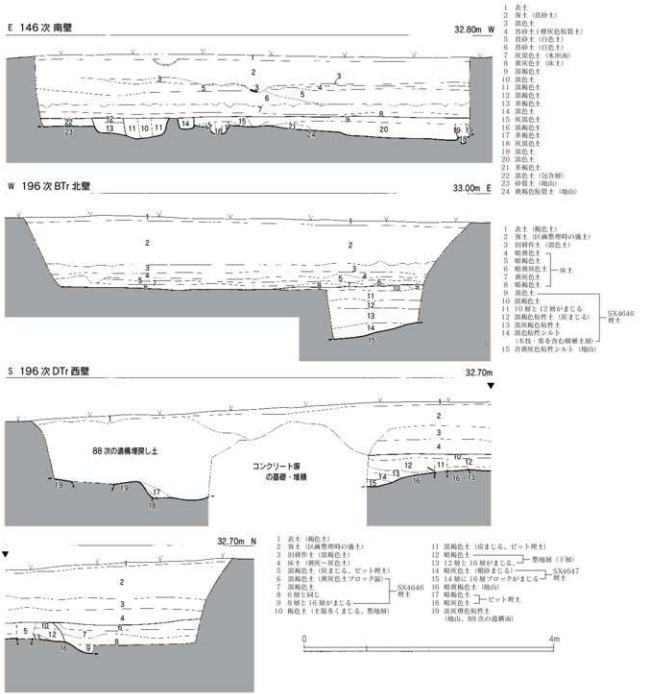


Fig.17　大楠地区（146・196次）基本土層図②（1/60）

認でき，比較的堆積状況は良い。88次調査区のSD2582はこの地山面に切り込む形で確認できる。

このほか，地区南側の88次調査区では196次調査区と同様に黒褐色土を除去した段階で，SD2581・2582等の区画溝を確認している。ただし，調査区中央付近に位置するSE2561はこの層の上面から方形井戸のプランを確認した。88次調査区西側の146次調査区でも，同様の黒褐色土層はみられ，その周辺となる139次調査区にも拡がっている。そして，この面でSD3979・3980・3985等を検出している。さらに地区西側の94次調査区では，床土下位に灰

褐色土を広く確認したが，T地区（南半）北西ではその下位に茶褐色土が部分的にみられ，その面からSE2720・2725・2730・2735の井戸が掘り込まれていた。同様に東側の110次調査でも灰褐色土が認められる。138次調査区では，黄褐色土の地山面で遺構を検出することができる。

共通する包含層

以上，土層堆積状況をみてきたが，各調査区に共通するのは床土下位に灰褐色土や暗褐色土の包含層が存在することである。そして，その下位に部分的に遺構が切り込む整地層が存在する。あらためてみると，地区中央の88・92次調査区では暗褐色土や黒褐色土が，周辺の94次や110次調査区では灰褐色土がそれぞれ認められる。しかしながら，当時の生活面や最終埋没面を直接示すものは少なく，各地区の堆積状況に不整合がある。こうした状況はSD320東の不丁地区官衙とも通じる状況である。ただし，不丁地区北半では遺構廃絶後に粘土採掘が行われた痕跡が数多く認められ，時期的理解を複雑にしている。本地区では，そのような攪乱遺構の広範囲の分布状況が認められないことから，地区によっては遺構の廃絶状況を具体的に把握できる可能性がある。この点については，遺構の時期を具体的に検討する中で触れることとする。

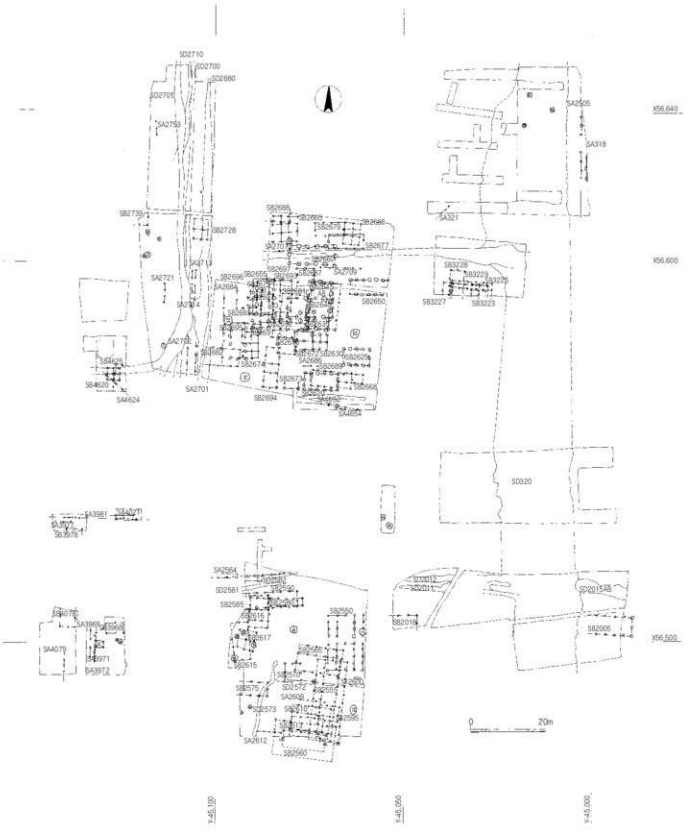


Fig.18　大橋地区建物・柵配置図（1/1,000）

第Ⅲ章　検出遺構

（1）建　物

不丁地区の建物群は，北・中央・南区域の三つのエリアに区画されている状況が窺えたが，大楠地区では92次調査区の北側と東側，それに92次調査区と88次調査区との間，及び88次調査区以南には未調査部分が存在するため建物配置が不明瞭となっている。ここでは，便宜上，92次調査区以北を北区域，104次調査区以南を南区域の二つのエリアに分けて説明する。なお，大楠地区では，76・88・92・92-2・94・110・125・138・139・152・194次調査において大小64棟の建物を確認しており，大宰府政庁周辺の主要官衙である不丁地区と遜色はない。

また，区画整理以前においては，不丁・大楠地区の南側にあたる「油田」地区とに小字境の段落ちが存在していたが，その段落ちは鋸歯状をなしており（Fig.2「小字図」参照），旧御笠川の流路痕跡とみられる。発掘調査で建物を確認している範囲は段落ち北側までであり，段落ち以南は御笠川の氾濫原となっている。従って，大楠地区の南側においては，何処まで建物群が広がっていたかは不明瞭である。

SB2018（Fig.19）

当該建物は，『大宰府政庁周辺官衙Ⅲ－不丁地区遺構編－』で既に報告した建物であるが，境界溝SD320以西に位置することから再掲した。76次調査区の南西隅部で検出した掘立柱建物で，溝状遺構と重複するものの前後関係は判然としない。また，大半が調査区外にあるため，現状で南北１間以上，東西２間以上の建物規模であるが，柱間は南北が2.03m，東西が東隅柱から2.2m・2.65mを測り，東西方向の柱間が広く，梁側とみられることから南北棟の建物になると考える。柱掘方は径0.6m前後の円形を呈し，深さは削平により10cmを測る程度であった。桁行方位は北から東に2°振れる。

SB2550（Fig.20，PL.21・28）

88次調査区の北東部に位置し，掘立柱建物SB2555・2565，井戸SE2553に切られる。南北棟の掘立柱建物で，身舎は梁行２間（4.64m），桁行８間（14.54m）規模で，桁側両面に廂

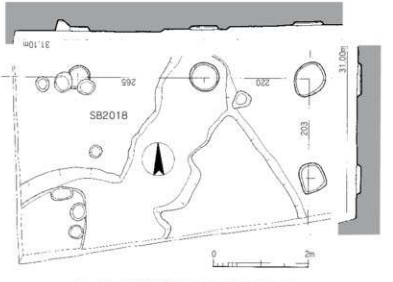


Fig.19　掘立柱建物 SB2018実測図（1/80）

二面廂建物

を設けた二面廂建物である。概報時点では，身舎中央の桁方向北から５間分には床束の柱穴６個があるとしているが，その柱穴は柱間が不揃いでかつ身舎の柱掘方とは対応しておらず，今回は当該建物とは無関係のピットとした。ただ，桁行4間目の身舎中央には間仕切りに関わるとみられる柱穴（■印）がある。

身舎部分の柱掘方は一辺0.6m前後の隅丸方形を呈し，上面からの深さ0.4 ～ 0.5mとしっかりしているが，廂部分の柱掘方は径0.32 ～ 0.46mの円形を呈し，深さ0.16 ～ 0.27mと身舎に比して貧弱である。また，身舎部分の掘方では径16 ～ 26cmの柱痕跡を確認しているが，廂部分では南西隅柱を除いて確認できていない。柱穴からはスサ入りの炉壁片・焼土・炭などが埋め込まれた状態で出土した。柱間は身舎の桁側が1.64 ～ 2.07m，同梁側が2.33m等間で，廂の桁側は1.34 ～ 2.22mと不揃いであった。桁行方位は北から東に1°振れる。

柱穴から炉壁片等出土

SB2555（Fig.21，PL.21・28）

88次調査区の南東部で，SB2550を切ってその南側に位置する。井戸SE2552に切られ，掘立柱建物SB2560・2565・2595・2610・2613，柵SA2609，溝SD2564・2566・2567・2571・2572・2574，土坑SK2567と重複する。南北棟の掘立柱建物で，概報では梁行4間（7.62m），桁行10間以上（おそらくは他の例からみて11間）の建物としていたが，図面検討の結果，南梁行中央の柱掘方とみられる隅丸方形の穴を確認しており，今回，桁行は10間（21.74m）と断定した。東西両面の桁側に廂を設けた二面廂建物で，身舎の柱掘方は径0.4 ～ 0.6mの円形を呈し，深さ0.3 ～ 0.5mを測る。廂部分の柱掘方は径0.3 ～ 0.5mの円形を呈し，深さ0.2 ～ 0.3mと身舎の柱掘方に比して若干小さい。また，身舎の柱掘方においては径25cm程の柱痕跡を確認している。柱間は身舎の桁側が1.88 ～ 2.56m，同梁側が1.86 ～ 1.98mで，廂の桁側は1.83 ～ 2.51mであった。桁行方位は北から東に8°と大きく振っている。

二面廂建物

SB2560（Fig.22，PL.21）

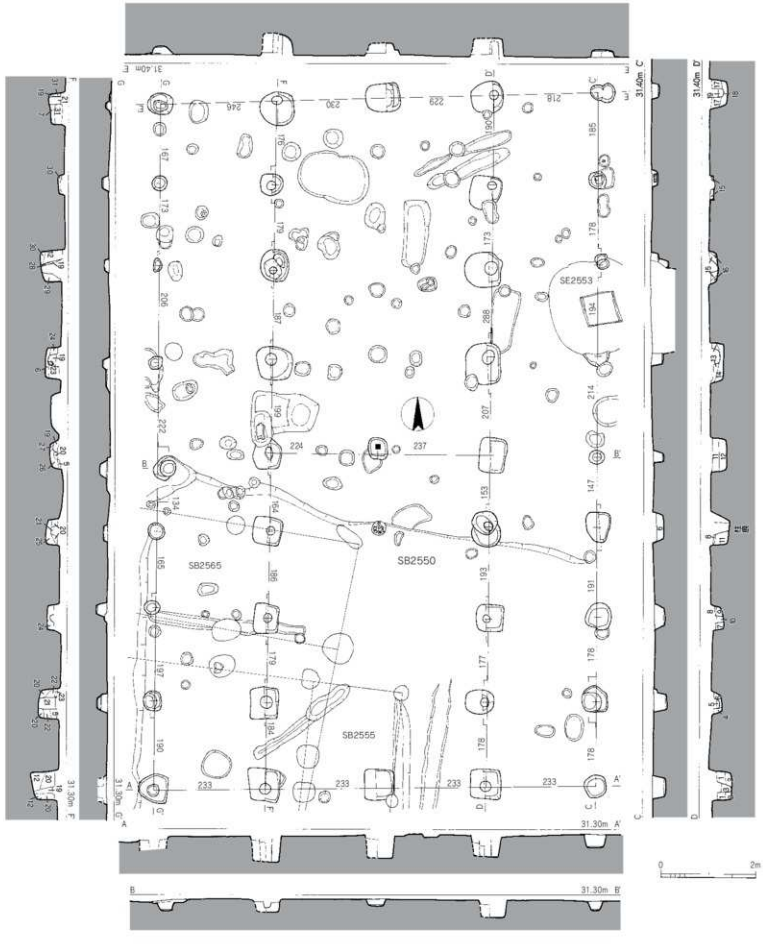
88次調査区の南端中央に位置し，東西小溝SD2566に切られ，掘立柱建物SB2555・2610・2613，柵SA2611・2612と重複する。東西棟の掘立柱建物で，建物の南半分は調査区外にある。梁行1間以上（恐らく２間），桁行５間の身舎の四周に廂を設けた四面廂建物で，桁行の総長16.18m，梁行は2.4m等間なので推定総長9.6mとなろう。身舎の柱掘方は径0.47 ～ 0.67mの円形を呈し，深さ0.4 ～ 0.7mを測るが，特に隅柱は径・深さとも他の掘方より大きく深い。廂の柱掘方は径0.4 ～ 0.7mの円形ないしは楕円形を呈し，深さは0.1 ～ 0.5mと身舎に比して浅い。また，北西隅柱と西から3番目の柱掘方には角礫が入れられていた。身舎の掘方では径20cm前後の柱痕跡を確認している。柱間は身舎の桁側が2.23 ～ 2.34m，同梁側が2.4mで，廂の桁側が2.08 ～ 2.4m，同梁側が2.4mであることから身舎の柱間は，桁7.5尺，梁８尺を基本として築造されたとみられる。梁行方位は北から東に7°30′と大きく振れる。

四面廂建物

SB2565（Fig.23，PL.22）

88次調査区の中央やや東寄りに位置し，南北小溝SD2576に切られ，掘立柱建物SB2550・2555・2570と重複している。概報では梁行２間，桁行５間の側柱建物として報告しているが，図面検討の結果，今回は身舎の北面に廂を設けた片廂建物として報告する。東西棟の掘立柱建物で，身舎は梁行２間（4.54m），桁行５間（11.66m）で，北側の桁行に廂を付設している。柱掘方は身舎が円形を呈し，径0.38 ～ 0.7m，深さ0.22 ～ 0.5mとしっかりしているが，廂

片廂建物



1 黄茶灰色土
2 茶灰褐色土
3 暗茶灰色土・柱痕
(炭化物・炉壁含む)
4 暗灰茶色土
5 茶灰色土（ブロック混じる）
6 茶褐色土
7 暗灰色粘質土
8 茶黄色土
9 茶黄色土
10 茶灰色粘質土・柱痕
11 暗茶灰色粘質土
12 黄灰色土
13 暗灰色土
14 茶灰色粘土
15 灰褐色砂質土
16 暗褐色粘土
17 暗茶色粘質土
18 暗灰色砂質土
19 黒灰色土・柱痕
(炭・炉壁含む)
20 暗茶灰色土
21 暗灰色土・柱痕
(炭・炉壁含む)
22 茶黄色粘質土
23 灰茶色土（灰味強し）
24 暗灰黄色粘質土
25 黄色粘質土
26 黄灰色粘質土
27 暗茶色粘土
28 灰色砂質土
29 暗灰褐色土
30 黄茶色粘質土
31 黄灰色砂質土

Fig.20　掘立柱建物 SB2550 実測図（1/80）

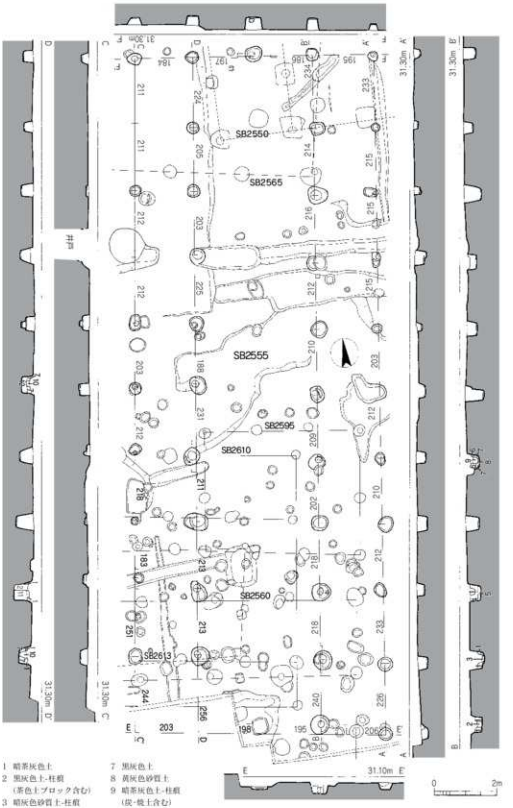


Fig.21　掘立柱建物 SB2555実測図（1/120）

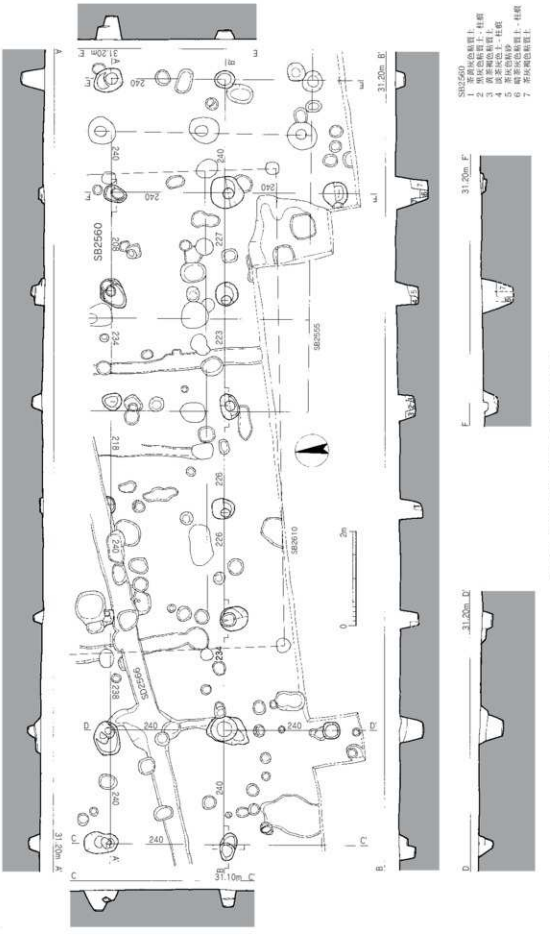


Fig.22　掘立柱建物 SB2560 実測図（1/80）

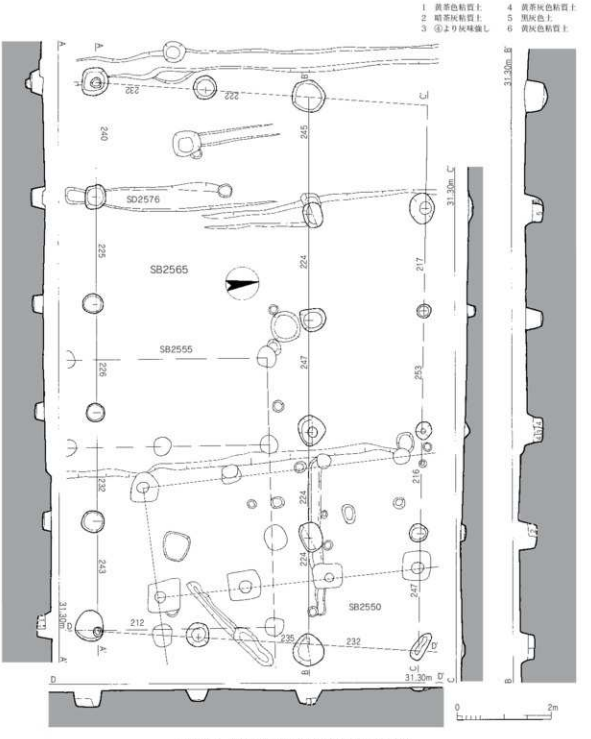


Fig.23　掘立柱建物 SB2565実測図（1/80）

は径0.26 ～ 0.64m，深さ0.1 ～ 0.15mと浅い。身舎の北東隅柱から３番目の柱掘方では径22㎝の柱痕跡を確認している。柱間は身舎の桁側が2.24 ～ 2.47mで，同梁側が2.12 ～ 2.35mで，廂の桁側が2.16 ～ 2.53m，同梁側が2.32mとばらつきがみられる。また，身舎の隅柱を結ぶ線は菱形をなしており，梁行方位は北から東に11°30′と大きく振れる。

SB2570（Fig.24）

88次調査区の中央やや南に位置し，東西溝SD2572・2576に切られ，掘立柱建物SB2565と重複する。梁行２間（4.17m），桁行2間（4.9m）の南北にやや長い方形の掘立柱建物である。柱掘方は0.46 ～ 0.57mの円形を呈し，深さ0.15 ～ 0.55mを測るが，北梁行中央と西桁行中

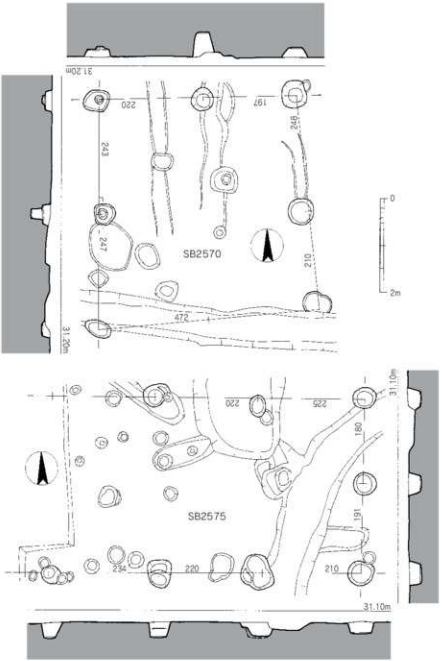


Fig.24　掘立柱建物 SB2570・2575実測図（1/80）

央の柱穴は他の柱穴より倍ぐらい深い。柱痕跡は不明瞭ながら，北西隅柱と西桁行中央の柱穴は底面に径20㎝余りの穴が掘り込まれており，柱痕跡を示すものであろう。柱間は桁側が2.1～2.48m，梁側は1.97m・2.2mの間隔を有する。桁行方位は北から東に3°振れる。

SB2575（Fig.24，PL.22）

88次調査区の南西部に位置し，溝SD2573，土坑SK2602と重複する。梁行2間（3.71m），桁行3間（6.64m）以上の東西棟建物であるが，西半部は調査区外に延びる。柱掘方は径0.42～0.6mの円形を呈し，深さは0.26～0.33mを測るが，掘方底面のレベルは標高30.7～30.8mにあり，ほぼ揃っている。柱痕跡は確認できていない。柱間は桁側が2.1～2.34m，梁側が1.8m・1.91mの間隔を有する。梁行方位は北から東に5°振れる。

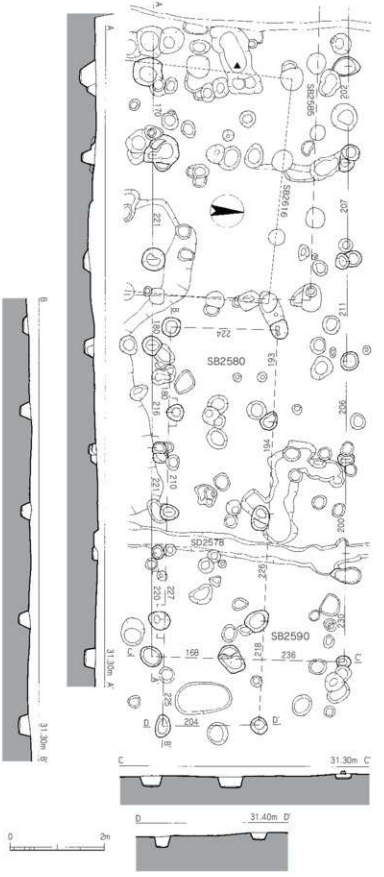


Fig.25　掘立柱建物 SB2580・2590実測図（1/80）

SB2580（Fig.25，PL.22）

88次調査区の北西部に位置し，掘立柱建物SB2590，溝SD2578と重複する。概報では梁行２間，桁行５間の東西棟建物としていたが，隅柱を結ぶ線は余りにも歪であるため，更なる図面検討の結果，今回は旧SB2580北西隅柱から東に３間分までを別建物（SB2616）とみなし，旧SB2580北東隅柱から１間東側の柱穴を新SB2580の北東隅柱とし，梁行１間（2.24m），桁行４間（8.42m）の東西棟建物とに分離した。柱掘方は0.36 ～ 0.48mの不整円形を呈し，検出面からの深さは0.12 ～ 0.34mであるが，掘方底面のレベルは標高30.8 ～ 31.0m付近にあり，ほぼ揃っている。柱間は桁側が1.93 ～ 2.26mで，梁側は2.04m･2.24mの間隔を有する。梁行方位は座標北を示す。

SB2585（Fig.26，PL.22）

88次調査区においてピットが最も密集する北西隅部に位置し，掘立柱建物SB2590・2616と重複する。梁行２間（3.92m），桁行3間（5.19m）以上の東西棟建物であるが，西側梁行は調査区外となる。柱掘方は0.3 ～ 0.56mの円形を呈し，検出面からの深さは0.12 ～ 0.22mであるが，掘方底面のレベルは東側に下がっている。柱間は桁側が1.45 ～ 2.03mで，梁側は1.93m・1.99mの間隔を有する。梁行方位は北から西に1°振れる。

SB2590（Fig.25，PL.22）

88次調査区の北西隅部に位置し，掘立柱建物SB2580･2585･2616，溝SD2578と重複する。梁行２間（4.04m），桁行６間以上の東西棟建物で，西側梁行は調査区外にあるとみられるが，▲印を付した柱穴が西側梁行の中央柱穴であるならば桁行は６間（12.52m）で収まる。柱掘方は0.28 ～ 0.62mの双円形を呈し，深さ0.1 ～ 0.36mを測り，掘方底面のレベルは西側に下がっている。柱痕跡は確認できていなが，北東隅柱の柱穴には角礫を据え，礎盤としている。また，大半の柱穴が双円形をなすことから同一場所に建て替えた可能性を有する。柱間は桁側が1.7 ～ 2.27mで，梁側は1.68m・2.36mの間隔で不揃いである。梁行方位は北から西に2°振れる。

角礫を礎盤に使用

SB2595（Fig.26，PL.21）

88次調査区の南東部に位置し，掘立柱建物SB2555・2610・2613，溝SD2566，土坑SK2587と重複する。梁行２間（3.98m），桁行３間（4.95m）の小規模な東西棟建物である。柱掘方は円形を呈し，径0.3 ～ 0.42mで，深さは15cmと著しい削平を受けるが，掘方底面のレベルは標高30.9mにあり，揃っている。柱間は桁側が1.56 ～ 1.74mで，梁側は1.68 ～ 2.15mと梁側がやや長い。梁行方位は北から東に7°振れる。

SB2610（Fig.27，PL.21）

88次調査区の南側中央に位置し，掘立柱建物SB2555・2560・2595・2613，柵SA2611，溝SD2564・2566・2567・2568，土坑SK2567・2588・2589・2591と重複する。また，区画溝SD2572・2573は，当該建物を囲むように巡っている。身舎の梁行２間（4.6m），桁行５間（10.57m）の南北両桁側に廂を設けた東西棟の二面廂建物として新規に復原したが，廂の出は北側が2.08m，南側は1.62mと北側の方が50cm程長い。梁行の総長は8.32mを測る。柱掘方は円形を呈し，身舎・廂とも径0.26 ～ 0.46m，深さ0.12 ～ 0.32mと両者に大差はない。柱間は身舎の桁側が1.67 ～ 2.60mで，同梁側が2.10 ～ 2.47m，廂の桁側は1.85 ～ 2.61mで，同

二面廂建物

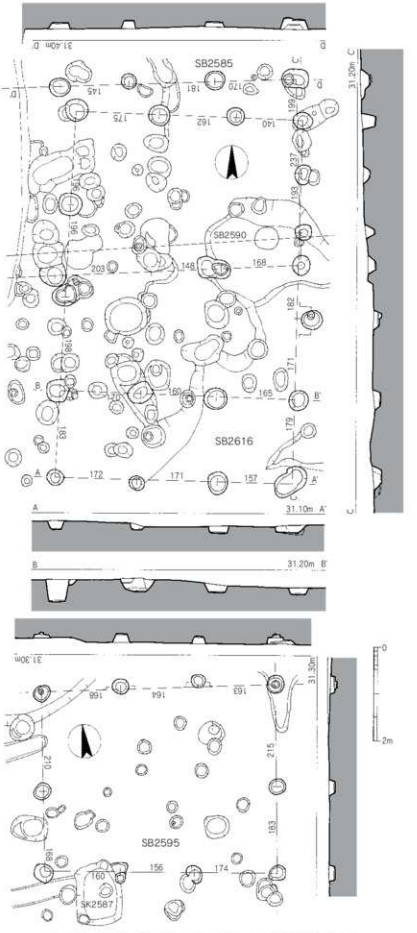


Fig.26　掘立柱建物 SB2585・2595・2616実測図（1/80）

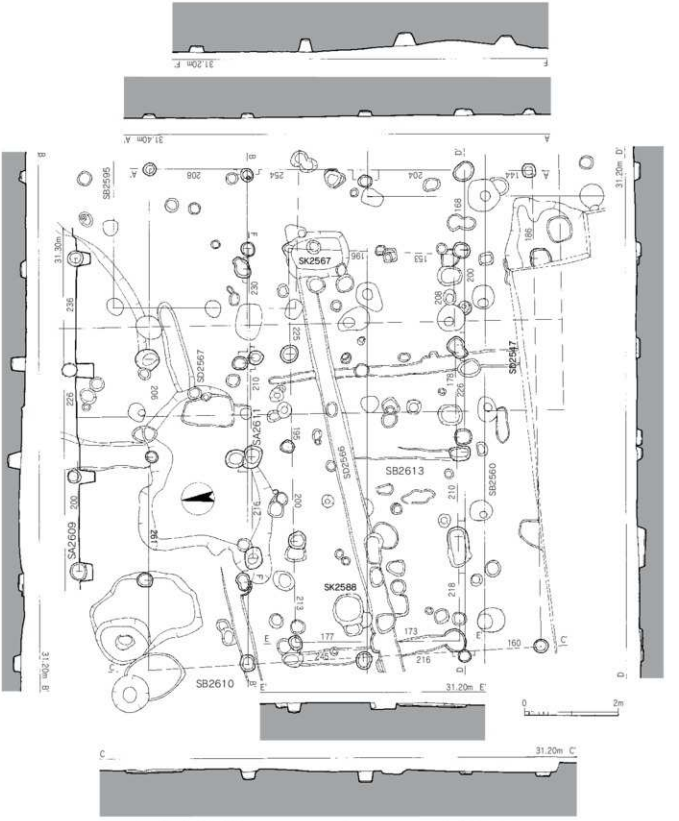


Fig.27　掘立柱建物 SB2610・2613，柵 SA2609・2611実測図（1/80）

梁側は1.44m・2.08mとばらつきがみられる。梁行方位は北から東に7°30′と大きく振れる。

SB2613（Fig.27）

88次調査区の南側中央に位置し，土坑SK2567に切られ，掘立柱建物SB2555・2560・2595・2610，溝SD2564・2566，土坑SK2588と重複する。SB2610の身舎内に納まり，柱穴同士が切り合う箇所もみられるが，前後関係は判然としない。また，当建物の北側0.85mに位置する柵SA2611は，建物の桁行と筋を揃えることから近接する嫌いはあるが，当該建物に伴うものとみられる。梁行2間（3.5m），桁行4間（8.33m）の東西棟建物として新規に復原した。柱掘方は円形を呈し，径0.22～0.5m，深さ10cm前後と著しい削平を受けるが，掘方底面のレベルは標高30.9m前後にあり，ほぼ揃っている。柱間は桁側が1.78～2.25m，梁

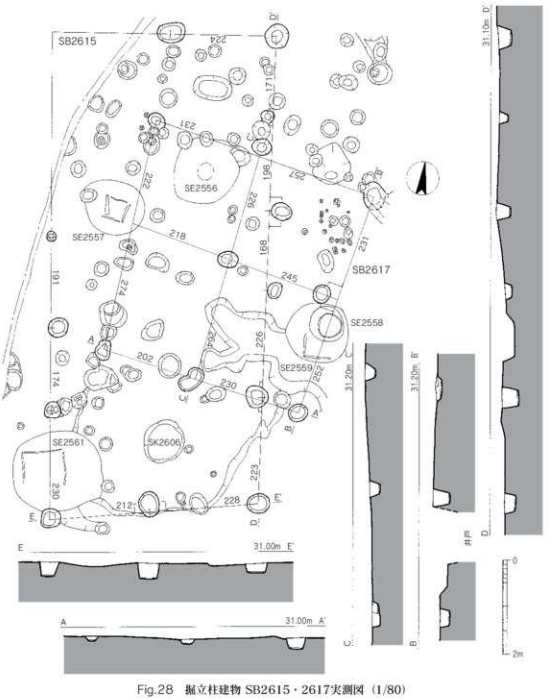


Fig.28　掘立柱建物 SB2615・2617実測図（1/80）

側は1.53 ～ 1.96mの間隔で，ばらつきがみられる。梁行方位は北から東に6°30′振れる。

SB2615（Fig.28）

88次調査区の西端部に位置し，井戸SE2556・2557・2561に切られ，掘立柱建物SB2616・2617，土坑SK2606と重複する。概報段階では建物として認識していなかったが，今回は梁行２間（4.4m），桁行５間（9.86m）の南北棟建物として報告する。北西隅柱と桁行１間分は調査区外にある。柱掘方は円形を呈し，径0.22 ～ 0.52m，深さ0.22 ～ 0.36mを測る。柱間は桁側が1.68 ～ 2.3m，梁側は2.12 ～ 2.28mの間隔を有する。桁行方位は北から西に4°振れる。

SB2616（Fig.26，PL.22）

88次調査区においてピットが最も密集する北西隅部に位置し，掘立柱建物SB2585・2615と重複する。概報では北西隅柱から東に３間分と南に２間分の掘方を旧SB2580の柱掘方としていたが，今回は梁行３間（4.95m），桁行３間（5.9m）の身舎の南梁側に廂を設けた総長7.73mの片廂建物として復原した。身舎の柱掘方は径0.34 ～ 0.46mの円形を呈し，深さ0.14 ～ 0.48mを測る。廂の柱掘方は円形を呈し，径0.3 ～ 0.5m，深さ0.14 ～ 0.2mを測る。ともに掘方底面のレベルは標高30.7 ～ 30.8m付近にある。柱間は身舎の桁側が1.71 ～ 2.37m，梁側は1.4 ～ 1.75mで，廂の柱間は東から1.57m・1.71m・1.72mの間隔であった。桁行方位は北から東に4°振れる。

片廂建物

SB2617（Fig.28）

88次調査区の西端部に位置し，井戸SE2556 ～ 2559，土坑SK2603・2605に切られ，掘立柱建物SB2615と重複する。梁行２間（4.86m），桁行２間（4.96m）の総柱建物で，南北方向に僅かに長い。柱掘方は円形を呈し，径0.33 ～ 0.4m，深さ0.12 ～ 0.36mを測り，掘方底面は南東側に下がっている。柱間は桁側が2.3 ～ 2.63m，梁側は2.02 ～ 2.55mの間隔を有する。桁行方位は北から東に10°振れる。

SB2620（Fig.29，PL.23・28・29）

92次調査区の南東側に位置し，溝SD2627を切り，掘立柱建物SB2689に切られ，SB2668と重複する。東西棟の掘立柱建物で，梁行３間（4.38m），桁行５間（8.76m）規模である。また，概報では西側３間分中央には床束穴と考えられる小ピットを伴うとしているが，床束があると言うことは高床式となるが，これらの小ピットは建物の中軸線（棟桁）からずれており，桁行の柱痕とも対応せず，高床とする積極的根拠も見出せないことから，今回は当該建物とは無関係のピットとみなしておく。

柱掘方は隅丸方形状を呈し，長軸0.6 ～ 1.0m，検出面からの深さ0.36 ～ 0.52mとしっかりしている。柱掘方の中には柱根が５本遺存しており，一辺14㎝程の角柱状をなしている。大半の柱根・柱痕跡が掘方底面から下がっており，屋根は瓦葺であった可能性が考えられる。柱間は桁側が1.61 ～ 1.98m，梁側は1.21 ～ 1.7mとばらついている。梁行方位は北から東に2°30′振れる。

SB2625A・B（Fig.30，PL.23・29・30）

92次調査区の南東部で，SB2620の1.5m北側に位置し，溝状に連続する土坑SK2642に切られる。概報では単独の掘立柱建物としていたが，南桁側柱列の掘方は柱穴が重複し歪であることから，今回は同位置に新旧2時期の建物が存在すると判断し，旧建物をSB2625A，新規建

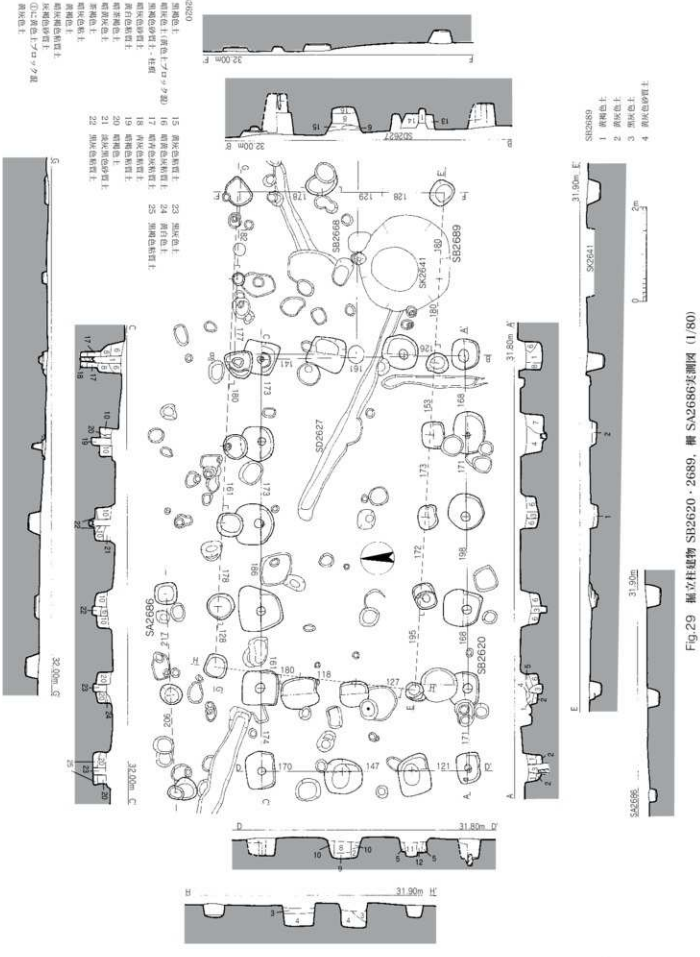


Fig.29　掘立柱建物 SB2620・2689，柵 SA2686実測図（1/80）

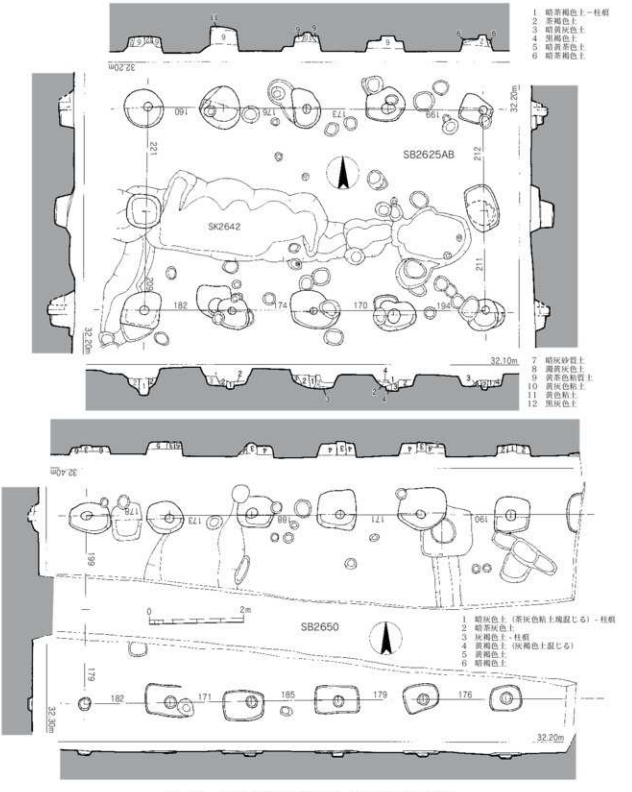


Fig.30　掘立柱建物 SB2625AB・2650実測図（1/80）

物をSB2625Bとして報告する。

SB2525Aは梁行２間，桁行４間の東西棟建物であるが，B建物に建て替えられているため柱間等詳細は不明。SB2625Bも梁行２間（4.3m），桁行４間（7.2m）の東西棟建物で，A建物とほぼ同位置に建て替えている。柱掘方は長軸0.8mの楕円形ないしは円形を呈し，検出面からの深さ0.3～0.5mを測る。掘方内には16～20cmの柱痕跡を確認しているが，その殆どが

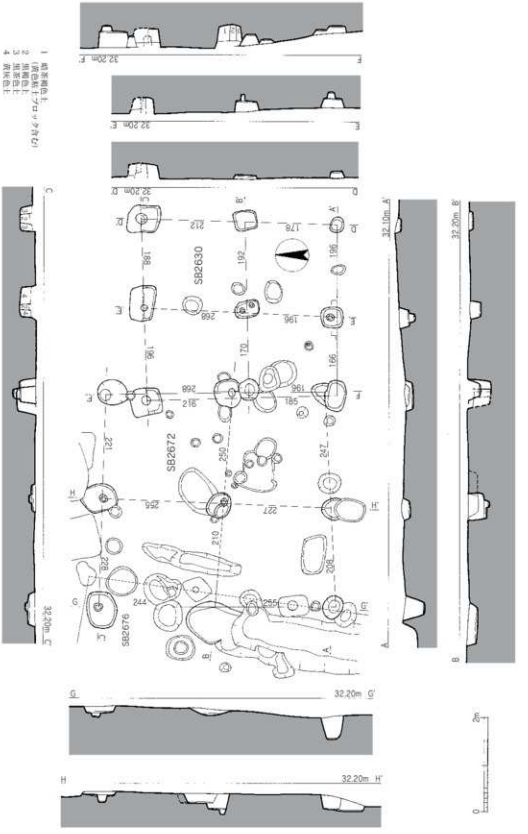


Fig.31　掘立柱建物 SB2630・2672実測図（1/80）

掘方底面より沈下していることから屋根に瓦を葺いていた可能性を有する。柱間は桁側が1.6～1.99mで，梁側は2.09～2.21mとばらつきがみられるが，桁側に比して梁側がやや長めである。梁行方位は北から東に3°振れる。

SB2630（Fig.31，PL.24・30）

92次調査区の中央部に位置し，掘立柱建物SB2672を切っている。概報では２間×２間の小建物としているが，建物中央には長さ0.5m程の柱穴とみられる穴があり，今回は総柱建物として報告する。梁行２間（3.84m），桁行２間（4.04m）で，南北に若干長い。南東隅柱と西桁行中央の柱掘方は径0.3～0.4mの円形を呈するが，それ以外は長軸0.56～0.74mの隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは0.1～0.4mを測り，東桁行中央の柱穴は特に浅い。掘方内では径12～20㎝の柱痕跡を確認している。柱間は桁側が1.78～2.21m，梁側は1.66～1.96mの間隔を有する。桁行方位は北から西に2°振れる。

SB2635（Fig.32，PL.24・30）

92次調査区の中央やや北側に位置し，掘立柱建物SB2640・2645ABに切られ，SB2672・2681と重複するが，建物群の中では最も古くなる。当建物周辺にはSB2630・2672・2692の２間×２間の総柱建物が集中し，意図的に配置した可能性がある。梁行２間（3.84m），桁行２間（4.56m）の総柱建物で，南北棟となる。柱掘方は隅丸方形を呈し，長軸0.9～1.1m，深さ0.22～0.4mを測る。柱間は柱痕跡が検出できていないため掘方の中央で測った数値であるが，桁側が2.23～2.29m，梁側は1.84～1.94mの間隔を有し，桁側が7.5尺，梁側が6.5尺を基本としよう。桁行方位は北から西に2°振れる。

SB2640（Fig.32，PL.25）

92次調査区の北側中央に位置し，掘立柱建物SB2635・2645Aを切り，SB2645Bに切られ，SB2681・2692・2693，SK2662と重複する。東西棟の掘立柱建物で，梁行２間（4.8m），桁行５間（11.95m）規模である。柱掘方は不整円形を呈し，径0.58～0.98m，深さ0.14～0.48mを測る。幾つかの掘方内では柱痕跡を確認しているが，掘方に比して径15㎝と小さなものであった。また，南北両桁行の隅柱から西に２番目の柱掘方は1.3m・1.6mと大きく，柱を抜き取ったためと考えられる。柱間は桁側が2.23～2.6m，梁側は2.21～2.59mの間隔であるが，梁・桁とも８尺を基本とする。梁行方位は北から東に2°振れる。

SB2645AB（Fig.32，PL.25・31）

92次調査区の北側中央に位置し，建物の北端（北側梁行）は92-2次調査区で検出した。概報では単独の建物としていたが，旧SB2645のすぐ東側に柱掘方が重複する別建物があり，今回は既報告の旧建物をSB2645A，新規建物をSB2645Bとして報告する。建物の前後関係は，SB2635→2645A→2640→2645B→2681・2687となる。

SB2645Aは，92-1次調査段階においては梁行が２間（5.52m）で，桁行は４間以上の建物としていたが，92-2次調査で北側梁行を確認したことにより桁行５間（12.51m）の南北棟建物と確定した。柱掘方は不整方形を呈し，長軸0.88～1.05m，深さ0.28～0.6mを測る。殆どの掘方では柱痕跡を確認しておらず，抜き取ったものとみられる。柱間は桁側が2.06～3.05m，梁側は2.25～2.76mの間隔を有する。桁行方位は北から東に4°振れる。

SB2645BはA建物と重複して，すぐ東側に建て替えている。梁行２間（5.32m），桁行５間

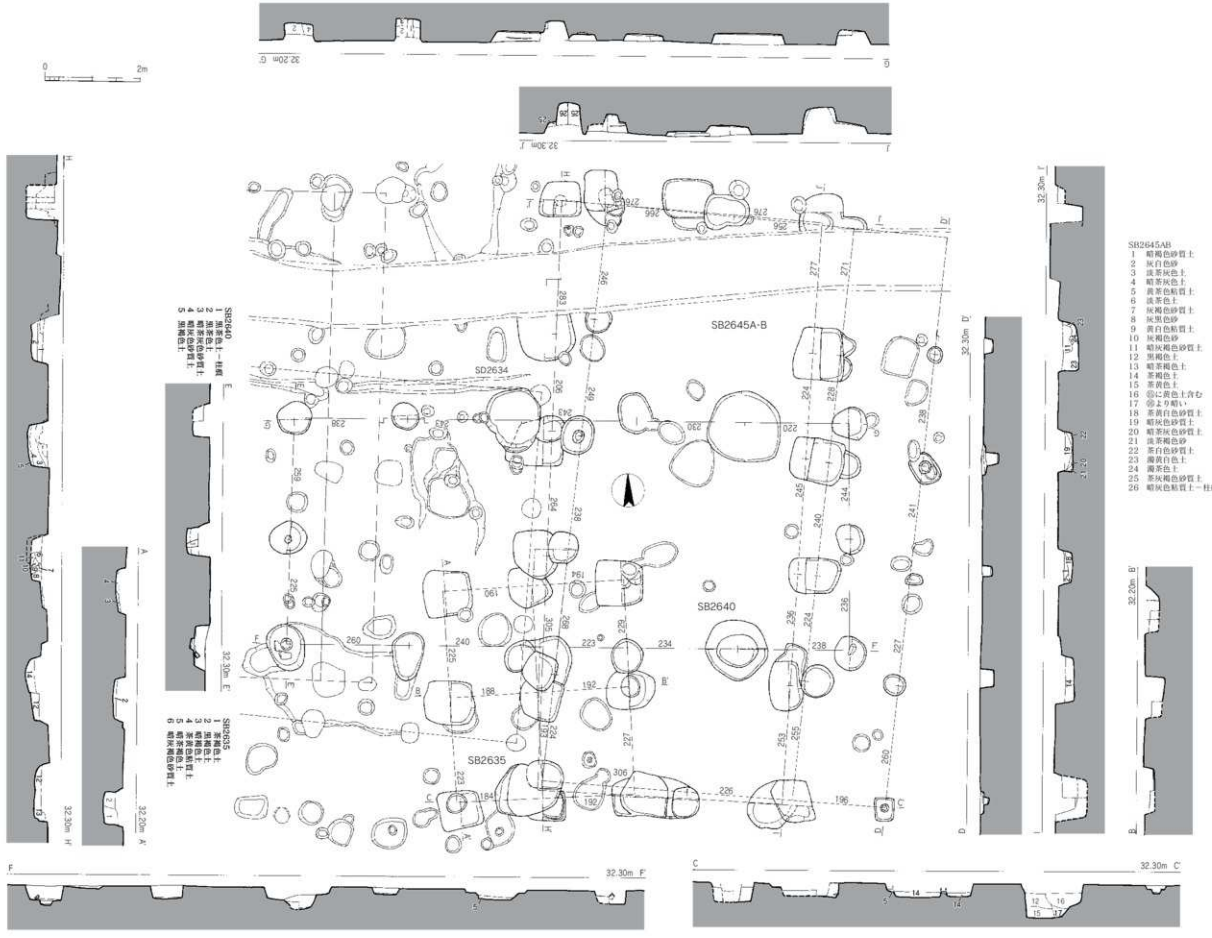


Fig.32　掘立柱建物 SB2635・2640・2645AB 実測図（1/80）

（12.18m）の身舎の東桁側に廂を設けた梁行総長7.28mの片廂建物として復原した。身舎の柱掘方は円形ないしは不整方形を呈し，長軸0.66 ～ 1.1m，深さ0.2 ～ 0.44mを測る。廂の柱掘方は円形ないしは方形を呈し，0.36 ～ 0.66m，深さ0.3m前後と身舎の掘方に比して一回り小さい。北西隅柱には柱痕跡があり，径26cmを測る。柱間は身舎の桁側が2.24 ～ 2.71m，梁側は2.26 ～ 3.06mで，廂の桁側は2.27 ～ 2.5m，廂の出は1.96mの間隔を有するものの，桁8尺，梁8.5尺を基本とする。桁行方位は北から東に7°振れる。

片廂建物

SB2650（Fig.30，PL.26）

92次調査区の北東部に位置し，92-2次調査区とに跨がって検出した。東西棟の掘立柱建物で，梁行は２間（3.98m）であるが，東妻側が調査区外となるため桁行は６間（10.8m）以上としか判らない。柱掘方は方形ないしは長方形を呈し，長軸0.75 ～ 0.9mを測る。深さは北桁側が0.3mであるのに対し，南桁側は削平が著しく５cm程であった。また，総ての柱掘方で径20cm前後の柱痕跡を確認しているが，何れも掘方底面より沈下していることから屋根に瓦を葺いていた可能性を有する。桁側の柱間は1.71 ～ 1.9mとややばらつくものの，1.8m（６尺）を基本とする。梁側の詳細は不明であるが，梁行3.98mの半分の1.99mとすると桁側の柱間より若干長くなる。梁行方位は北から東に2°振れる。

SB2655（Fig.33，PL.26・31・32）

92次調査区の北西部に位置し，掘立柱建物SB2675を切り，SB2683・2691・2697より先行する。梁行は３間（3.9m）で，92-2次調査区の南西隅で北東隅柱を検出したことにより，桁行は７間（12.93m）と確定した。柱掘方は長軸0.8m前後の隅丸方形を呈し，深さ0.2 ～ 0.4mを測るが，西側桁行の掘方は乱れており，建て替えた可能性がある。掘方内では20cm前後の柱痕跡を検出しているが，大半の柱痕跡が掘方底面より下がっており，屋根は瓦葺きであったとみられる。柱間は桁側が1.64 ～ 1.96m，梁側は1.87m・2.03mの間隔で，ばらつきがみられものの梁側が6.5尺，桁側が６尺を基本とする。桁行方位は北から東に1°振れる。

SB2660（Fig.34，PL.27・32・33）

92-2次調査区の中央やや西側に位置し，柵SA2707，東西溝SD2350A・Bに切られ，掘立柱建物SB2677と重複するが，前後関係は当該建物が最も古い。東西棟の掘立柱建物で，梁行２間（4.75m），桁行５間（11.85m）である。柱掘方は隅丸方形を呈し，長軸0.83 ～ 1.14mで，検出面からの深さは0.42 ～ 0.75mを測るが，掘方底面のレベルは標高31.5m前後にある。柱痕跡は幾つかの柱掘方で確認でき，径23 ～ 25cmほどであった。また，北西隅柱と南東隅柱から３番目の柱痕跡内には平瓦片が縦方向に入っており，根固めとして入れたものであろう。柱間は桁側が2.12 ～ 2.5m，梁側は2.29 ～ 2.46mの間隔を有するが，梁・桁行とも８尺を基本とする。柱痕跡が明瞭な西梁行の方位は北から東に2°振っている。

SB2665（Fig.35，PL.25）

92-2次調査区の北西隅部に位置し，掘立柱建物SB2688，南北溝SD2638と重複する。柱穴の中に角礫や平瓦が入っている柱穴を拾って梁行３間（6.67m），桁行３間（6.8m）の南北にやや長い総柱建物としたが，北側及び西側は調査区外に延びる可能性もある。柱掘方は円形を呈し，径0.28 ～ 0.46m，深さ0.1 ～ 0.24mを測る。大半の掘方内には角礫或いは平瓦が据えられており，礎盤としている。柱間は桁側が1.82 ～ 2.66m，梁側は1.78 ～ 2.53mの間隔

角礫・平瓦を礎盤として使用

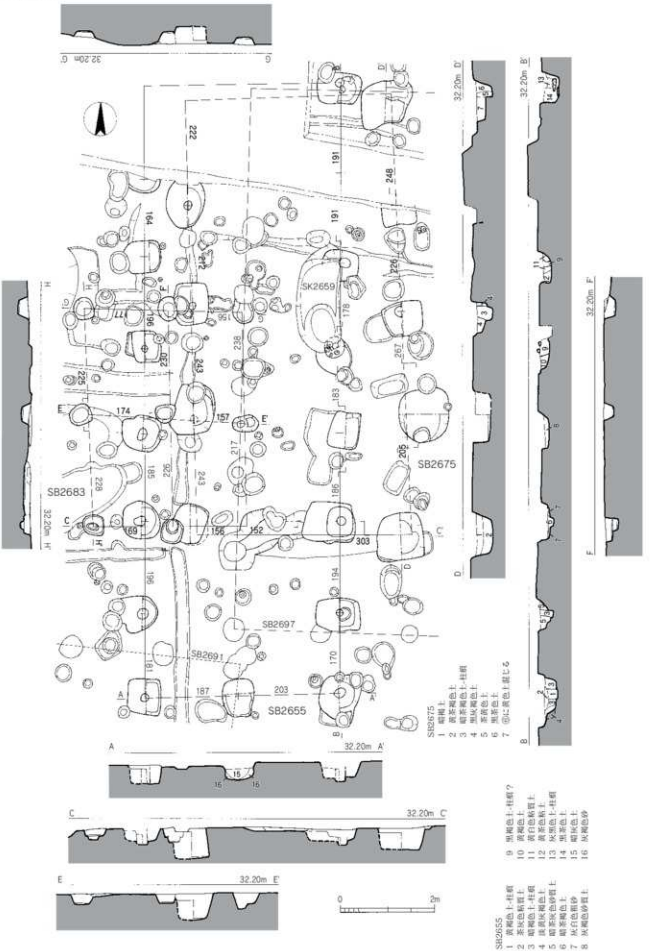


Fig.33　掘立柱建物 SB2655・2675・2683実測図（1/80）

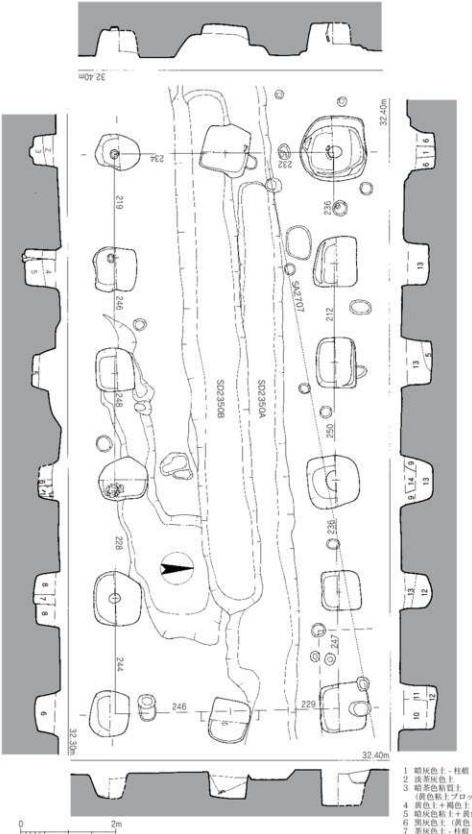


Fig.34　掘立柱建物 SB2660実測図（1/80）

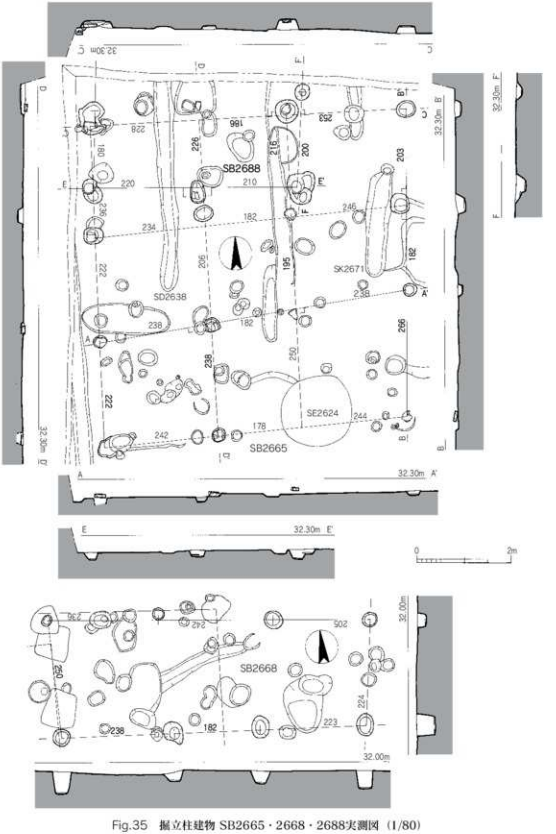


Fig.35　掘立柱建物 SB2665・2668・2688実測図（1/80）

を有し，梁行・桁行とも中央間が狭くなっている。桁行方位は北から東に2°振れている。

SB2668（Fig.35）

92次調査区の南東側に位置し，掘立柱建物SB2620・2689，円形土坑SK2641と重複するが，

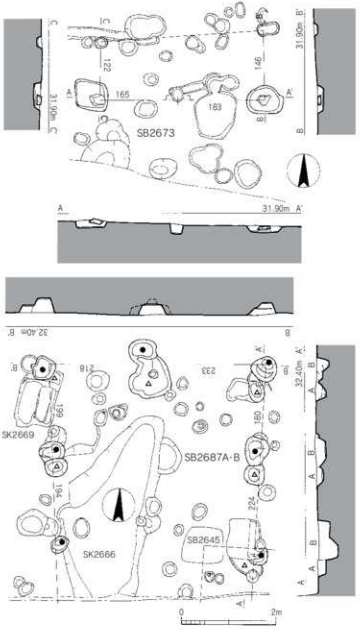


Fig.36　掘立柱建物SB2673・2687AB実測図（1/80）

柱穴が小規模な円形であることからこれら建物の中では最も後出するとみられる。梁行１間（2.5m），桁行３間（6.83m）の東西棟建物として新規に復原した。柱掘方は円形を呈し，径0.32～0.46m，深さ0.18～0.47mを測り，南東・南西両隅柱は他の穴よりも深い。柱間は桁側が1.82～2.42m，梁側は2.24m・2.5mの間隔を有する。東梁行方位は北から東に9°振れる。

SB2672（Fig.31）

92次調査区の中央部に位置し，総柱建物SB2630，溝状土坑SK2663に切られ，SB2635・2676と重複する。概報段階では建物として認識していなかったが，今回は総柱建物として報告する。梁行２間（4.55m），桁行2間（4.79m）で，南北にやや長い。南側の柱穴列は径0.5m程の円形を呈するが，それ以外は0.64～0.74mの楕円形をなす。検出面からの深さは0.1～0.5mを測る。掘方底面には径16～23㎝の小穴があり，柱の沈下痕跡とみられる。柱間は桁

側が1.96～2.68m，梁側は2.08～2.47mの間隔である。桁行方位は北から西に2°振れる。

SB2673（Fig.36）

92次調査区の南端中央で，SB2620の西側0.8mに位置する。梁行1間（1.46m），桁行2間（3.48m）の小規模な東西棟建物である。南東及び南西の柱穴は方形を呈し，長軸0.8m前後と

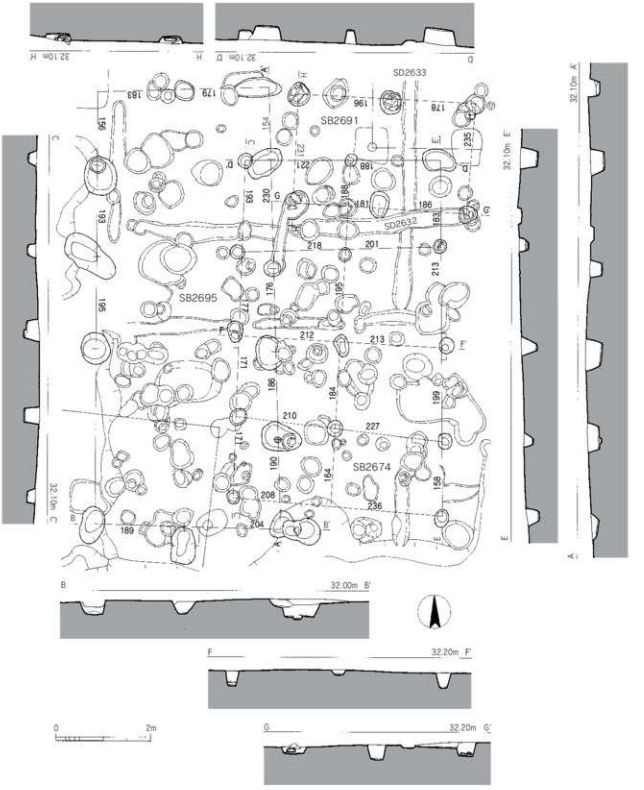


Fig.37　掘立柱建物 SB2674・2691・2695実測図（1/80）

大きく，角礫を敷いて礎盤としている。両者の中間には径0.3m，深さ0.32mの柱穴がある。

また，北東及び北西の柱穴は円形を呈し，径0.3m前後，深さ0.1mと前者に比して小さい。柱間は南桁側が東から1.83m・1.65mで，梁行は東側が1.46m，西側は1.22mを測る。これらのことから当該建物は門建物と考えられ，南東・南西が本柱の柱穴で，北東・北西が控柱の柱穴とみられ，形式的には薬医門となろう。ただ，本柱に連続するとみられる塀等の痕跡は確認できておらず，削平により失われた可能性が高い。梁行方位は座標北を示す。 **薬医門か**

SB2674（Fig.37）

92次調査区の西側に位置し，掘立柱建物SB2655・2695を切り，SB2691と重複するが，柱掘方の形状から当建物が最も後出する。概報段階で認識されていなかった建物で，今回は梁行２間（4.44m），桁行４間（7.52m）の南北棟総柱建物として復原したが，建物中央の３個の穴は床束柱穴の可能性もある。柱掘方は円形を呈し，径0.28 ～ 0.36m，深さ0.12 ～ 0.32mと小規模なものである。柱間は桁側が1.52 ～ 2.12m，梁側は1.98 ～ 2.22mの間隔で，揃っていない。桁行方位は北から東に2°30′振れる。

SB2675（Fig.33，PL.26・33）

92次調査区の北西部に位置し，掘立柱建物SB2655・2683・2693・2696・2697に切られ，SB2692と重複する。周辺の建物群では最も古い。概報では当建物の西桁行を３間以上の柵SA2675としていたが，今回は旧柵SA2676を東桁行とみなし建物とした。梁行は２間（4.59m）で，92-2次調査区の南西隅で北東隅柱を検出したことにより，桁行は４間（9.46m）と確定した。柱掘方は隅丸方形を呈し，長軸0.75 ～ 1.1m，深さ0.4m前後を測り，SB2655より一回り大きい。掘方内では柱痕跡を確認しており，径20cm程を測る。柱間は桁側が2.05 ～ 2.67m，梁側は1.52m・3.03mとかなりばらつきがみられる。桁行方位は北から西に1°30′振れる。

SB2676（Fig.38）

92次調査区の中央部に位置し，掘立柱建物SB2672・2694，柵SA2708，土坑SK2663と重複する。掘方の形状からしてSB2672よりは後出するとみられるが，SB2694及びSA2708との前後関係は判然としない。当建物も概報段階では認識されていなかった建物であるが，今回は梁行２間（4.66m），桁行３間（6.74m）の南北棟建物と考えた。なお，旧番号のSA2676は建物（SB2675）に変更したため，別建物として設定した。柱掘方は円形ないしは方形を呈し，長軸0.5 ～ 1.0m，深さ0.1 ～ 0.3mを測る。南東隅柱及び１個北側の掘方底面には0.2m余りの小穴があり，柱の沈下痕跡とみられる。柱間は桁側が2.08 ～ 2.35m，梁側は1.86 ～ 2.47mの間隔でばらついている。桁行方位は北から東に4°振れる。

SB2677（Fig.39）

92-2次調査区の中央に位置し，掘立柱建物SB2660・2679・2685，柵SA2707，溝SD2672と重複するが，SB2660よりは後出する。また，東西溝SD2350Aの0.4m北側にあり，同溝とは平行関係にある。当建物も概報段階では建物として認識されていなかったが，今回は梁行２間（3.64m），桁行４間（9.33m）の東西棟建物として復原した。柱掘方は円形を呈し，径0.24 ～ 0.34m，深さ0.14 ～ 0.24mと小規模なものであるが，掘方底面のレベルは標高32.0m付近にあり，ほぼ揃っている。柱間は桁側が2.21 ～ 2.41m，梁側は1.38 ～ 2.24mの間隔を有する。桁行方位はほぼ東西方向を示す。

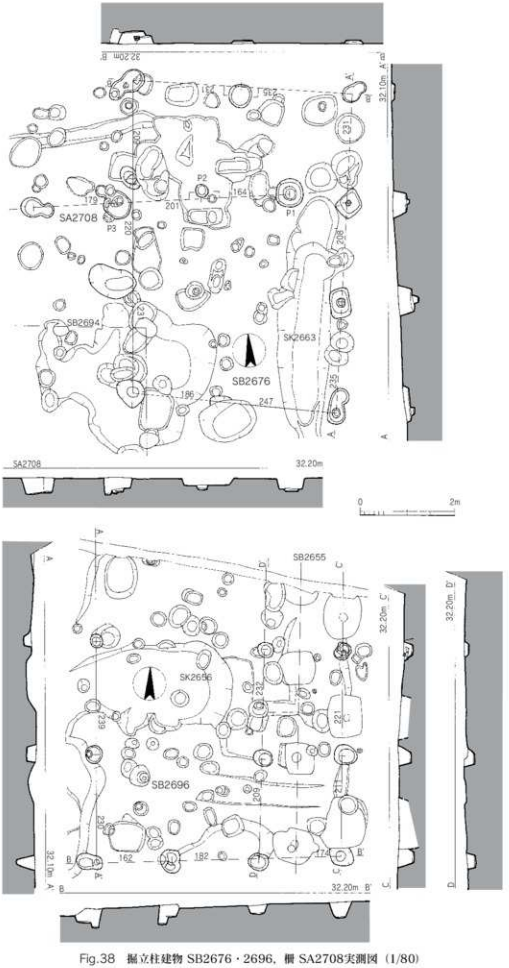


Fig.38　掘立柱建物 SB2676・2696，柵 SA2708実測図（1/80）

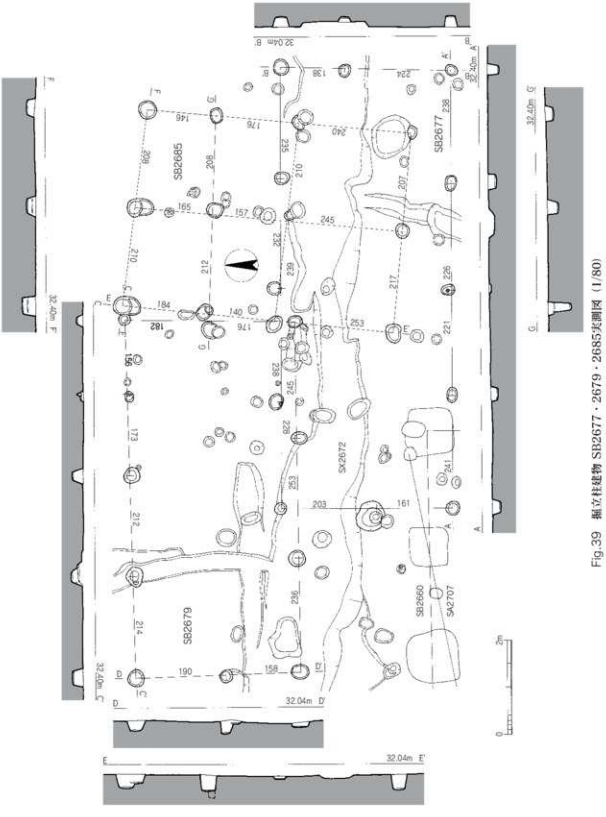


Fig.39　掘立柱建物 SB2677・2679・2685実測図（1/80）

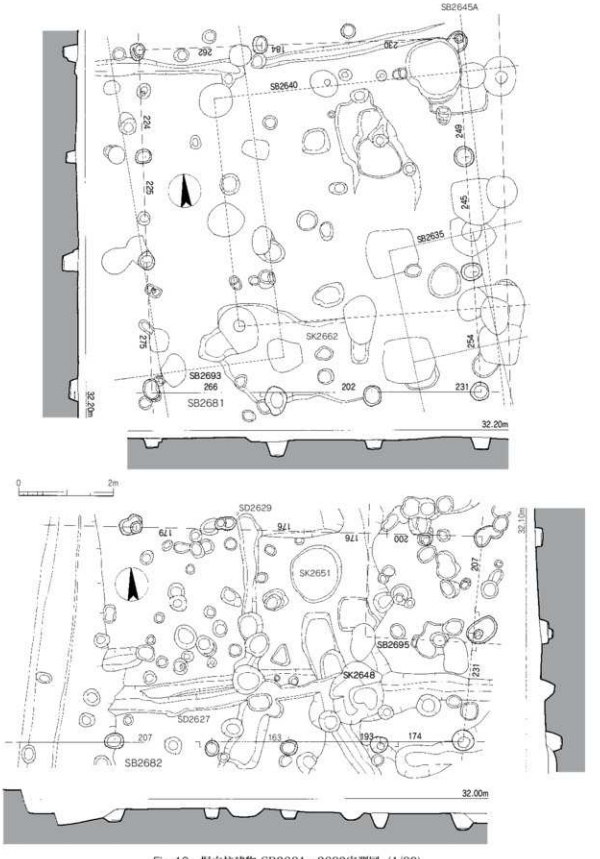


Fig.40　掘立柱建物 SB2681・2682実測図（1/80）

SB2679（Fig.39）

92-2次調査区の中央やや北側に位置し，掘立柱建物SB2677・2685，SD2672と重複するが，建物どうしの前後関係は判然としない。当建物も概報段階では建物として認識していなかったが，今回は梁行２間（3.6m），桁行４間（7.56m）の東西棟建物とした。柱掘方は円形を呈し，径0.23～0.36m，深さ0.12～0.36mとSB2677同様小規模なものであるが，掘方底面のレベルは標高32.0m前後にあり，ほぼ揃っている。柱間は桁側が1.56～2.54m，梁側は1.58～1.9mの間隔で，ばらつきがみられる。梁行方位は北から西に2°振れる。

SB2681（Fig.40）

92次調査区の北側中央に位置し，掘立柱建物SB2635・2640・2645A・2692・2693・2697，SD2634，SK2662と重複するが，柱掘方が小規模な円形を呈することから後出する建物となろう。概報段階では建物として認識していなかったが，今回は梁行３間（6.99m），桁行３間（7.48m）の南北にやや長い建物として考えた。柱掘方は円形を呈し，径0.32～0.6m，深さ0.18～0.34mを測る。柱間は桁側が2.24～2.75m，梁側は2.02～2.66mの間隔を有する。桁行方位は北から東に6°30′振れる。

SB2682（Fig.40）

92次調査区の南西端部に位置し，SD2627を切り，掘立柱建物SB2695，溝SD2629，土坑SK2648・2651と重複する。概報段階では建物として認識していなかったが，今回は梁行２間（4.38m），桁行４間（7.37m）以上の東西棟建物として復原した。西側梁行は調査区外となるが，当初，94次調査区で検出したSA2701と柱筋を揃えることからその穴を拾い，桁行６間規模と考えたが，隅柱を結ぶ線がいびつであり，94次調査区までは延びないことから桁行は５間で収まる。柱掘方は円形ないしは楕円形を呈し，長軸0.32～0.78m，深さ0.13～0.23mを測る。柱間は桁側が1.63～2.07m，梁側は2.07m・2.31mの間隔で，不揃いである。梁行方位は北から東に10°振れる。

SB2683（Fig.33）

92次調査区の北西部に位置し，掘立柱建物SB2675を切り，SB2655・2697と重複する。概報段階では建物と認識していなかったが，今回は梁行２間（3.33m），桁行２間（4.55m）の南北棟総柱建物とした。柱掘方は円形を呈し，径0.4～0.45m，深さ0.16～0.34mを測る。柱間は桁側が2.17～2.38m，梁側は1.56～1.77mの間隔を有する。桁行方位は北から西に2°振れている。

SB2685（Fig.39）

92-2次調査区の北側に位置し，掘立柱建物SB2677・2679，SD2672と重複するが，建物どうしの前後関係は判然としない。当建物も概報段階では認識されていなかったが，今回は梁行２間（4.24m），桁行３間（5.77m）の南北棟総柱建物として復原した。柱掘方は円形を呈し，径0.26～0.4m，深さ0.2～0.5mを測る。柱間は桁側が1.54～2.53m，梁側は2.07～2.17mの間隔を有し，ばらつく。桁行方位は北から東に5°30′振れる。

SB2687A・B（Fig.36）

92-2次調査区の南西側に位置し，掘立柱建物SB2645A・B，土坑SK2666・2669を切る。概報段階で建物として認識していなかったもので，今回は梁行２間，桁行２間以上の南北棟建物としたが，南側梁行が92-1次調査区まで延びないことから桁行は３間で収まる。また，柱

掘方が重複しており，便宜上A建物を△印，B建物を●印で示したが，前後関係は判然としない。

A建物は梁行２間（4.24m），桁行２間以上（3.79m）の建物で，柱掘方は不整円形を呈し，長軸0.47 ～ 0.9m，深さ0.12 ～ 0.23mを測る。柱間は桁側が1.83m･1.96m，梁側は2.07m･2.17mの間隔を有する。桁行方位は北から西に3°振れる。

B建物はA建物のすぐ北側に重複して位置する。梁行２間（4.51m），桁行２間以上（4.04m）で，規模的にはA建物より若干大きい。柱掘方は不整円形を呈し，長軸0.4 ～ 0.58m，深さ0.22 ～ 0.26mを測る。柱間は桁側が1.8 ～ 2.24m，梁側は2.18m・2.33mの間隔を有する。桁行方位は北から西に2°振れる。

SB2688（Fig.35，PL.25）

92-2次調査区の北西隅部に位置し，掘立柱建物SB2665，南北溝SD2638と重複する。南東隅部を検出した程度で，大半が調査区外に延びる。南北方向１間（2.02m）以上，東西方向２間（4.4m）以上で，棟がどちらを向くかは判然としない。柱掘方は円形を呈し，径0.34 ～ 0.46m，深さ0.12 ～ 0.18mを測る。南側中央の柱穴には平瓦が据えられており，礎盤として使用したものか。南北柱列は北から東に11°と大きく振っている。

SB2689（Fig.29，PL.23）

92次調査区の南東側に位置し，掘立柱建物SB2620及びSD2627を切り，SB2668と円形土坑SK2641に切られる。概報段階では建物と認識していなかったが，今回は梁行３間（4.35m），桁行６間（10.53m）の東西棟建物として復原したが，東梁行の南東隅柱から２番目の柱掘方は検出できていない。なお，SB2620の床束穴としたピット（●印）は，当建物の西梁行の南西隅柱から２番目の柱掘方を切っている。このことからも床束穴とする考えは成り立たない。

柱掘方は隅丸方形ないしは円形を呈し，長軸0.4 ～ 0.62m，深さ0.16 ～ 0.46mを測る。掘方底面には径16 ～ 18㎝の小穴があり，柱の沈下痕跡とみられる。柱間は桁側が1.28 ～ 1.95m，梁側は1.18 ～ 1.8mの間隔で，かなりばらつきがある。梁行方位は北から東に3°振れる。

SB2691（Fig.37）

92次調査区の西側に位置し，掘立柱建物SB2655・2674と重複するが，SB2655よりは後出する。概報段階では建物として認識していなかったが，角礫が入っている柱掘方を拾い，梁行１間（2.35m），桁行２間（3.74m）の東西棟建物とした。柱掘方は長円形を呈し，長軸0.4 ～ 0.65m，深さ0.15 ～ 0.32mを測る。角礫は礎盤として入れたものであろう。柱間は桁側が1.78 ～ 1.96m，梁側は2.35mの間隔を有し，梁側が８尺，桁側が６尺を基本とする。梁行方位は北から東に3°振れる。

SB2692（Fig.41，PL.27）

92次調査区の中央やや西側に位置し，掘立柱建物SB2640・2675・2676・2681・2693・2697と重複するが，掘方形状からして後出する。概報段階では建物として認識していなかったが，今回は梁行２間（3.35m），桁行２間（4.66m）の小規模な南北棟建物として復原した。柱掘方は円形を呈し，径0.25 ～ 0.34m，深さ0.17 ～ 0.4mを測る。北東隅柱掘方内には瓦が入っており，礎盤として使用している。柱間は桁側が2.15 ～ 2.48m，梁側は1.48 ～ 1.78mの間隔を有する。桁行方位は北から東に2°振れる。

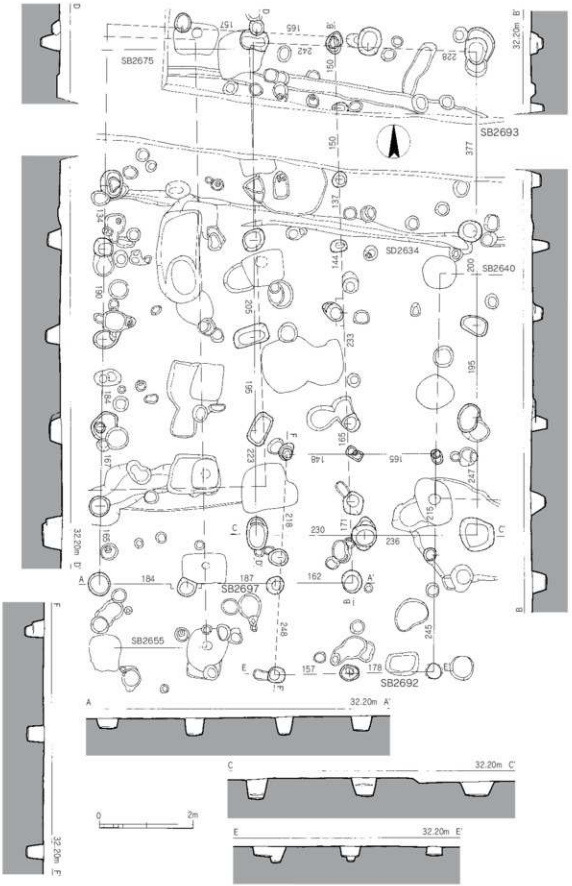


Fig.41　掘立柱建物 SB2692・2693・2697実測図（1/80）

SB2693（Fig.41）

92次調査区の北側に位置し，掘立柱建物SB2640・2675・2681・2692・2697と重複する。概報段階では建物として認識していなかったが，長さ0.7m程の割合大きな穴が南北に並ぶため今回は梁行２間（4.7m），桁行５間（10.42m）の南北棟建物として復原した。北側の梁行は92−2次調査区に跨がる。柱掘方は円形ないしは隅丸長方形を呈し，長軸0.48 ～ 0.7m，深さ0.28 ～ 0.42mを測る。柱間は桁側が1.95 ～ 2.47m，梁側は2.28 ～ 2.42mの間隔を有する。桁行方位は北から東に1°30′振れる。

SB2694（Fig.42）

92次調査区の南西部に位置し，溝SD2627を切り，掘立柱建物SB2676と重複する。当建物も概報段階では建物として認識していなかったが，今回は梁行２間（3.73m），桁行５間（10.72m）の南北棟建物として復原した。なお，桁行の北側から２番目及び３番目にあたる建物の中央には柱穴があり，２間×２間の同規模建物が南北に並列する可能性もあるが，一応桁行５間の建物としておく。この場合，先の柱穴は間仕切りに関する柱穴になろう。柱掘方は不整円形を呈し，長軸0.4 ～ 0.62m，深さ0.12 ～ 0.42mを測る。幾つかの掘方内には石が据えられており，礎盤としている。柱間は桁側が1.76 ～ 2.37m，梁側は1.68 ～ 1.88mの間隔を有する。桁行方位は北から東に4°振れる。

SB2695（Fig.37）

92次調査区の西側に位置し，掘立柱建物SB2674に切られ，SB2682と重複する。概報段階では建物として認識していなかったもので，今回は梁行２間（3.93m），桁行５間（9.36m）の南北棟建物として復原した。柱掘方はいびつな楕円形状を呈することから柱を抜き取った可能性が考えられる。掘方は長軸0.7 ～ 1.3m，深さ0.25m前後であるが，本来北側梁行中央の掘方（径0.43m）位の大きさであったとみられる。柱間は桁側が1.54 ～ 2.3m，梁側は1.89m・2.04mの間隔で，かなりばらついている。桁行方位は北から西に2°振れる。

SB2696（Fig.38）

92次調査区の北西部に位置し，掘立柱建物SB2655・2675・2683，土坑SK2656と重複するが，柱掘方の小規模な当建物はSB2655・2675に後出する。当建物も概報段階では建物として認識していなかったが，今回は梁行２間（3.44m），桁行２間（4.69m）以上の南北棟の東桁側に廂を設けた片廂建物として復原した。柱掘方は円形を呈し，径0.32 ～ 0.46m，深さ0.16 ～ 0.38mを測る。廂の隅柱から３番目の柱掘方内には礫が充填されており，柱押さえとして入れたものか。柱間は桁側が2.09 ～ 2.39m，梁側は東から1.74m・1.82m・1.62mの間隔を有する。桁行方位は北から西に1°振れる。

片廂建物

SB2697（Fig.41，PL.26）

92次調査区の北西部に位置し，掘立柱建物SB2655・2675・2683を切り，SB2681・2692・2693と重複するが，柱掘方の形状から後出するものとみられる。概報段階では建物として認識していなかったが，今回は梁行３間（5.33m），桁行７間（11.98m）の南北棟として復原した。柱掘方は円形を呈し，径0.35 ～ 0.48m，深さ0.2 ～ 0.35mを測る。柱間は桁側が1.34 ～ 2.33m，梁側は1.62 ～ 1.87mとかなりばらつく。桁行方位は北から西に1°振れる。

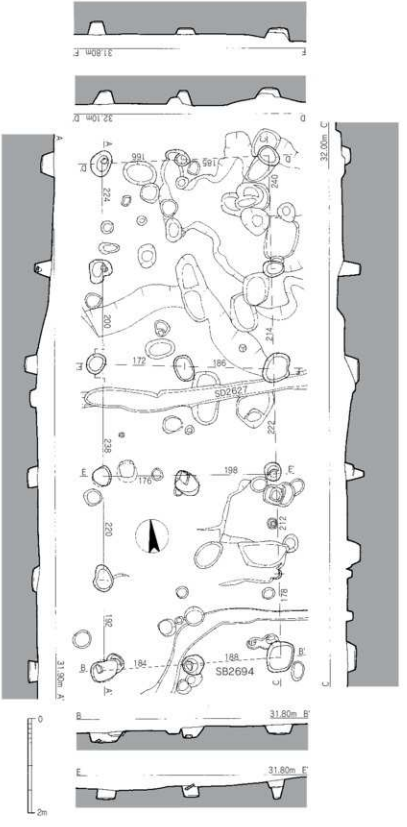


Fig.42　掘立柱建物 SB2694実測図（1/80）

SB2728（Fig.43）

94次南半調査区の北東隅部に位置する。遺構図には図示されていないが，調査時点で南北溝SD2680埋土中に切り込む柱穴２個（破線の柱穴）を確認しており，同溝より後出する。概報ではSB2728として桁行３間×行３間以上の東西棟建物になる可能性があるとしているが，今回は桁行２間（5.15m），桁行２間以上の総柱建物として考えた。

南端柱穴列の柱間は，西から2.1m・1.8m？と東側がやや狭くなっているので，調査区外に東側の桁行柱列が来るとすれば，桁行は３間となる。柱掘方は楕円形状を呈し，長軸0.46～0.53m，深さ0.22～0.3mを測る。西側から２列目の柱掘方内には扁平な石が据えられており，礎盤としている。桁行方位は北から東に3°30′振っている。

SB2739（Fig.43）

94次南半調査区の北西隅に位置する。概報段階では建物として認識していなかったが，今回は建物として報告する。東西・南北方向に各１間を検出したが，北半調査区へは延びないことから桁行は２間とみられるが，大半が調査区外にあるため詳細は不明。柱間は南北方向が2.16m，東西方向が2.23mを測る。柱掘方は長軸0.5m程の長円形を呈し，深さ0.2～0.36mを測る。桁行方位は北から東に2°振れる。

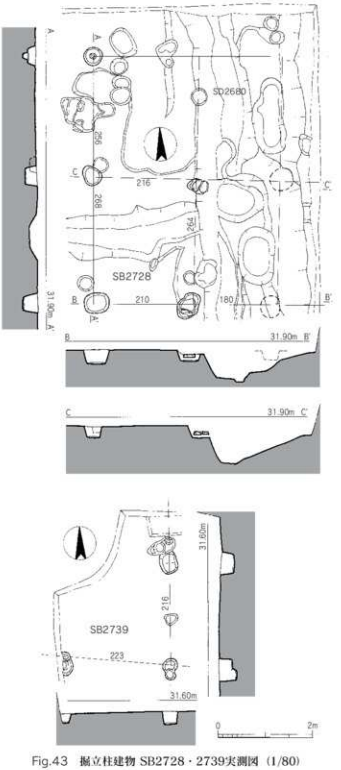


Fig.43　掘立柱建物 SB2728・2739実測図（1/80）

SB3223（Fig.44）

不丁地区官衙の西限溝であるSD320と東西溝SD2350A・Bが交わる箇所の南西部には小規模なピットが蝟集するが，中には直線的に並び，柱穴とみられるピットも存在する。概報段階

では建物として全く認識していなかったが，図面検討の結果，複数の建物が存在すると考えられた。ただ，大半の建物が調査区外に延びることから詳細は不明ながら提示しておく。

掘立柱建物SB3225にすっぽり収まる形で位置し，SB3227・3228・3229と重複する。東西方向３間（9.35m），南北方向１間（2.0m）以上の検出状況であるが，一応東西棟とした。柱掘方は円形を呈し，径0.3～0.43m，深さ0.16～0.4mを測る。桁側の柱間は東から3.2m・3.15m・3.0mで，平均値は10.5尺と長めである。梁行方位は北から東に8°30′振れる。

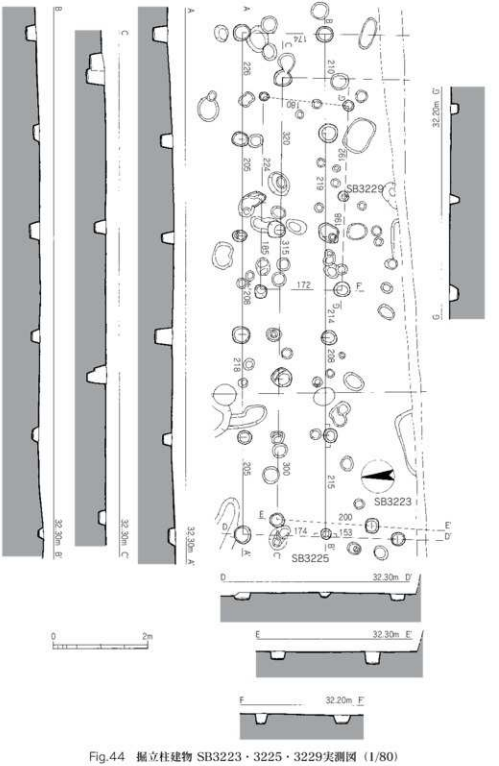


Fig.44　掘立柱建物 SB3223・3225・3229実測図（1/80）

SB3225（Fig.44）

110次調査区の南端部に位置し，掘立柱建物SB3223・3227・3228・3229と重複するが，前後関係は判然としない。梁行１間以上（恐らく２間），桁行５間（10.62m）の身舎の北側桁行に廂を設けた片廂建物として復原したが，南半部が調査区外にあることから二面廂の可能性もある。柱掘方は円形を呈し，径0.24～0.35m，深さ0.14～0.36mを測る。桁行の柱間は東から2.26m・2.05m・2.08m・2.18m・2.05mと不揃いであるが，柱間の平均値は2.12mであり，７尺を基本とする。廂の出は1.74m（約６尺）を測る。梁行方位は北から東に6°30′振れる。

片廂建物?

SB3227（Fig.45）

110次調査区の南端部に位置し，掘立柱建物SB3223・3225・3228・3229と重複するが，前後関係は判然としない。梁行３間（5.58m），桁行１間（2.27m）以上の身舎の東西両桁行に廂を設けた二面廂建物として復原した。梁行総長は9.5mとなる。しかし，大半が調査区外

二面廂建物

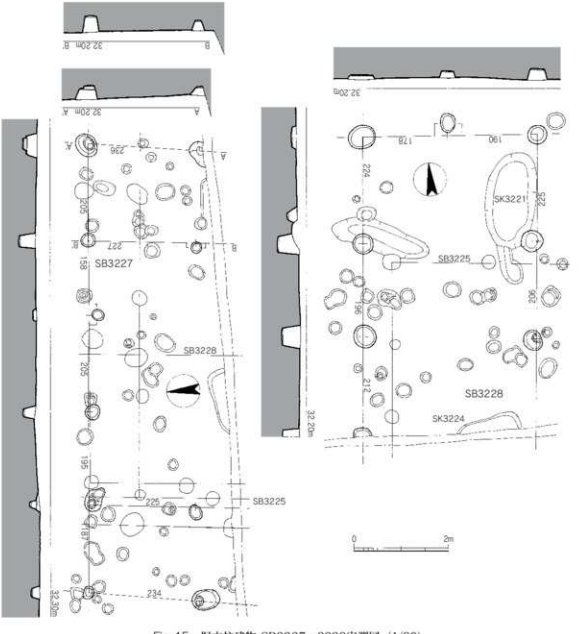


Fig.45　掘立柱建物 SB3227・3228実測図（1/80）

にあるため詳細は不明。柱掘方は円形を呈し，径0.24～0.52m，深さ0.1～0.34mと小規模なものである。梁行の柱間は東から2.05m・1.58m・2.05m・1.95m・1.87mと不揃いであった。桁行方位は北から東に10°振れる。

SB3228（Fig.45）

110次調査区の南西部に位置し，掘立柱建物SB3223・3225・3227，土坑SK3221・3224と重複するが，前後関係は判然としない。梁行2間（3.68m），桁行3間（6.32m）以上の南

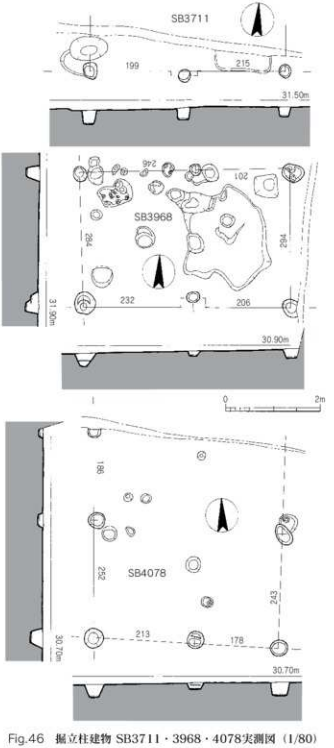


Fig.46　掘立柱建物 SB3711・3968・4078実測図（1/80）

北棟建物としたが，南側梁行は調査区外に延びる。柱掘方は円形を呈し，径0.42 ～ 0.56m，深さ0.1 ～ 0.46mを測る。柱間は桁側が1.96 ～ 2.25m，梁側は1.78m･1.9mの間隔であるが，梁行は６尺，桁行は７尺を基本とする。桁行方位は北から東に6°振れる。

SB3229（Fig.44）

110次調査区の南側中央に位置し，掘立柱建物SB3223・3225・3227と重複するが，前後関係は判然としない。梁行１間（1.8m），桁行間２（4.08m）の東西棟建物として復原したが，南側にもう１間分延びると２間× ２間の総柱建物になる可能性を残す。柱掘方は円形を呈し，径0.21 ～ 0.32m，深さ0.2m前後を測る。桁行の柱間は1.87 ～ 2.21mの間隔を有する。梁行方位は北から東に6°振れる。

SB3711（Fig.46）

125次調査区の北側中央で検出した３個の柱穴群を建物とした。大半が調査区外に延びるため詳細は不明であるが，東西方向に柱穴群が展開しないことから南側梁行とみられる。柱穴は径0.3m弱の円形を呈し，深さは0.2 ～ 0.28mを測り，西側に下がっている。柱間は東から2.15m，1.99mの間隔を有する。建物方位は北から西に3°振れる。

SB3968（Fig.46）

138次調査区の北側に位置する。概報段階では建物として認識していなかったが，今回は梁行１間（2.94m），桁行２間（4.47m）の東西棟側柱建物として復原したが，北側にもう一間分延びると総柱建物になる可能性を残す。柱掘方は円形を呈し，径0.24 ～ 0.46m，深さ0.1 ～ 0.26mを測り，四隅の柱穴は中央の柱穴に比して径・深さともに大きい。桁行の柱間は2.01 ～ 2.46mの間隔を有する。梁行方位は北から西に3°振れる。

SB3978（Fig.51）

139次調査区の南端に位置し，溝SD3980と切り合う。柱穴３個の検出にすぎないが，掘方が0.7mと大きいことから建物とした。大半が調査区外の南側に伸展するため詳細は不明であるが，梁行２間（4.29m）の南北棟になるか。柱掘方は楕円形を呈し，長軸0.66 ～ 0.96m，深さ0.3mで，柱間は東から2.31m・1.98mを測る。梁行方位は東から南に3°振れる。

SB4078（Fig.46）

152次調査区の北東端部に位置する。概報段階では建物として認識していなかったが，今回は梁行２間（3.91m），桁行間２間（4.38m）以上の南北棟建物として報告する。柱掘方は円形を呈し，径0.27 ～ 0.39mで，深さは0.1 ～ 0.25mを測るが，南東・南西隅柱は他の掘方に比して深い。柱間は桁側が1.86 ～ 2.52m，梁側は1.78m・2.13mの間隔を有する。桁行方位は北から東に2°振れる。

SB4620（Fig.47）

194次調査区の中央やや南側に位置し，掘立柱建物SB4625，柵SA4624，溝SD2705Aに切られる。梁行２間（3.08m），桁行２間（3.26m）の総柱建物で，東西方向に若干長い。柱掘方は円形を呈し，径0.48 ～ 0.86mの大きさである。建物は上面検出に留め，中央の掘方のみ半裁しているが，それによると深さは0.56mを測る。幾つかの掘方では，径14 ～ 28㎝の柱痕跡を確認している。柱間は桁側が1.45 ～ 1.67m，梁側は1.46 ～ 1.56mの間隔を有する。梁行方位は北から西に1°振れる。

SB4625（Fig.47）

194次調査区の南東部で検出した。溝SD2705A・Bに切られ，掘立柱建物SB4620を切り，柵SA4624と重複する。年次報告では，２(以上)×３間の南北棟と考えられるとしていたが，SD2705Bの肩部で梁行の柱掘方を検出していないため桁行３間とは断定できず，梁行１間以上，桁行３間以上の南北棟建物と修正しておく。柱掘方は楕円形を呈し，長軸0.32～0.6mで，深さは0.1m前後である。北側梁行中央の掘方では，径13cmの柱痕跡を確認している。柱間は桁側が北から2.1m・2.17m・1.98mで，梁側は1.9mの間隔である。桁行の柱間平均が2.08mであることから７尺を基本とする。桁行方位は北から東に5°振れる。

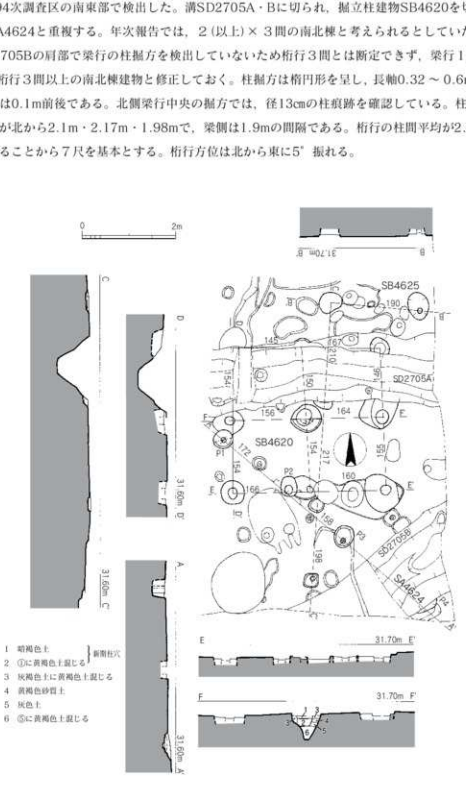


Fig.47　掘立柱建物 SB4620・4625，柵 SA4624実測図（1/80）

（2）柵

大楠地区では，14・88・92・92-2・92-3・94・138・139・146・152・194・196次調査において大小27列の柵を確認した。柵には現場時点で検出したものと今回の報告書作成時の図面検討によって新規に確認したものの二者が存在するが，後者の図面検討によって柵とみなしたものが大半を占める。なお，柵の方位は，国土調査法第Ⅱ座標系の南北軸或いは東西軸から柵両端の柱穴底面中心を結んだ線が何度振れているかを全円分度器で計測して求めた数値である。

SA321（Fig.48）

14-1次調査は，コ字形に設定したトレンチ調査で，SA321は南トレンチの西端に位置する。北東－南西方向に走る小溝（SD319）の0.25m北側でそれと平行する形で柱穴３個（P2 ～ 4）を検出したが，南側は調査区外に延びるものと思われる。径はP2が0.4mで，P3は0.25mとやや小さく，深さはP2が0.22m，P3は0.14mと浅い。柱間はP2-3間が1.13m，P3-4間は1.44mを測る。方位は北から東に48°30′振っている。

ただ，これと直交するようにP2の南東1.33mの位置にP1があり，径0.28m，深さ0.14m，P1-2間1.53mを測る。P1 ～ 4が関連するのであれば，掘立柱建物或いはL字形の柵が考えられるが，無関係なら小溝を伴った柵の可能性も有する。

SA2564（Fig.48）

88次調査区の北端に位置し，西側延長部は196次調査Ａトレンチで確認した。東西溝SD2582に北接して配されていることから概報では両者が関連するとしていたが，柱穴P1 ～ 3・5は掘方の半分程が溝と切り合っており，前後関係は指摘できても関連性を言うには無理があろう。88次調査区で５側（P1 ～ 5），196次調査区で１側（P6）の柱穴を確認したが，東西両側とも調査区外に延びる可能性がある。柱穴は径0.5mの小型のもの（P1・3・4・6）と径0.8m前後の大型のもの（P2・5）があり，大型のものが本柱で，小型のものは支柱になるか。検出面からの深さは0.12 ～ 0.46mを測るが，柱穴底面のレベルは標高30.8m付近にあり，ほぼ揃っている。柱間は東から2.23m・2.35m・2.18m・2.23m・4.96m（２間分）の間隔である。方位は東から北に3°振っている。

SA2609（Fig.27）

88次調査区の南側で，掘立柱建物SB2610の北側1.5mにそれと柱筋を揃えて位置し，SB2555とは重複関係にある。東西方向の柵で，３間分の長さ6.62mを確認した。柱穴は円形を呈し，径0.34 ～ 0.4mを測る。検出面からの深さは0.26 ～ 0.4mであるが，柱穴底面は標高31.7m付近にあり，ほぼ揃っている。柱間は東から2.36m・2.26m・2.0mの間隔で，方位は東から南に6°振っている。

SA2611（Fig.27）

88次調査区の南側に位置し，掘立柱建物SB2555・2610と重複する。東西方向の柵で，SB2610と柱筋を等しくし，３間分の長さ6.56mを確認した。柱穴は円形を呈し，径0.3 ～ 0.46mで，検出面からの深さは0.13 ～ 0.31mを測る。柱間は東から2.3m・2.1m・2.16mを測り，方位は東から南に6°振っている。

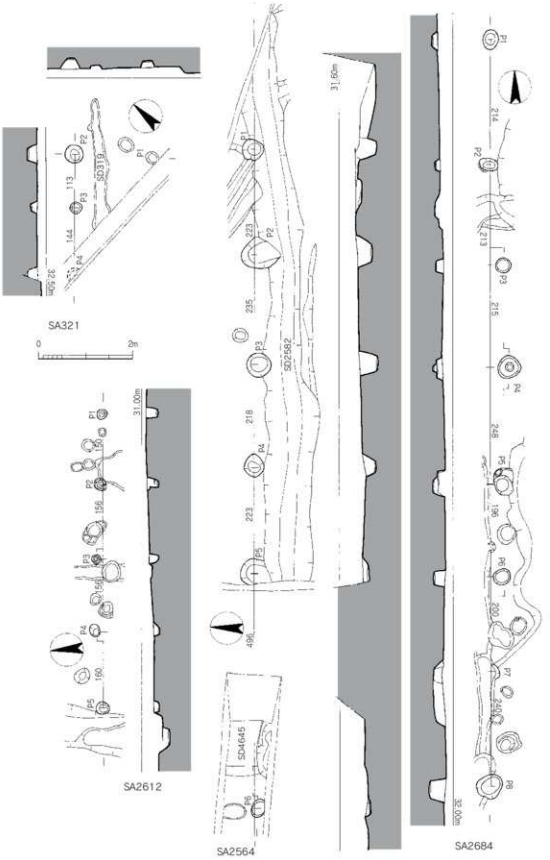


Fig.48　柵 SA321・2564・2612・2684実測図（1/80）

SA2612（Fig.48）

88次調査区の南西部に位置し，掘立柱建物SB2560及び溝SD2573と重複する。東西方向に5個の柱穴が並び，4間（6.22m）で完結することから目隠し塀的な役割を持つか。柱穴は径0.2～0.3m，深さ0.25m前後で，柱間は東から1.5m・1.56m・1.56m・1.6mとほぼ等間隔である。方位は東から南に5°振っている。

目隠し塀の役割

SA2684（Fig.48）

92-1次調査区の西端部に位置し，溝SD2629，井戸SE2623，土坑SK2652と重複している。南北方向の柵で，7間分（15.26m）を確認した。柱穴は円形を呈し，径0.3～0.6mを測る。検出面からの深さは0.1～0.46mであるが，柱穴底面のレベルは標高31.6m付近にあり，ほぼ揃っている。柱間はP1～4間が2.14m（約7尺）前後であるが，P4～8間は2.48m・1.96m・2.0m・2.4mとばらつきがみられる。方位は北から東に2°振っている。

SA2686（Fig.29，PL.23）

92次調査区の南側で，掘立柱建物SB2620の1.3m北側に位置する。東西方向の柵で，2間分の4.23mで完結することから目隠し塀的な役割を有しよう。柱穴は径0.5m前後の円形を呈し，深さは0.15～0.26mを測る。柱穴底面のレベルは標高31.5m付近にあり，ほぼ揃っている。柱間はP1-2間2.17m，P2-3間2.06mの間隔を有し，方位は東西軸を示す。

目隠し塀の役割

SA2701（Fig.49，PL.34）

94次南半調査区の南東端部に位置し，南北溝SD2680の西肩部と重複する。南北方向の柵で，西側1.8mには当柵と平行する形で南北方向の柵SA2702があり，南北溝SD2700の東肩部に配されていることからSD2680・2700間を築地の基部とみなし，SA2701・2702の柱穴を築地塀の寄柱かと考えたが，両柵の柱間間隔が一致しておらず，両溝にも時期差が存在することからSA2701・2702どうしは関連しないものと判断した。また，P1～3は掘立柱建物SB2682の西側柱列の可能性も考えたが，平面形が余りにも歪になることから別物とみなした。

柱穴は3間分（6.48m）の4個を検出したが，調査区外の南側に延びるとみられる。円形を呈し，径0.32～0.38m，深さ0.18～0.4mを測る。柱間は北から2.09m・2.30m・2.09mの間隔を有する。方位は北から東に2°振っている。

SA2702（Fig.49）

柵SA2701の西側1.8mに位置する南北方向の柵で，溝SD2700，土坑SK2706と重複する。柱穴は4間分（8.9m）の5個を検出したが，調査区外の南側に延びるものとみられる。柱穴は円形を呈し，径0.24～0.37mを測る。検出面からの深さは0.13～0.3mを測るが，柱穴底面のレベルは標高31.5m付近にあり，ほぼ揃っている。柱間はP1－2間が2.93mと長いが，P2～5間は2m前後の間隔で配されている。方位は北から東に1°30′振っている。

SA2703（Fig.49，PL.34）

94次南半調査区の東端中央に位置する南北方向の柵で，4間分の長さ7.57mを検出したが，南延長部は南北溝SD2680と重複しているためもっと長くなる可能性がある。柱穴は円形を呈し，径0.26～0.44mを測る。検出面からの深さは0.1～0.26mであるが，柱穴底面のレベルは標高31.6m付近にあり，ほぼ揃っている。柱間は北から1.90m・2.16m・1.93m・1.58mで，P4－5間がやや短い。方位は北から東に2°振っている。

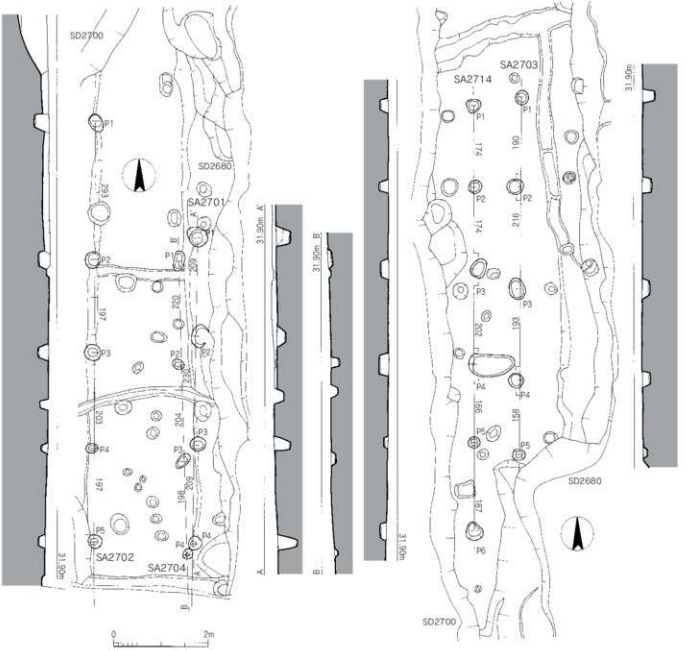


Fig.49　柵 SA2701 ～ 2704・2714 実測図（1/80）

SA2704（Fig.49，PL.34）

柵SA2701のすぐ西隣に位置する南北方向の柵で，南端はSA2701と重複する。柱穴は３間分（6.22m）の４個を検出したが，調査区外の南側に延びるか。柱穴は楕円形を呈し，径0.24～0.36m，深さ10cm前後の小規模なものである。柱間は北から2.2m・2.04m・1.98mの間隔で，方位は座標北を示す。

SA2707（Fig.50，PL.27）

92-2次調査区の中央から西側にかけて位置し,掘立柱建物SB2677と重複し，SB2660と東西溝SD2350Aとは切り合い関係にある。東西方向の柵で，５間分の長さ14.12mを確認した。柱穴は円形を呈し，径0.28～0.36mを測る。検出面からの深さは8～16cm程であるが，柱穴底面のレベルは標高32.0m付近にある。P2～4には瓦が入っており，礎盤として使用している。柱間は東から3.03m・3.36m・2.55m・2.4m・2.78mと他の柵に比して間隔が長い。方位は東から北に7°30′振っている。

SA2708（Fig.38，PL.27）

92次調査区の中央部に位置し，掘立柱建物SB2676と重複する。東西方向の柵で，３間分の長さ5.44mを確認した。柱穴は円形を呈し，径0.44～0.6mで，P1～3は２段に掘り込んでいる。検出面からの深さは0.26～0.36mを測る。柱間は東から1.64m・2.01m・1.79mの間隔を有し，方位は東から南に1°振っている。

SA2709（Fig.50）

92-2次調査区の中央やや南側に位置する東西方向の柵で，５間分の長さ10.45mで完結する。北側３mには溝SD2350Bが東西方向に走るが，長さ7.2mに渡って途切れており，丁度その箇所を遮蔽する格好で当該柵が存在する。柱穴は円形を呈し，径0.36～0.52mを測る。検出面からの深さは0.12～0.3mであるが，柱穴底面のレベルは標高32.0m付近にある。柱間は東から2.02m・1.82m・2.06m・2.2m・2.35mの間隔で，方位は東から南に1°30′振っている。

SA2714（Fig.49，PL.34）

94次南半調査区の東端中央で，SA2703の西側0.7mに位置する。南北方向の柵で，５間分の長さ9.03mを確認したが，南延長部は南北溝SD2700と重複しているためもっと長くなる可能性がある。また，SA2702の北側延長部にあたるが，軸が若干ずれており，両者は同一の柵ではない。柱穴は径30cm前後の円形を呈するが，P4は長軸0.94mの楕円形を呈し，他より一回り大きい。検出面からの深さは0.1～0.2mと著しい削平を受けるが，柱穴底面のレベルは標高31.6m前後にあり，ほぼ揃っている。柱間は北から1.74m・1.74m・2.02m・1.66m・1.87mの間隔で，ばらつきがみられる。方位は北から東に2°振っている。

SA2721（Fig.50）

94次南半調査区の中央で，南北溝SD2705の西側4.3mに位置する。南北方向の柵で，３間分の長さ4.97mを確認した。柱穴は円形を呈し，径0.25cm程で，深さは10cmのもの（P1・3）と25cmのもの（P2・4）がある。柱間はP1-2間1.57mで，P2-3間とP3-4間は1.7mの間隔を有する。方位は北から東に1°振っている。

SA2753（Fig.50）

94次北半調査区の北西部で，南北溝SD2705の５m西側に位置する。この周辺には大小20個

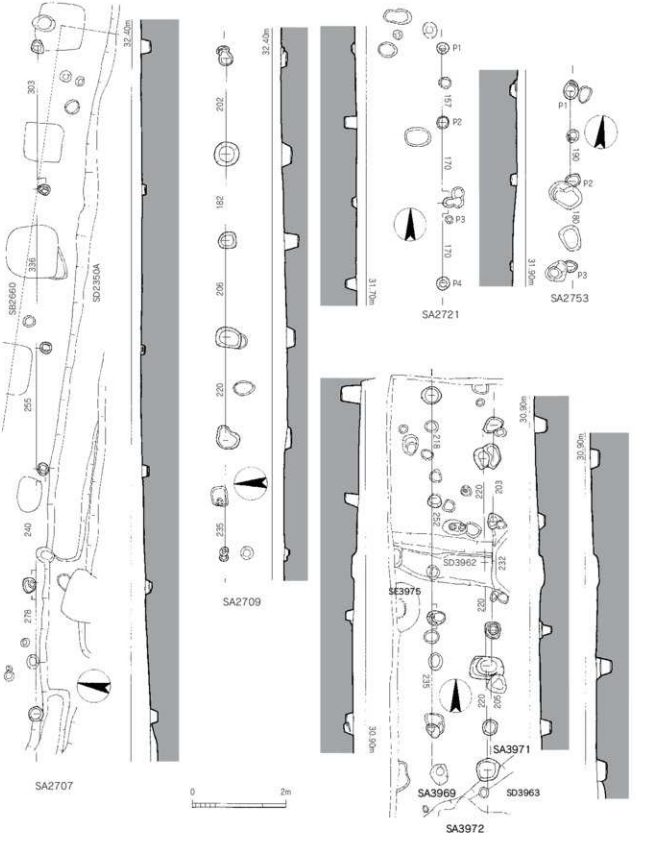


Fig.50　柵 SA2707・2709・2721・2753・3969・3971・3972実測図（1/80）

程のピットが存在するが，同規模で並ぶ柱穴３個を柵とみなした。南北方向の柵で，２間分（3.7m）で完結する。柱穴は円形を呈し，径0.3 ～ 0.4mを測る。P3の深さは5cmと著しい削平を受けるが，柱穴底面のレベルは標高31.6mにあり，揃っている。柱間はP1-2間が1.9m，P2-3間が1.8mの間隔で，方位は北から西に5°振っている。

SA3969（Fig.50）

138次調査区の西端に位置し，東西溝SD3962と重複する。南北方向の柵で，３間分の長さ7.05mを確認したが，南側には攪乱坑があり，北側は調査区外に延びる可能性があるためもっと長くなろう。柱穴は径0.3 ～ 0.4mの円形を呈し，検出面からの深さは0.2 ～ 0.42mを測るが，柱穴底面のレベルは標高30.4m前後にあり，ほぼ揃っている。柱間は北から2.18m・2.52m・2.35mの間隔である。方位は北から東に2°振っている。

SA3971（Fig.50）

138次調査区の西側で，SA3969の東側0.8mにそれと平行して位置し，柵SA3972，東西溝SD3962，井戸SE3970と重複する。南北方向の柵で，３間分の長さ6.4mを確認したが，南側には攪乱坑があり，北側は調査区外に延びる可能性があるためもっと長くなるものと思われる。柱穴は径0.33 ～ 0.38mの円形を呈し，検出面からの深さは0.14 ～ 0.26mを測るが，柱穴底面のレベルは標高30.5m前後にある。柱間は北から2.03m・2.32m・2.05mの間隔を有する。方位は北から東に2°振っている。

SA3972（Fig.50）

138次調査区の西側で，SA3969の東側0.6mにそれと平行して位置し，柵SA3971，東西溝SD3962，溝SD3963，井戸SE3970と重複する。南北方向の柵で，３間分の長さ6.6mを確認したが，前述の柵同様もっと長くなるものと思われる。柱穴は長軸0.48 ～ 0.72mの隅丸方形を呈し，検出面からの深さは0.2 ～ 0.3mを測る。柱間は2.2mの等間で，方位は北から東に1°振っている。なお，当該柵は，前二者と比して柱穴の規模が大きく，柱間が等間であることから５間規模の南北棟掘立柱建物の可能性も有する。

SA3977（Fig.51）

139次調査区の中央部から西側にかけて位置し，溝SD3979・3985と重複する。東西方向の柵で，２間分（4.13m）を確認しているが，東延長部にはSK3976があり，西延長部は調査区外となることから長くなる可能性がある。柱穴は長軸0.36 ～ 0.52mの円形を呈し，検出面からの深さは0.22 ～ 0.37mで，柱穴底面のレベルは西側に下がっている。柱間はP1-2間2.26m，P2-3間1.87mを測る。方位は東から南に3°振っている。

SA3981（Fig.51）

139次調査区の北端から146次調査区の南端にかけて走る東西方向の柵で，139次調査（西半）で５個，146次調査（東半）では７個の柱穴を確認した。溝SD3979・3980・3985・4025，土坑SK4020・4026とは切り合い関係にある。南北溝SD3985以西には延びないことから西端はP12におけるが，東側は調査区外に延びる。P1 ～ 12間の距離は，20.15mを測る。柱穴は径0.3m程の円形を呈し，検出面からの深さも0.3m程を測る。東半の柱穴底面のレベルは標高31.0m付近にあるが，西半では西側に下がっている。柱間は0.88 ～ 1.28mとばらつきがみられる。方位東から南に1°振っている。

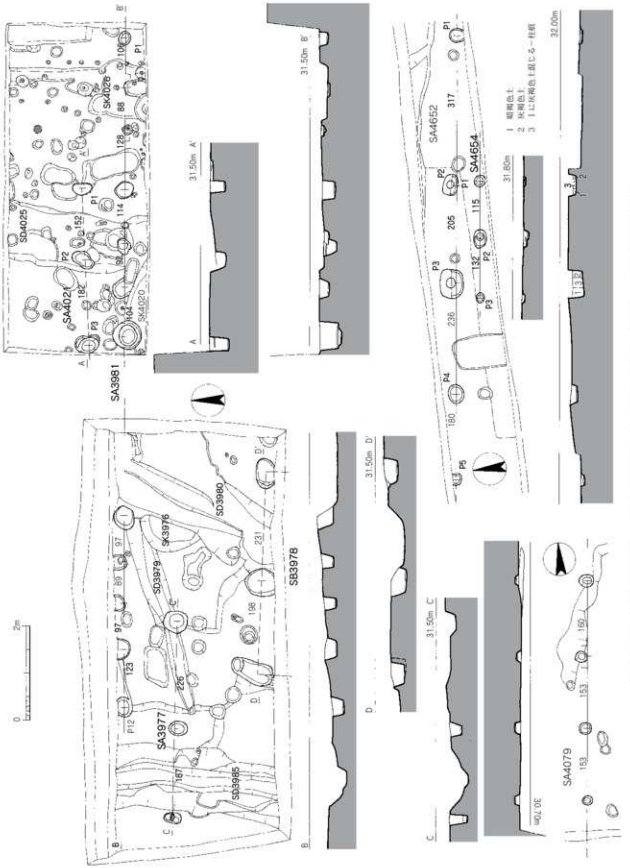


Fig.51　掘立柱建物 SB3978、柵SA3977・3981・4021・4079・4652・4654実測図（1/80）

SA4021（Fig.51）

146次調査区の中央で，柵SA3981の0.3m北側に位置し，南北溝SD4025と切り合う。東西方向の柵で，２間分（3.34m）を確認したが，調査区外の西側に延びる可能性がある。柱穴は長軸0.41～0.49mの楕円形を呈し，検出面からの深さは0.3～0.4mと西側に深くなっている。柱間はP1-2間1.52m，P2-3間1.82mの間隔である。方位は東から北に2°振っている。

SA4079（Fig.51）

152次調査区の南東側に位置する。南北方向の柵で，３間分の長さ4.66mを確認したが，南側は調査区外に延びるものとみられる。柱穴は径0.22～0.31mの円形を呈し，深さは10cm程と削平が著しいものの，柱穴底面のレベルは標高30.4mにあり，ほぼ揃っている。柱間は北から1.6m・1.53m・1.53mとほぼ等間隔で，方位は北から東に3°振っている。

SA4624（Fig.47）

194次調査区の南側に位置し，掘立柱建物SB4620を切り，溝SD2705ABに切られ，SB4625と重複する。北西－南東方向に走る柵で，３間分の5.4mを確認したが，両端部とも調査区外に延びるものとみられる。柱穴は0.5m程の円形を呈し，12cm大の柱痕を検出した。すべての柱穴を完掘した訳ではないので深さは不明だが，P1は0.3m程の深さがあった。柱間はP1－2間が1.72m，P2－3間が1.58mを測り，方位は北から西に49°振っている。

SA4652（Fig.51，PL.35）

92次調査区の南東端部に隣接する92-3次調査で検出した東西方向の柵で，年次報告の段階では３間分としていたが，今回は東側の柱穴（P1）も拾い４間分（9.38m）とした。東西両端は調査区外に延びるものとみられる。柱穴は長軸0.26～0.6mの円形ないしは楕円形を呈し，検出面からの深さは5～35cmを測るが，柱穴底面のレベルは31.5m付近にある。また，P2・3では0.2m前後の柱痕を確認した。柱間は東から3.17m・2.05m・2.36m・1.8mとばらつく。方位は東から南に7°振っている。

SA4654（Fig.51，PL.35）

92-3次調査区の中央で，SA4652の南側0.35mにそれと平行して位置する。東西方向の柵で，２間分（2.47m）を確認したが，東側へは延びる可能性がある。柱穴は径0.24～0.36mの円形を呈し，P2は２段に掘り込んでいる。深さは５cm前後であるが，柱穴底面のレベルは31.5m前後にあり，ほぼ揃っている。柱間はP1-2間1.15m，P2-3間1.32mを測る。

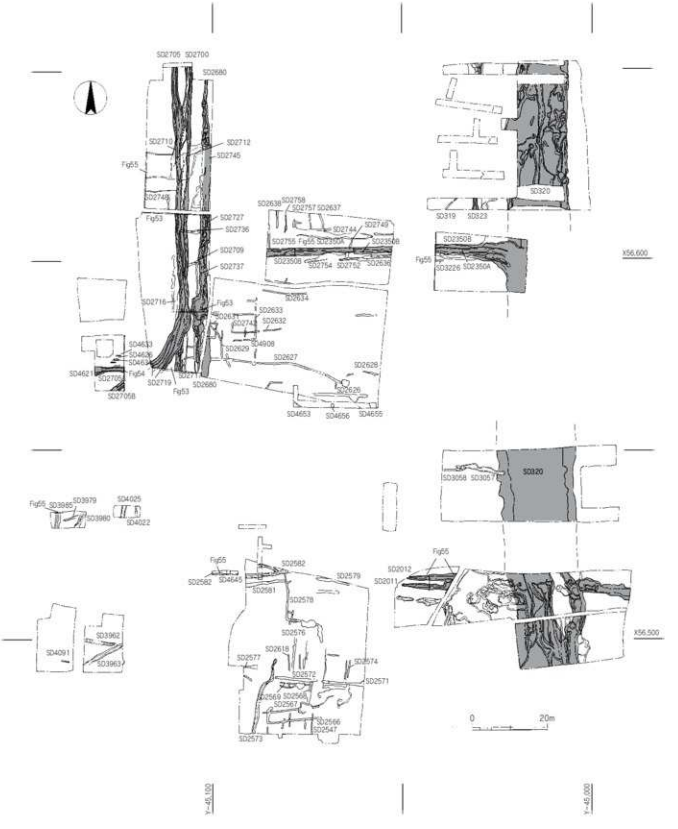


Fig.52　大浦地区溝配置図（1/1,000）

（3）溝（Fig.52）

大楠地区官衙は，境界溝SD320によって東の不丁地区官衙と分けられる。ただし，西側の広丸地区との境界については，現段階では明確に示していない。そのため，本地区の西を限る可能性が高いSD2680の西側の遺構も含めて報告を行っている。

官衙の境界

東の境界溝SD320については，既に『不丁地区遺構編』で詳細を報告している。溝幅は13～16m程度であり，滞水を示す腐植土や粘質土，流水を示す砂層が交互に堆積している。このSD320と本地区の境界溝SD2680の心々距離は89.20mである。本地区では，こうした境界を示すと考えられる溝や，東西に走る区画溝等を遺構の検出状況を踏まえながら，1）境界溝，2）区画溝，3）その他の区画溝，4）その他の溝の順に分けて報告する。

1）境界溝

SD2680（Fig.43・53，PL.37・39）

92・94次調査区で検出した。ただし，92次調査では東肩の一部のみの検出である。94次調査では南北方向に流れる溝で，77.75m分を検出した。北側W地区では，東西溝SD2745に切られており，残存状況は良くない。並走するSD2700との距離は，W地区で3.15～3.52m，T地区では3.30～3.65mである。南北に走る溝の規模は各地点で変わるが，概ね0.70～2.95m，底部幅0.60～1.10m，深さ0.77～0.92mである。

より詳細にみれば，W地区北端で溝肩部幅0.7m，底部幅0.50m，深さ0.09m，残りの良い南側では溝肩部幅1.50m，溝底幅0.30m，左右に0.25～0.40mのテラス状の段を設ける箇所がある。地区南端では肩部幅2.10m，底部幅0.50m，深さ0.28mとなる。南のT地区では，北端で溝肩部幅2.50m，底部幅0.40m，テラス部0.23m，深さ0.57m，中央付近では，肩部幅2.00m，底部幅1.1m，深さ0.79mとなる。注意されるのは溝下部の形状で，底幅0.25m，深さ0.30m程度で直立気味に壁がたち上がる。南北各地点で部分的にみられ，本来この溝が下部に段を持って，断面「箱形」であったと考えられる。

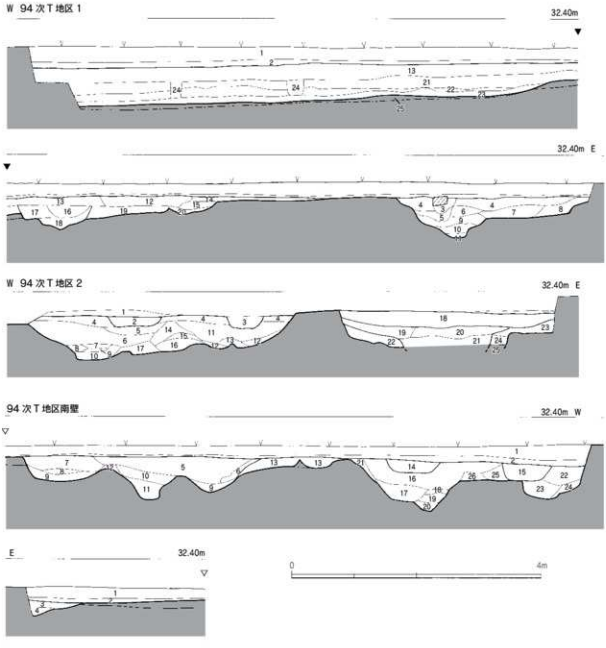
溝は人為的な埋戻しと判断される厚さ0.15～0.20mの黄色粘質土混じりの層を挟んで上下2層に分かれる。上層は暗茶褐色土，下層は暗灰色粘質土である。下層下部には茶褐色砂層があるが，この層が堆積するのは，立ち上がりの鋭い溝下部である。図示したT地区北壁（Fig.53）では，溝の埋没を示す茶灰色土の下位に上層となる暗茶色土，さらに流水を示す灰色粗砂，滞水を示す灰色粘質土が堆積している。そして下層に滞水を示す黒灰色粘質土（腐植土混），最下層が灰色砂となる。

人為的な埋戻し

北から溝底の標高を追ってみると，W地区北端31.66m，W地区南端31.36m，T地区北側30.87m，南端30.85mとなる。以上のように，溝南北では0.8mの高低差を持って南側へ緩やかに傾斜している。この点から，調査区北端部で表土直下に地山面があり，溝の深さが著しく浅いことなどから既に遺構の上部が大きく削平されていると考えられる。

SD2700（Fig.53，PL.37～40）

94次調査区W・T地区で検出した南北方向に走る溝である。W地区で長さ34.5m，T地区で41mを調査したが，未調査地区2mを含めて長さ77.5mに亘る。SD2680とは心々で約4.2m（14尺）の間隔で並走している。また，東西方向の溝SD2475を切るが，SD2710やSD2705に切



94 次南手部北壁

1　黒色土（表土）
2　黄褐色土（床土）
3　黄茶色土
4　茶灰色土(SD2680上層)
5　暗茶灰色土
6　灰色粘砂
7　灰色粘質土
8　茶灰色砂質土
　（黄色ブロック混）
9　茶灰色砂
10　黒灰色粘質土（腐植土混）
11　灰色砂
12　茶褐色砂質土
13　灰褐色土
14　灰褐色砂質土
15　茶褐色砂質土
16　暗灰褐色土(SD2705C)
17　茶灰色土(SD2705C)
18　暗灰色砂質土(SD2705C)
19　暗黄茶灰砂質土
20　暗灰色粘質土(SD2705B)
21　暗茶褐色粘質土
22　灰色砂
23　黒色粘質土
24　暗褐色土
25　灰白色粘砂

94 次南手部中央

1　暗灰色土
2　暗褐色土(S-21)
3　暗褐色土(S-21)
4　灰褐色土
5　灰色土(SD2705A)
6　淡茶褐色土(SD2705上層)
7　暗灰褐色土(SD2705C)
8　灰色砂質土(SD2705C)
9　暗灰色粘質土(SD2705C)
10　灰白色砂質土(SD2705C)
11　黄色粘質土
　（灰茶色土ブロック混）
12　淡黒灰色砂質土
13　暗茶灰色土
14　茶褐色土(SD2705上層)
15　灰色砂質土
16　黒灰色粘質土
17　暗灰色砂質土
18　暗茶褐色土(SD2680上層)
19　灰褐色粘質土
20　茶褐色粘質土
21　暗灰色粘質土
22　黄褐色粘質土
23　茶灰色土（粘土ブロック混）
24　茶色砂質土
25　灰色砂（細砂）

94 次南手部南壁

1　耕作土
2　床土
3　暗灰褐色土
4　黄灰褐色土
5　茶褐色土
6　明黄色土
7　暗褐色土
8　暗灰色砂
9　黒灰色粘質土
10　黒灰色砂質土
11　灰色粘質土
12　黄灰褐色土
13　淡茶灰色土
14　暗褐色土
15　暗褐色土
16　茶灰色土
17　灰褐色土
18　黄色粘質土
19　茶灰色粘質土
20　濃灰色粘土
21　黄茶色土
22　暗茶褐色土
23　灰褐色土
24　茶灰色粘質土
25　黄灰色土
26　灰色砂

Fig.53　境界溝 SD2680・2700・2705（94次）土層図（1/60）

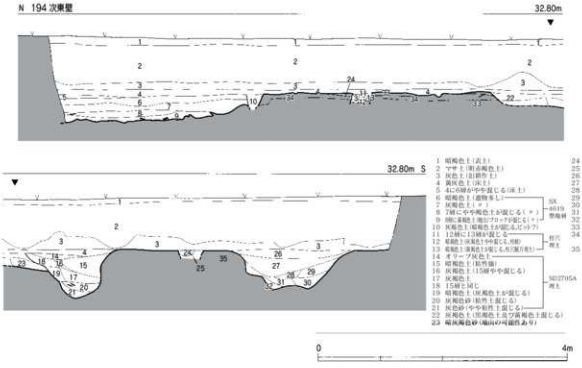


Fig.54　境界溝 SD2705（194次）土層図（1/60）

られる。そのため，本地区で検出した区画溝の前後関係はSD2680→SD2710→SD2705の順となる。ただし，SD2705やSD2710が南側で大きく南西に向きを変えるのに対して，本溝はSD2680と同じく直線的に南北方向に走る。そのためSD2680の付替えの可能性もある。溝肩部幅0.8～1.0m，底部幅0.4～0.5m，深さ0.2～0.4mである。詳細にみれば，W地区北端で溝肩部0.80m，底部0.40m，深さ0.25m，中央付近で肩部幅0.75m，底部幅0.30m，深さ0.24m，南端で肩部幅1.2～1.6m，底部幅0.6～1.3m，深さ0.27mである。T地区では，北端肩部幅0.82m，底部幅0.25m，深さ0.21m，中央付近で肩部幅1.00m，底部幅0.40m，深さ0.38m，南端付近溝肩部幅1.10m，底部幅0.70m，深さ0.33mである。

溝の堆積は，大きく上下２層に分かれる（Fig.53）。T地区北壁の土層観察では，上層茶褐色砂質土，下層暗灰色粘質土の２層に分かれる。南壁では茶褐色土下位で確認できる。上層黒灰色土，下層灰色粘質土である。

溝底の標高を北から追ってみると，W地区北端31.50m，中央付近で31.46m，南端で31.37m，T地区中央付近31.32m，南端付近31.22mとなる。北端と南端の比高差は0.28m程度で緩やかに傾斜していることが分かる。

SD2705（Fig.47・53・54，PL.37～40）

94次調査区，194次調査区で検出した。南北方向に走る溝である。SD2700の西側を並走する溝であり，心々で4.1m（13.7尺前後）の間隔だが，W地区では僅かに東に振れ，SD2700を切って再び西側へ流れを変える。南側T地区では南西に大きく向きを変えて溝幅が４mを超える箇所もあるが，これは溝の氾濫による流路の変更などが考えられる。W地区では34.5m，T地区で45m分をそれぞれ検出した。未調査地区の２mを含めると79.5mとなる。

溝の規模を詳細にみると，W地区北端では溝肩部幅1.4m，底部幅1.00m，深さ0.40m，

南端では肩部幅1.45m，底部幅1.05m，深さ0.38mである。T地区北端付近では，肩部幅1.60m，底部幅0.60m，深さ0.38m，より南側の中央北側付近では肩部幅2.20m，底部幅0.60m，深さ0.44mで，溝中位の東側に幅0.60m程度のテラスが取り付く。溝が蛇行をはじめる付近では，溝内で２条になる。溝幅3.80mの中に西側底部幅0.25m，深さ0.74m，東側底部幅1.4m，深さ0.60mとなる。さらに南端部では，溝上面の幅が3.5m程度あり，平面上三つの溝が並走する形状に近くなる。西の溝底幅0.30m，深さ0.76m，中央の溝底部幅0.20m，深さ0.72m，東の底部幅0.45m，深さ0.49mである。

T地区南壁の断面観察では，２条の溝として捉えられる（Fig.53）。まず東西の暗褐土が最終埋没層で細い２条の溝として確認できる。東側ではその下位に茶灰色土，灰褐色土が堆積する。特に灰褐色土は溝の最下層を切る。西側では暗茶褐色土，灰褐色土，黄茶色土が堆積する。またT地区北壁では，最上層に暗灰褐色土，中層に茶灰色土，下層に暗灰色砂質土が堆積している。溝底の標高を北から南へ追ってみると，W地区北端で31.24m，中央付近で31.25m，南端で31.21m，T地区北側で31.23m，中央付近で31.08m，さらに南端部で30.83mとなる。調査区の南北端で0.40m程度の比高差があり，北から南へ緩やかに流れている。

194次調査区では，この区画溝を東西方向と南西方向との二つに分かれる形で検出した（Fig.54）。断片的だが，東西方向の溝をSD2705A，南東隅を斜行する溝をSD2705Bとした。ただし，２本の溝は調査区内では切り合っておらず，前後関係は不明である。A溝は，幅0.6～0.7m，深さ0.6～0.7mで，約3.5m分を検出した。溝底の標高は，東端30.85m，西端30.79mで僅かだが東から西側へ傾斜している。この溝はSB4620・4625を切るが，SD4621とSX4619との前後関係については，埋土の状況からみてもはっきりしない。B溝は幅0.7～0.8m，深さ0.6～0.7mで，約２m分検出した。両溝の規模は，ほぼ同一である。溝底の標高は30.99mである。

２）区画溝

SD323（Fig.52・付図）

14次調査区西側で検出した南北溝である。境界溝SD320の西肩8.40mに位置して並走している。両溝間心々で約18mとなる。14次調査では，約38m分を調査した。溝幅は北側で1.5～1.6m，南側で0.8～1.7m，現状で深さ0.14m程度である。溝内で段差を持って部分的に深くなるところで北側0.34m，南側で0.27m程度ある。溝底の標高は北側で32.17m，南側で32.14mである。本溝は，政庁中軸線から西側216mの位置にあたるが，これは鏡山猛条坊案の右郭二坊と三坊を分ける坊路付近にあたる。

SD2011（Fig.55）

76次調査区西側で検出した，東西方向に走る溝である。本溝は，位置関係から88次調査SD2581と繋がる可能性がある。SD320と交差し，またSD2012と並走する。調査区西側で細くなり途切れるが，約31m分を調査した。SD320堆積層である腐植土層を除去後，SD2012と共に検出した。調査状況から，SD320開削後のある時期に設置され，SD320に流れ込む状況であったことが分る。また，一部流路によって分断されている。溝幅は1.0～1.7m，溝底幅1.0～1.5m，深さ0.25～0.43mである。溝底の標高は西端で30.85m，中央付近で

並走する溝

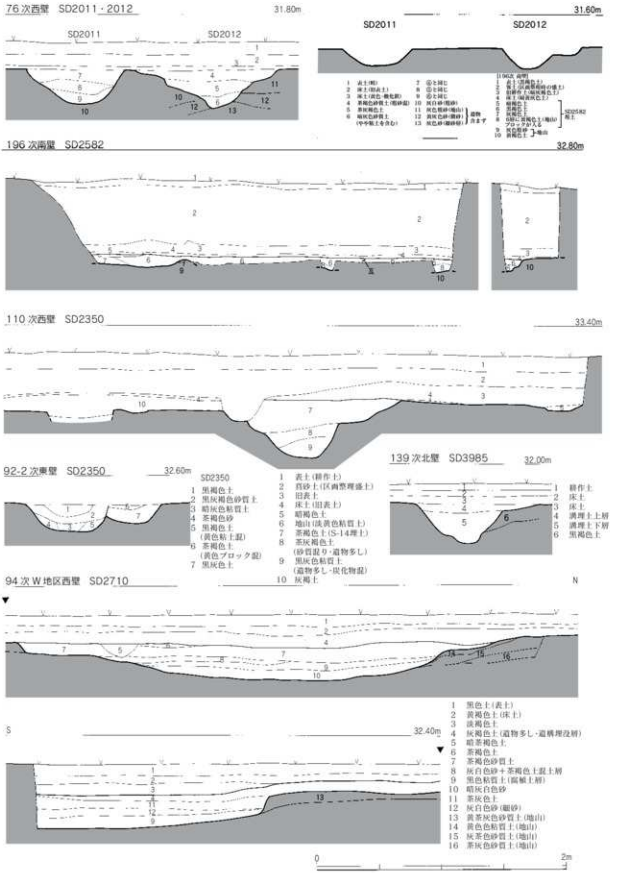


Fig.55　区画溝 SD2011・2012（76次）・2581・2582（88・196次）・2350（92-2・110次）・2710（94次）・3985（139次）土層図（1/60）

30.52m，SD320付近で29.90m，さらに東で29.83mとなり，東に向かって傾斜している。このように溝の西側が東側よりも一段高くなっていることから，上部を削平され，西側において溝が途切れる状況となっている。溝堆積層は，大きく上・中・下層に分かれ，上層は茶褐色砂質土（粗砂混）が，下層は滞水を示す暗灰色粘質土である。

SD2012（Fig.55）

76次調査区西側で検出した東西方向に走る溝で，南側のSD2011と並走する。本溝は，位置関係から88次調査SD2582に繋がるとみられる。約28m分を調査した。SD320堆積層である腐植土層を除去して検出した。溝は，検出状況からSD2011と同じくSD320に流れ込んでいたことが分る。溝幅は1.0 ～ 1.6m，溝底幅0.6 ～ 0.9m，深さ0.4 ～ 0.6mである。溝底の標高は，西端で30.50m，中央付近で30.29m，SD320付近で30.17m，さらに東で29.80mとなり，東に向かって傾斜している。堆積状況は，SD2011と同じく，大きく上・中・下層に分かれる。特に砂層を境に上下に区分される。なお，溝の北肩付近では石列を2.2m分検出した。護岸の可能性があり，礫の大きさは20 ～ 40㎝の幼児頭大の花崗岩で，一部瓦を敷いている。

SD2350A・B（Fig.34・55，PL.27・35・36）

不丁地区83次調査で確認した東西溝であり，境界溝SD320を挟んで西側に延びている。83次調査では総長約85mに亘っており，溝は人為的に埋め戻されたことを確認している。SD320より西側の大楠地区では，92･110次調査区で検出した。どちらの調査でも，A（古期）･B（新期）に分かれることを確認した。特に110次調査では，SD320との前後関係が注意されたが，SD320上層埋土を除去して検出できたことから，ある時期には同時併存したとみられる。92次調査区では32.4m，110次調査では19m分をそれぞれ検出した。

古・新期に分かれる

92次調査では，B溝が途中約7.2m（24尺）途切れる箇所がある。西側では，二つの溝の分離が不明確だが，溝幅2.00m，底幅1.60m，深さ0.29m，溝底の標高は31.77mである。A溝は部分的に途切れる状況から明確な排水機能を有していない。溝幅0.8 ～ 1.5m，下幅0.3 ～ 1.1m，深さ0.12 ～ 0.29m，溝底の標高は西側31.84m，東側32.07mである。溝の堆積は上下２層となり，下層に黒灰色土がある。B溝は，確認できる西側で長さ11.10m，間を開けた東側で10.2m＋αである。溝幅1.2 ～ 1.8m，底幅0.5 ～ 0.9m，深さ0.71 ～ 0.74m，溝底の標高は西側で31.43 ～ 31.50mである。溝の堆積は，大きく３層に分かれる。最上層が黒褐色土，中層が黒灰褐色砂質土，最下層が暗灰色粘質土である。

110次調査区でも，A・B溝が上下層に分かれて重複しながら並走していることを確認した。上層は茶褐色土，下層は黒灰色粘質土でどちらも遺物が多い。この地区では，A溝は幅1.2 ～ 2.0m，深さ0.43 ～ 0.56m，溝底の標高は，西端31.31m，東端30.91m，B溝は2.4 ～ 3.5m，深さ0.25 ～ 0.48m，溝底の標高は西端31.70m，東端31.54mである。

SD2571

88次調査区で検出した。東西方向の溝でSD2572と直列し，両者の間が１mほど途切れる箇所がある。約23.6mを調査した。溝幅（肩部）は0.50 ～ 0.90m，底幅0.30 ～ 0.45m，深さ0.06 ～ 0.10mとなる。SB2565に関連する溝であろう。

SD2572（PL.22）

88次調査区で検出した。東西方向の溝でSD2571と直列し，SD2573の手前で終わる。井戸SE2552に切られる。長さは11.4mで，溝幅（肩部）0.80 ～ 0.90m，底幅0.50 ～ 0.60m，深さ0.80 ～ 0.21m，溝底の標高西端から30.87m，30.84mで緩やかに西から東へ流れ，3分の1程度は深くなる。

SD2581（Fig.55，PL.22・36）

並走する溝

88次調査区で検出した。東西方向に走る溝で，南側にはSD2582が並走している。西側に向かって幅広となる。約10m分を調査した。溝幅1.0 ～ 1.2m，底幅0.2 ～ 0.6m，深さ0.20 ～ 0.33mである。溝底の標高は，西から30.82m，中央31.00m，東30.86mである。この溝の東側約25m先には，76次調査のSD2011があり，同一溝の可能性がある。

SD2582（Fig.48・55，PL.22・36）

88次調査区と196次調査区で検出した。88次調査区では東西方向に走る溝SD2581と並走し，約12m分を調査した。溝幅約0.8 ～ 1.0m，溝底幅0.30 ～ 0.40m，深さ0.27 ～ 0.33mで，溝底の標高は東から30.74m，30.89m，30.85mを測り，西側に向かって緩やかに傾斜している。196次調査においても西側の続きを検出しており，20mは延びることが分る。ただし，この調査では，溝北肩を検出したのみである。溝埋土は黒褐色土である。溝の北肩に接して柵SA2564が配されている。なお，溝の東側約25m先には，76次調査のSD2012があり，同一溝の可能性がある。

SD2710（Fig.55）

94次調査区W地区で検出した。南北方向から南西方向に走る溝で，SD2700の西側に接している。SD2700を切るが，SD2705に切られる。検出時の溝底は浅く，東西溝SD2745と接する付近で消える。長さ約23.5分mを調査した。溝幅は0.5 ～ 0.8mだが，流れを変える南側では2.0m程度の箇所もある。底幅は0.25 ～ 0.45m，深さ0.13 ～ 0.23m，溝底の標高は北端で31.48m，南端で31.56mを測る。

3）その他の区画溝

SD2569

88次調査区で検出した。東西方向の溝で区画溝SD2572と並走し，SD2568と直交する。SD2572との距離は0.6 ～ 0.8m，心々で1.3 ～ 1.5mである。長さ約7.9m，溝幅0.2 ～ 0.3m，深さ0.01 ～ 0.07m，座標北に対して4°程度東に振れる。

SD2573

88次調査区で検出した。南北方向に走る溝だが，SD2572の西端付近で一度屈折し，ちょうど直交する位置関係となる。また，SB2575を切る。座標北に対して約5°東偏する。長さ約6mの北側部分では，溝幅0.95m ～ 1.0m，底幅0.40 ～ 0.75m。深さ0.21 ～ 0.28mである。屈折箇所の長さは約2mで，それより南側では，長さ約14m，南端で溝幅0.9m程度，下幅0.6 ～ 0.7m，深さは南から0.14 ～ 0.34mで南へ向かって緩やかに深くなっている。なお，南端付近では0.15m程度の段差がある。

SD2576

88次調査区で検出した。南北方向に走る溝で南側では途切れるものの，SD2572とは直交する位置関係となる。長さ9.4mである。溝幅0.4 ～ 0.5m，深さ0.03 ～ 0.04m，溝底の標高は30.85m ～ 30.93m。同様の規模となる溝が東側にも一条ある。長さ約7m，幅0.3 ～ 0.5m，深さ0.04 ～ 0.05m，溝底の標高30.99mである。並行する溝としてみれば，SD2568・2574等がある。本調査区ではこのような小規模な溝を幾つか確認できるが，性格は不明である。

SD2578

L字に折れる

88次調査区で検出した。南北方向に走る溝だが，途中で南北方向から東西方向にL字に折れる。南北方向の長さ11.80m，東西方向の長さ3.80mである。区画溝SD2582に切られるが，南のSD2581とは交錯せずに接するような配置となる。溝幅は，南北方向で0.35 ～ 0.40m，東西方向で0.4 ～ 0.6m，深さは南北方向で0.05 ～ 0.14m，東西方向で0.12 ～ 0.19mである。屈折部付近にはSE2554がある。

SD2636（PL.35）

92次調査区で検出した。東西方向の溝でSD2350に並走する。長さ7.5m分を調査した。溝上幅0.8 ～ 0.9m，下幅0.3 ～ 0.5m，深さ0.17 ～ 0.58m，溝底標高は西から32.06m，31.66m，31.63mである。この溝は，SD2749を切る。

SD2752

92次調査区で検出した。東西方向の溝でSD2636に切られる。長さ6.2m，溝幅は0.5 ～ 0.6m，下幅0.2m程度，深さは0.06 ～ 0.21m，溝底の標高は西から32.09m，31.985m，32.135mである。SD2636と連続する溝の一部としてよいかもしれない。

SD3962（Fig.50）

138次調査区中央付近で検出した。東西方向に走る溝で，約9.4m分を調査した。途中，井戸SE3970に切られる。溝幅は0.6 ～ 0.8m，深さ0.10 ～ 0.19mである。溝底の標高は調査区東西端で30.63mである。この溝については，約26m東の88次調査区では確認できない。また，周辺地形を勘案すれば西側に流れると考えられる。なお，この溝に重複する形で新期の溝を確認しており，最終的な溝の痕跡示すものである。

SD3985（Fig.51・55）

139次調査区西端で検出した。南北方向に走る溝で，調査区外に伸びる。主軸方位は7°東へ振れる。約3.4m分を調査した。SD3979を切る。溝幅約1.20 ～ 1.40m，深さ0.36 ～ 0.40mだが，中央付近ではやや幅広になり，1.45×1.00mの方形状に拡がって溝底の形状が崩れる。溝底の標高は北端30.52m，南端30.51mで，ほぼ水平である。

SD4025（Fig.51）

146次調査区で検出した。調査区中央を南北方向に走る溝である。調査区外へ延びるが，約3m分を調査した。土坑状の落ち込みSK4020の上部埋土の黒色土や複数のピットに切られる。溝幅1.0 ～ 1.2m，深さ0.06 ～ 0.12m，溝底の標高は北端31.29m，南端31.27mである。この溝の埋土は上部黒褐色土，下部茶褐色土である。土層断面の観察でも立ち上がりが不明瞭であり，整地層の落ちを捉えた可能性もある。

4）その他の溝

SD319（Fig.48）

14次調査区西側で検出した。北東方向へ伸びるSA321に並走する溝である。途中途切れるが，長さ3.7m分を確認した。北側で長さ0.75m，南側で長さ2.7m，溝幅は0.2 ～ 0.35m，深さ0.05 ～ 0.06mである。溝底の標高は北側32.28m，南側で32.23mを測る。

SD2547（Fig.27）

88次調査区で検出した。南北方向に走る溝でSD2566に直交する形で切られる。長さ約5.4m，幅0.15 ～ 0.4m，深さ0.01 ～ 0.07m，座標北にほぼ平行する。西側にも同様の規模の溝が平行し，この溝は長さ2.4m，深さ2.5cmと浅い。

SD2566（Fig.27）

88次調査区で検出した。東西方向に走る溝でSD2567と並走する。また，溝状遺構SX2608に切られる。座標北に対して4゜西側に振れる。SD2567との距離は両溝の肩で2.6m，心々約3mである。溝幅約0.4m，底幅0.3m，深さ0.05 ～ 0.10m。溝底の標高は西端で30.81m，東端で30.95m。SD2567と併せて道路状遺構の痕跡の可能性もある。

SD2567（Fig.27）

88次調査区で検出した。東西方向に走る溝でSD2566に並走する。長さ約9.4m，溝肩幅0.3m，底幅0.25m，深さ0.03 ～ 0.06m，溝底標高は西端30.8m，東端30.91m。

SD2568

88次調査区で検出した。一部途切れるものの，南北方向に約12m確認した。直交するSD2572や，並走する２条の溝SD2566と2567に切られる。溝幅0.5 ～ 0.6m，深さ0.02 ～ 0.05m程度である。溝底の標高は北側で31.00m，南端で30.95m。約6゜東に振れる。

SD2574

88次調査区で検出した。SD2571付近で途切れる。長さ5.2m，溝幅0.4 ～ 0.2m，深さ0.05 ～ 0.08m，北端標高31.12m，南端31.15m，10゜ほど東に振れる。

SD2577

88次調査区で検出した。東西方向の溝でSK2602に直交する。長さ約3.5m分を調査した。溝幅0.35m，深さ0.04m程度である。溝底の標高は30.79mである。

SD2579

88次調査区北端で検出した。東西方向に走る溝で約５m分を調査した。溝幅0.25m，深さ0.02m程度で溝底の標高は31.18mである。

SD2618

88次調査区で検出した。南北方向に走る溝である。南側では途切れるが，長さは約4.8mある。溝幅は0.40m，深さも0.05m程度である。溝底標高は30.91 ～ 30.97mで，南側へ僅かに傾斜する。この溝と並行する溝がSD2576東側にある。長さ約3.7m，溝幅0.25m，深さ0.03mで溝底の標高は30.99mである。両溝の関係や性格については不明である。

SD2626

92次調査区で検出した。東西方向に走る溝状遺構だが，調査時には明確な溝と認識できていない。長さ約15mで溝幅0.6 ～ 1.2m，底幅0.5 ～ 1.0m，深さ0.08 ～ 0.15mである。溝底西

端の標高は31.50m，東端で31.43mとなる。

SD2627（Fig.42）

92次調査区で検出した。東西方向に蛇行する溝で長さは約36mほどある。溝幅0.3 ～ 0.5mだが，西側では幅0.40mと0.25mの２条の溝に分かれるものの，別々の溝かは不明である。溝底幅0.2 ～ 0.4m，深さ0.08 ～ 0.34mで，溝底の標高は西端31.60m，中央付近31.34m，東端で31.45mである。溝埋土は黒褐色土である。西側ではSD2680に接するが，この溝の上層埋土よりも切り合いは古い。また，多くの遺構に切られることから本地区では古期に属する。

SD2628

92次調査区で検出した。東西方向に蛇行する小溝である。長さ約4.3m，幅0.2 ～ 0.4m，深さ0.09 ～ 0.15m，溝底の標高31.73mである。

SD2629（Fig.40）

92次調査区の西端で検出した。北西方向に蛇行する小溝で長さは約9.3mある。現状で見る限り，SD2680方向に向かっているが，切り合い関係は不明である。溝幅0.30 ～ 0.45m，深さ0.16 ～ 0.18mで，溝底の標高は北端31.69m，南端31.97m。溝の埋土は黒褐色土である。

SD2631

92次調査区で検出した。現状で溝は「コ字形」に巡る。また，SD2629に切られる。溝は，南北の長さ4.20m，北側の長さ1.90m，南側の長さ2.00m。溝幅は南北方向が細く0.30 ～ 0.35m，東西方向ではそれぞれ0.50 ～ 0.60mである。深さは，北側で0.16 ～ 0.20m，南側で0.14 ～ 0.27m，東側で0.11 ～ 0.13mである。溝底の標高は北側が31.64m，南側が31.64m，東側が31.76mである。

SD2632（Fig.37，PL.35）

92次調査区で検出した。調査区中央を東西方向に走る溝である。SD2633を切る。総長は12.6mで，１箇所のみ0.4mの間隔で途切れる。そして，その西側で7.20m，東側で5.00mの長さとなる。溝幅0.25 ～ 0.4m，深さ0.10 ～ 0.15m。溝底の標高は西端で31.75m，東端で31.91mである。

SD2633（Fig.37）

92次調査区で検出した。南北方向の小溝で，長さ10.8mである。溝幅0.2 ～ 0.4m，深さ0.02 ～ 0.06m，溝底の標高は北端が31.95m，南端が31.87mで，南へ僅かに傾斜する。

SD2634（Fig.41）

92次調査区で検出した。東西方向に走る溝で，長さ10.8mで，途中0.2m程途切れる箇所がある。溝幅0.20 ～ 0.30m，深さ0.02 ～ 0.07mを測り，溝底の標高は西端が31.99m，東端が32.01mである。

SD2637

92-2次調査区で検出した南北方向の小溝である。長さ約4m，溝幅0.35 ～ 0.40m，深さ0.06 ～ 0.08m，溝底の標高は32.10m前後である。

SD2638（Fig.35）

92-2次調査区で検出した南北方向の溝である。SD2637等と並走する。溝の長さ4.45m，溝幅0.30 ～ 0.40m，下幅0.15 ～ 0.20m，深さ0.03 ～ 0.06m，溝底の標高は北端で

31.94m，南端で31.86mである。

SD2709

94次調査区南半で検出した。東西方向に走る溝で，SD2680とSD2700の間に位置する。長さ3.8m，溝肩部幅0.6 ～ 0.9m，底部幅0.3 ～ 0.5m，深さ0.14mを測り，溝底の標高は31.55m程度である。

SD2712

94次調査区北半で検出した。南北方向の溝で，SD2700の西側で並走するが切られる。溝の長さ約6m，肩部幅0.7 ～ 1.0m，底部幅0.5 ～ 0.85m，深さ0.05 ～ 0.13m，北端部溝底の標高31.48mである。明確な溝として南北に拡がりが追えないことから，SD2700など区画溝最上層堆積の蛇行した痕跡を捉えている可能性もある。

SD2716

94次調査区南半で検出した。南北方向に走る溝で，SD2705の西側で並走する。灰褐色土の下位から切り込んでおり時期的には新しい。長さ約8.7m分を調査した。溝肩部幅0.30 ～ 0.90m，底部幅0.25 ～ 0.60m，深さ0.04 ～ 0.09m，溝底の標高は31.45m前後である。

SD2717

94次調査区南半で検出した。南北方向に走る溝状の遺構で長さ10.50m，幅1.3 ～ 1.7mの規模である。溝西側肩は溝SD2700とSD2705に切られる。あるいは，これらの溝肩部の落ち込みを捉えている可能性もある。深さ0.10 ～ 0.16m程度，南端で標高31.55m。埋土は黒褐色土である。

SD2719

94次調査区南半で検出した。SD2705の最上部で，溝に沿って蛇行しながら走る。SD2705調査時や土層観察で部分的に確認できており，すくなくとも２条の溝が並走している。明確な遺構図を提示できるものではないが，SD2705の痕跡の一部であり，溝埋没を示すものとみてよいであろう。

SD2727

94次調査区南半で検出した。SD2680の最上部で，溝に沿って蛇行しながら走る黒灰色粘質土層である。明確な遺構図を提示できるものではないが，SD2680の痕跡の一部であり，溝埋没を示すものとみてよいであろう。

SD2736

94次調査区南半で検出した。東西方向に走る溝で，SD2680とSD2700の間に位置する。長さ3.0m，溝肩部幅0.45 ～ 0.6m，底部下幅0.20 ～ 0.35m，深さ0.10m程度，溝底標高31.62mである。

SD2737

94次調査T地区南半で検出した。南北方向に走る小溝で，SD2680の西側で並走する。溝南側は幅広になりプランも不明瞭になる。溝幅0.25 ～ 0.7m，深さ0.09 ～ 0.14m，溝底標高は北端で31.65m，南端で標高31.51mである。

SD2742

92次調査区で検出した。南北方向の小溝で，SD2632を切る。全長1.8mで南北にピットが

ある。溝部分で長さ1.0m，溝幅0.2m，深さ0.12mである。

SD2744

92-2次調査区で検出した。東西方向に走る不整形の溝状遺構で蛇行が著しい。溝の長さ20.4m，上幅0.7～2.0m，下幅1.7～0.6m，深さ0.08～0.16mを測る。溝底の標高は，西から32.01m，32.06m，32.13mである。本来の溝幅は1m程度であろうか。

SD2745

94次調査区北半で検出した。東西方向に走る溝状の落ちで，規模が大きく溝としてのプランを明確にできていないが，ここでは溝として報告する。長さ16.5m，溝幅上面で約7.0～7.2mである。西端の断割りでは，溝肩部幅7.4m，底部幅6.2m，深さ0.7mの規模を確認している。この溝底の標高は30.90mである。灰褐色土下位で他の遺構と同じくプランを確認した。溝の堆積は，大きく3層である。上層・茶褐色砂質土，その下位に灰色砂と茶褐色土の混土層，最下層に腐植土層の黒色粘土層や部分的に暗灰色砂層がある。

SD2748

94次調査区北半で検出した。南北方向に走る溝で，SD2705の西側で並走する。溝肩部幅0.30～0.45m，底部幅0.2～0.3m，深さ0.08～0.10mである。溝底の標高は北側南端で31.31mである。

SD2749

92-2次調査区で検出した。南北方向の小溝でSD2350に切られる。長さ5.30m，幅0.4～0.7m，深さ0.05～0.11m，溝底の標高は北端で32.16m，南端で32.12mである。

SD2754

92-2次調査区で検出した東西方向の溝である。長さ約7.2m，溝幅は0.7～1.5m，底幅0.5～0.8mと不整形だが，概ね1m前後の溝幅である，深さ0.04～0.19m，溝底の標高は西から32.04m，32.05m，32.03mである。

SD2755

92-2次調査区で検出した。南北方向に走る小溝で，SD2350に切られる。溝の長さ6.5m，幅0.4m，深さ0.06～0.13m，溝底の標高は31.85m前後である。

SD2756

92次調査区で検出した。東西方向に走る小溝である。長さ6.7m，幅0.2～0.3m，深さ0.03～0.10mである。溝底の標高は西から31.94m，31.96m，32.05mである。

SD2757

92-2次調査区で検出した南北方向の小溝である。SD2637に一部並走する。長さ4.1m，溝幅0.3m，深さ0.6～0.13m，溝底の標高は32.03～32.14mである。

SD2758

92-2次調査区で検出した。南北方向の溝である。溝の長さ3.3m，溝幅0.3～0.4m，下幅0.2～0.3m，深さ0.04～0.09m，溝底の標高は北端31.94m，31.92m，南端で31.98mとなる。

SD3057

104次調査区で検出した。SD320と交差して東西方向に走る溝である。約11m分を調査した。溝中央付近の土坑状の落ち込みを境にSD3058と分かれる。溝幅は0.85～1.70m，東端では

1.10m，深さは0.05 ～ 0.13m，東端部の標高は31.21mである。SD3058との関係は不明で，平面形状の違いから別遺構として報告した。西側では，長さ3.3m，幅0.4m，深さ0.1 ～ 0.2mであり，東側では多少乱れるが，0.85 ～ 1.7m，深さ0.05 ～ 0.15mである。溝底の標高は西端で31.44m，東端で31.21mとなり，東へ向かうにつれて多少深くなる。

SD3058

104次調査区で検出した。土坑状の落ち込みを境として，平面形状などからSD3057と分かれる。長さ3.5m，幅0.4m，深さ0.1 ～ 0.2m，溝底の標高は西端で31.44mである。

SD3226

110次調査区で検出した。東西方向の溝で，SD2350に並走するが，東では途切れている。約2m分調査した。溝幅0.4 ～ 0.5m，深さ0.02 ～ 0.11mで西側に向かうにつれて僅かに傾斜している。溝底の標高は31.95mである。

SD3963

138次調査区で検出した。北東から南西方向に走る溝である。約10.5m分を調査した。溝幅は，0.80 ～ 1.20m，深さ0.14 ～ 0.26mである。溝底の標高は北で30.54m，南で30.38mとなり，僅かに南側へ傾斜している。東の88次・196次調査区で確認できないことから，SD3962と同じく周辺で完結する溝と考えられる。

SD3979

139次調査区で検出した。東西方向に走る溝である。西側はSD3985手前で削平されて途切れ，東側はSD3980に切られる。約4.2mを調査した。溝幅0.30 ～ 0.60m，深さ0.07 ～ 0.20mである。溝底の標高は西端30.90m，東端30.94mである。

SD3980（Fig.51）

139次調査区で検出した。調査区を南北方向に走るが，方位に沿った状況ではない。主軸方位は30゜東へ振れる。調査区外へ延びており，約3.5m分を調査した。土坑SK3976を切る。溝幅は1.3 ～ 1.4m，深さ0.27 ～ 0.35m，溝底の標高は30.70m程度で，一定の深さである。

SD4022

146次調査区で検出した。南北方向に走る小溝である。溝南側をSK4026に切られる。長さ約1.8m分を調査した。溝幅0.35 ～ 0.55mで，一部２条の溝が並走するような形状となる。深さ0.08m程度で，溝底の標高は北端31.23m，南端31.19mで南側へ僅かに傾斜している。

SD4091

152次調査区で検出した。東西方向に走る小溝である。確認した溝の長さは2.2m，幅0.1 ～ 0.2m，深さ0.02mである。溝底の標高は30.51mを測る。

SD4621

194次調査区で検出した。南西方向に走る溝でSD2705Aに切られる。SD2705Bとも平行している。溝幅0.20m，深さ0.05mである。溝底の標高は31.35m程度である。

SD4626

194次調査区で検出した。東西に長い長楕円形の溝だが，中央が不整形に拡がっている。長さ2.05m，幅0.2 ～ 0.3mだが，一部幅0.8mと不整形に拡がる箇所もある。深さ0.03 ～ 0.07mである。

SD4633

194次調査区で検出した。東西に長い長楕円形の溝である。長さ1.48m，幅0.2m，深さ0.04～0.05mである。同規模の溝としてSD4626・4634があり，南北に並行することから整地地形等の痕跡の可能性が考えられる。

SD4634

194次調査区で検出した。東西に長い長楕円形の溝である。長さ1.45m，幅0.35m，深さ0.03～0.05mである。

SD4645

196次調査区Ａトレンチで検出した。南北方向の溝の一部で，SD2582に切られる。溝幅1.00m，深さ0.10mで埋土は黒褐色土で，SD2582と類似している。

SD4653（PL.40）

92-3次調査区で検出した。北西から南東方向に伸びる小溝である。溝堆積土は暗褐色土であった。溝幅0.3～0.4m，深さ0.20～0.35mである。

SD4655（PL.40）

92-3次調査区で検出した。近接する92次調査区際で確認した南北方向に走る溝である。溝幅は2.20～2.60m，底幅0.5mで，溝内の中位には段がある。溝底の標高は31.10mである。溝堆積土は上層暗茶色粘質土，下層は暗灰色粘質土である。本地区の基層となる暗褐色土整地層下位に位置づけられることから時期的にも古い。

SD4656

92-3次調査区で検出した。南北方向に走るとみられる溝である。土層観察では，黄褐色粘質土に切り込む。幅0.60～0.70m，底幅0.50m，深さ0.05mで溝堆積土は暗褐色土であった。ただし，この溝から西側にも暗褐色土が堆積しており，整地層の落ちを捉えている可能性もある。溝底標高31.70m。

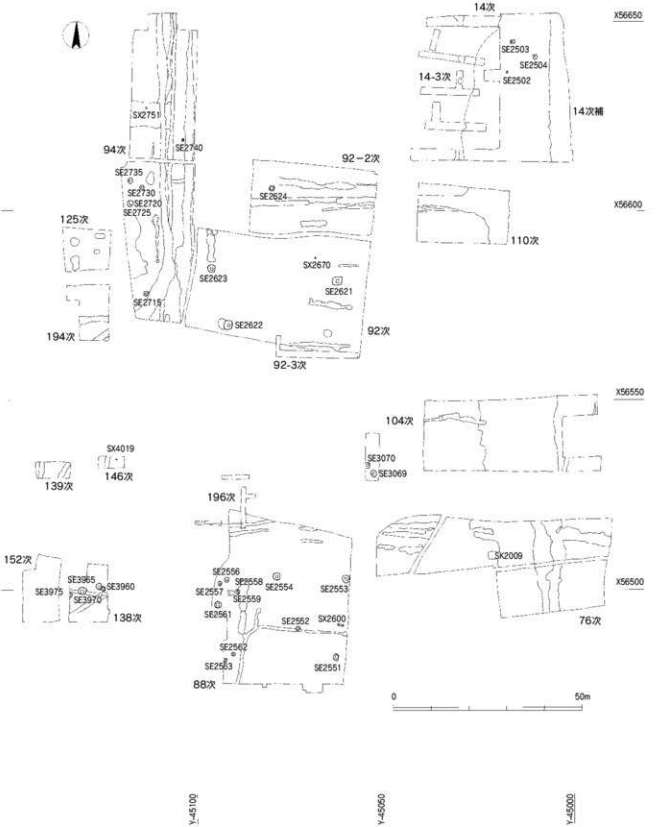


Fig.56　大浦地区井戸・木棺墓・地鎮遺構・炉跡配置図（1/1,000）

（4）井戸

大楠地区では88・92・94・104・138次調査区において27基の井戸を確認した。

SE2551（Fig.57，PL.41）

88次調査区の南東部，SB2555の東で検出した。遺構検出面では長軸2.6m，短軸1.7mの楕円形の掘方を認めたが，下部では方形をなしており，本来は一辺1.7mほどの隅丸長方形掘方とみられる。底面までの深さは1.03mを測る。井戸側は方形縦板であるが，残りは良くない。底面に隅柱として径10cm～15cmの丸太材を打ち込み，内法長95cmで，方形に縦板を二重に配している。縦板を支える横桟と両側の隅柱２本は遺存していなかった。縦板の残存高は約30cmである。井戸底面の標高は30.05mである。

SE2552（Fig.57，PL.41）

88次調査区の中央やや南寄り，SB2565の南側に位置し，SD2572に切られる。また，図示していないがSB2555の廂の柱掘方と重複している。井戸の掘方は径1.1mの円形で，深さは0.7mを測る。井戸側はわずかに破片を残す程度であったが，掘方の下面は径約75cmの円筒状をなし，その壁面に貼り付くようにして縦板がみられ，その内側に接するように曲物が置かれていた。したがって，井戸側に径70cmくらいの曲物を置き，その外側に補強材として縦板を置く構造に復原できる。底面には50cm前後の礫を厚く敷き詰め，その上に炭の堆積が認められた。底面の礫敷きは大楠地区では唯一みられるものである。井戸底面の標高は30.25mである。

底面に礫敷

SE2553（Fig.57，PL.42）

88次調査区の東端で検出した井戸で，SB2550を切っている。掘方は径2.0mの丸味を帯びた方形を呈する。井戸側は深さ0.65mで確認した。横板を使用した方形井戸側で，内法長55～60cmを測る。横板の端部に合欠きをつくり，組み合わせる嵌板のものであった。遺構検出面から1.6mほど掘り下げたが，底面には到達しなかった。

SE2554（Fig.57，PL.42）

88次調査区の中央やや北寄りに位置し，SB2565の北西で検出した。掘方は長軸2.0m，短軸1.9mの隅丸方形を呈する。井戸側は方形縦板で主軸を南北に組み，底部に曲物を置いている。まず基部に一辺７cmほどの角材で横桟を組む。南北方向の角材の両端に枘をつくり，東西方向の角材の両端の枘穴と組み合わせている。内法長は南北79cm×東西71cmを測り，南北にやや長い。その20cm上にもう一組の横桟がみられる。まず板材で横桟を組み，その上に角材の横桟を重ねている。各辺ともに幅広の縦板を３枚使用している。側板は土圧によって著しく歪んでいる。底に径40cm，深さ12cmの大きさの曲物を置く。掘方上面からの深さは1.36mである。井戸底面の標高は29.67mである。

文字瓦の出土　SE2554からは多量の瓦が出土し，文字瓦には「平井瓦」・「平井」・「佐」・「賀茂瓦」など多様な種類が認められる。

SE2556（Fig.58，PL.43）

88次調査区の西辺の中央付近には井戸５基が集中している。SE2556はそのうち最も北に位置する。一辺1.35mの隅丸方形の掘方に，方形井戸側が組み込まれているが，残存状態は良くない。四隅に径10cmほどの丸太材を隅柱として打ち込み，そのうち３本が残っている。心々で東西75cm，南北56cmを測る。横桟は既に失われている。東辺を除いて縦板は内側に倒れ込ん

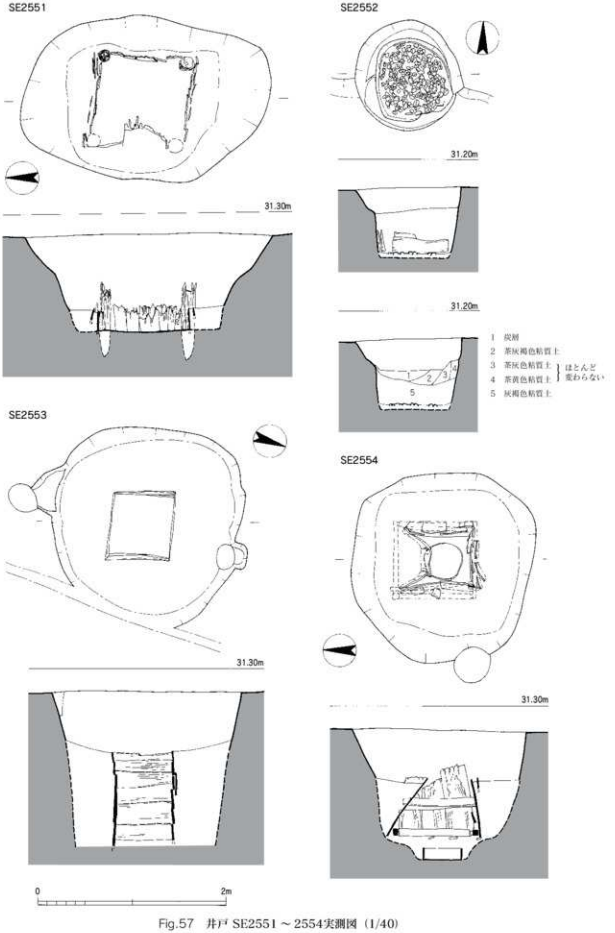


Fig.57　井戸 SE2551 ～ 2554実測図（1/40）

でいるが，東西約70㎝×南北約65㎝の内法長に復原される。底面には径37㎝の曲物が置かれていて，掘方上面から底面まで0.7mの深さを測る。掘方の周囲に柱穴状の掘り込みが幾つかみられるが，覆い屋を架していた可能性も挙げられるが，掘削深度や配置が不規則であることから，一つの可能性として提示するに留めたい。井戸底面の標高は30.12mである。

SE2557（Fig.58，PL.43）

88次調査区の西端に位置し，SE2556の西南にあたる。掘方は径1.15mほどの円形を呈する。井戸側は四隅に径４㎝の丸太材を隅柱として打ち込み，横板をわたして組んでいる。内法長50㎝，板材の深さ25㎝を測る。井戸側上面の周囲には瓦を敷き詰めていた。底面には径20㎝ほどの曲物容器が置かれていた。井戸底面の標高は30.15mである。

SE2558（Fig.58，PL.43）

88次調査区の西側，SE2556の東南に位置する井戸で，SE2559を切っている。井戸側の上部は不明であるが，下部に曲物２段を据えている。上段は内径52㎝，深さ40㎝，下段は内径44㎝，深さ31㎝を測る。掘方上面から底面までの深さは1.4mである。井戸底面の標高は29.38mである。

SE2559（Fig.58）

88次調査区の西側に位置する。SE2558に切られており残存状態は極めて悪かった。掘方は隅丸方形を呈し，上端の軸長1.25m，下端で0.85mを測る。井戸側は径４㎝ほどの丸太材を打ち込んだ隅木３本と横桟３本，および縦板材１枚が残り，方形縦板の井戸側であることを示していた。隅木・横桟の間隔からして，内法長は約60㎝に復原される。底面には長径65㎝×短径55㎝ほどに復原される曲物が置かれていたが，小片をとどめるに過ぎなかった。

SE2561（Fig.58，PL.44）

88次調査区の西端で，SE2558・2559の西南に位置する。掘方は長軸1.85m，短軸1.7mの不整円形である。井戸側は方形縦板で組まれているが土圧によって大きく歪んでいた。四隅に４～７㎝大の角材を打ち込んで隅柱とし，その間に横桟を３段に組み，幅７㎝前後，残存長約145㎝の縦板を並べていた。底面で内法長94㎝を測る。なお，88次調査区の西半では厚さ20～30㎝の黒褐色土が遺構面を覆うと報告されているが，SE2561は黒褐色土の面で井戸枠内に相当する範囲のみ方形に砂が堆積しており，黒褐色土上面から切り込む遺構である可能性が高い。井戸底面の標高は28.82mである。

SE2562（Fig.58，PL.44）

88次調査区の西南隅近く，SB2575の南で検出した。掘方は上面で長径1.21m，短径1.06mのほぼ円形を呈し，1.47mの深さを測る。井戸側は存在しなかったが，底面が径42㎝の円形をなし，下底から10㎝ほど壁面が直立することなどからみて，曲物が据えられていたものと思われる。井戸底面の標高は29.34mである。

SE2563（Fig.58，PL.44）

88次調査区の西南端，SE2562の西南に位置する。長径1.05mほどの角張った不整円形の掘方で，中央に井戸側の一部が遺存していた。方形縦板側は最下段の横桟のみを完全に残すが，縦板は抜き取られたためかほとんど残っていない。横桟の内法長は45㎝を測る。底には内径41㎝，深さ20㎝の曲物が据えられていた。井戸底面の標高は29.61mである。

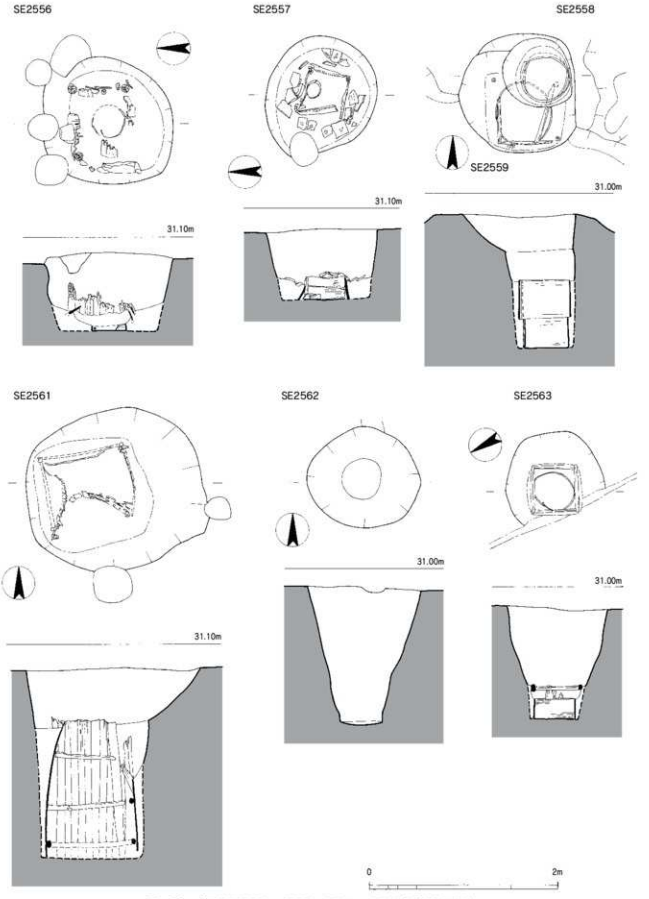


Fig.58　井戸 SE2556 ～ 2559・2561 ～ 2563実測図（1/40）

SE2621（Fig.59，PL.45）

92次調査区の東側，SB2625の北に位置する。約2.4mの隅丸方形の掘方（残存する深さ約1.1m）を有し，最下部に１辺約1.2mの井籠組の木製台を置く。木製台の四隅に径９㎝程の枘穴を穿ち，それに円形の出枘を造り出した方形の隅柱を立て，外側に縦板の側板を配している。横桟も角材を用い，両端の出枘と隅柱の枘穴とを組み合わせている。井戸底面の標高は30.90mである。

SE2622（Fig.59，PL.45）

92次調査区の西南部に位置し，SK2649を切る。隅丸方形の掘方（１辺2.3m，深さ1.4m）のほぼ中央部に内法77㎝を測る正方形の井戸側を配している。隅柱を用いることなく，横桟（6㎝×10㎝）だけで側板を支えている。掘方の上部で検出した石群は，井戸側の裏込めとみられる。井戸底面の標高は30.17mである。なお，堆積土中からは土器類のほか木製の櫛が４点出土し，紡軸の一部が遺存している紡錘車も出土した。

SE2623（Fig.56・59・付図，PL.46）

92次調査区西側に位置し，土坑群SK2652の埋土上から掘り込まれている。概報では誤植により「SE2123」と報告されていたが，「SE2623」が正しい遺構名称である。下位の３面には板材を3枚積み，南側は石組みの上端に狭い板材を渡している。この下位の高さは約52㎝である。上位は漏斗状に瓦を積み上げている。裏込めには大きな石（約45㎝）から拳大の石までを用いている。同様の瓦積みの井戸としては，65次調査（蔵司前面域）でも確認されている。井戸底面の標高は30.62mである。

瓦積みの井戸

瓦積みに使用された瓦は，格子目瓦が多いようであるが，一部に縄目瓦もみられ，使用されなくなった瓦や廃棄された瓦などが再利用されたことが窺える。

SE2624（Fig.59，PL.46）

92－2次調査区北側に位置する。１辺1.4m～1.5mのほぼ隅丸方形の平面形を有する掘方で，内法約95㎝の井戸側を配している。２段分（1.8m）まで調査したが崩落し始めたため，これ以下の調査は断念した。隅柱は直径約10㎝で比較的大きいが，上から３番目までの横桟は細い。４番目の横桟（南・北）はしっかりした角材（8㎝×13㎝）を用いている。横桟は隅柱に穿たれた穴に差し込んで固定している。崩落もあって図化した深さは標高30.10m付近までであるが，周囲の井戸の底面の深さを勘案すると，この深さで湧水面に達している可能性がある。

SE2715（Fig.60，PL.47）

94次調査区の南端に位置し，SD2705によって掘方の一部を切られる。掘方は遺構検出面で長軸1.36m，短軸1.2mを測る隅丸長方形を呈する。井戸側は方形縦板で，板材の残りは良かったが，発掘の途中に崩壊したため下部については不明である。側は四隅に打ち込んだ径４～６㎝ほどの丸太材を用いた隅柱，一部残存していないが上下２段の横桟，内法長50～55㎝の縦板（東辺５枚，他の３辺３枚）で構成される。確認した側は１段分の深さが70㎝であるが，さらに深くなる。井戸底面の標高は30.32mである。掘方の内部からは多量の土師器・青磁・瓦・石などが投げ込まれたような状態で出土した。瓦には井戸側の外に沿って立ち並ぶものもあったが，これらの投棄は井戸側の内部にも及ぶため裏込めなど意図的なものではないだろう。

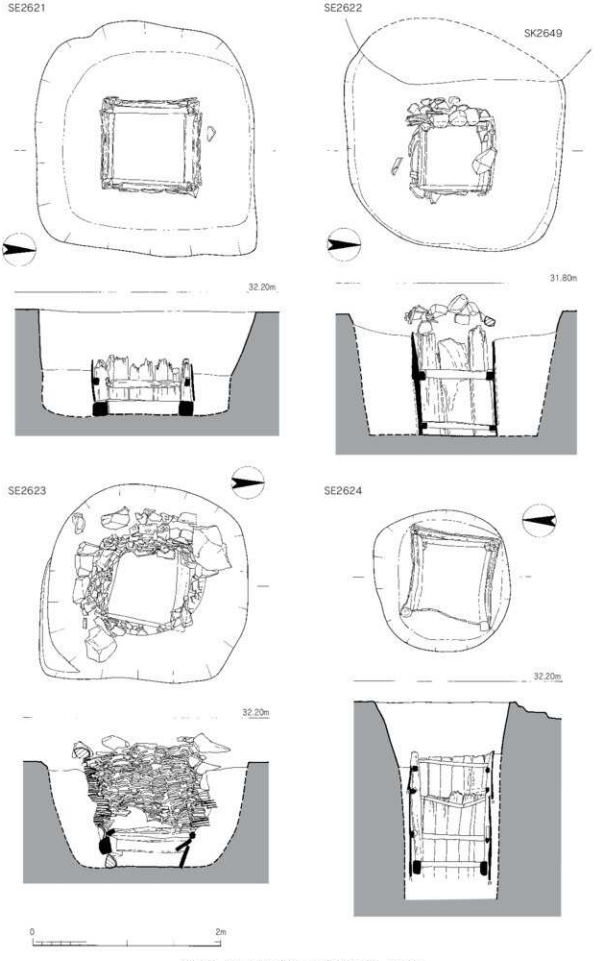


Fig.59　井戸 SE2621 ～ 2624実測図（1/40）

SE2720（Fig.60，PL.47）

94次調査区の中央西寄りに位置し，SE2715の北約24mに位置する。掘方は上面でSE2725と分離できたが，両者を合わせて径約1.8mの円形を呈していた。SE2725を切る。約0.8mの深さで本来の形状が認められ，径1.0 ～ 1.1mの円形をなす。深さは2.28mを測る。底部が0.6 ～ 0.8mの不整円形であることから，円形の井戸側が据えられていたと推定できるが，全く遺存していなかった。井戸底面の標高は28.20mで，SE2725よりも20㎝深い。SE2725も同じ井戸側と推定されることや，SE2725よりも一段深くまで掘削されていることから，同じ構造でより深い井戸への掘り直しが行われたと考えられる。

漆塗の木製蓋が出土

なお，埋土中から撥みを有する漆塗りの木製蓋が出土している点が注目される。保存状況がかなり良好であることからすると，井戸側は廃絶に伴って人為的に抜き取られたのではないかと推察される。

SE2725（Fig.60，PL.47）

94次調査区の中央西寄り付近に位置し，SE2720に切られる。掘方は径約１m，深さ2.08mに復原できる。側は遺存していなかったが，掘方の底面が不整形ながら径0.7mほどの円形を呈することから，円形の井戸側が据えられていたと推定できる。井戸底面の標高は28.40mである。

SE2730（Fig.60，PL.48）

94次調査区の中央付近に位置し，SE2720の北東約５mに位置する。掘方は上面で径1.07 ～ 1.10mの不整円形を呈する。掘方上面から約0.7m掘り下げた段階で，方形縦板で組まれた井戸側を検出した。四隅に隅柱が立てられているが，東南のみが角柱で，他の３本は自然木を利用していた。隅木には枘穴が設けられ，先端を尖らせた横桟を差し込み，固定している。横桟は東西には角材，南北には自然木を用いている。横桟の内法長は東西39・41㎝，南北42・46㎝を測る。縦板は残存長約40㎝を測り，掘方上面から底面までの深さは1.10mで，掘削が及んだ標高は30.3mまでである。

SE2735（Fig.60，PL.48）

94次調査区の中央西寄り付近に位置し，SE2730の北西で検出した。井戸掘方は長軸1.36m，短軸1.18mのやや角張った長円形を呈するが，底面が0.8m前後の方形であることからみて，本来は一辺1.2mほどの隅丸方形をなすのであろう。底面の中央には上端で0.5 ～ 0.56mの丸底をなす円形の掘り込みがみられる。そうした状況から方形縦板と曲物からなる井戸側が据えられていたと推定されるが，わずかに木質を残すのみであった。井戸底面の標高は28.60mである。

SE2740（Fig.60，PL.48）

94次調査区の中央やや北寄りに位置し，前述の5基と異なり，SD2680とSD2700間に位置する。直径0.65mの円形の井戸掘方の中に，直径44 ～ 48㎝の円形の井戸側が据えられている。側は3 ～ 4㎝の厚さを残して内刳りされているが，一木をそのまま刳り抜いたのではない。現状では4枚の縦板状となっているが，隣り合う板材に厚さの違いがみられる点，適当に四分割した上でそれぞれを削り込んだものと思われる。掘方の上端から0.75m，残存する側の上端から64㎝まで掘り下げたが，側の残存状態の悪さと湧水の激しさのため，完掘に至らなかった。掘削が及んだ標高は30.77mまでであるが，他の井戸に比べると，随分浅いところで湧水している。

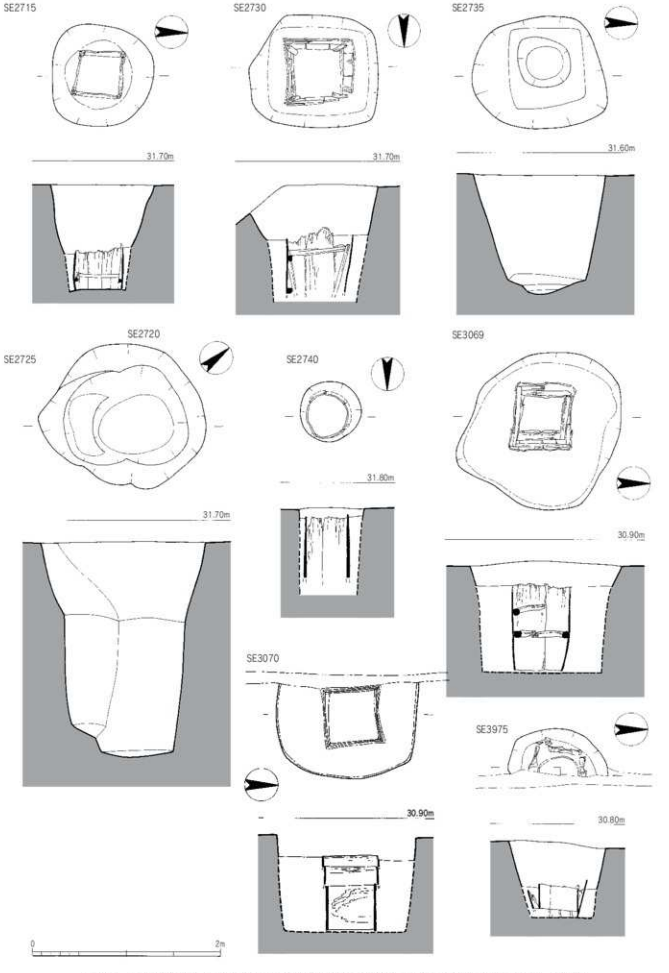


Fig.60　井戸 SE2715・2720・2725・2730・2735・2740・3069・3070・3975実測図（1/40）

SE3069（Fig.60）

104次調査区のうち，西側の補足調査箇所に位置する。掘方は遺構検出面では不整円形を呈するが，掘削の状況から一辺1.6m程度の隅丸方形であったと考えられる。この掘方のなかに東西0.7m，南北0.6mの方形縦板組の井戸側が遺存していた。掘方の上面から井戸側下端までは深さ1.2m，残存する井戸側の上面から下端までは深さ0.9mを測る。縦板は１段だけが遺存し，隅木はなく，横桟だけの構造である。井戸底面の標高は28.66mである。

SE3070（Fig.60）

104次調査区のうち，西側の補足調査箇所に位置し，西側は調査区外に及ぶ。西側の掘方は未掘部分もあるが，一辺1.5m程度の隅丸方形になると推定される。井戸側が３段遺存し，各段は一辺を一枚板で方形に組んでいる。井戸底面の標高は29.05mである。瓦が比較的多く出土したが，土器類は少ない。

SE3960（Fig.61，PL.49）

138次調査区の東壁際の中央部に位置する。掘方は円形気味の隅丸方形を呈し，規模は径1.30m，深さは0.95mを測る。井戸枠は方形横板構造で，北壁部にはその上部に配された縦板が部分的に残存している。板材の幅は約７㎝で，一辺７枚ほどの縦板が使われていたようである。下部の井戸枠は南・北の板材が東・西の部材によって挟み込まれるように組まれている。使用された板材は長さ56 ～ 58㎝，幅10㎝，厚さ1.9㎝を測る。井戸底面の標高は29.85mで

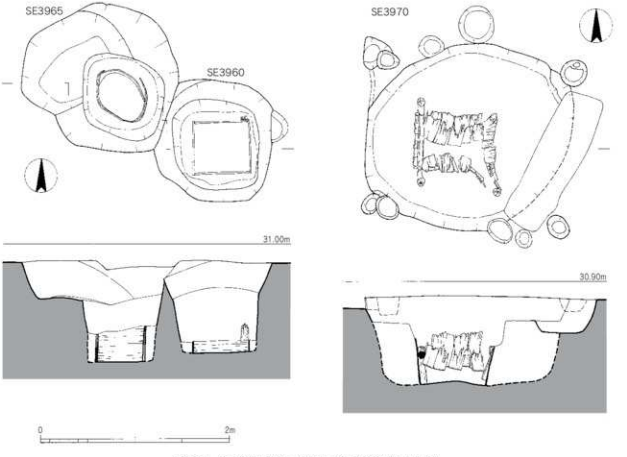


Fig.61　井戸 SE3960・3965・3970実測図（1/40）

ある。埋土中より須恵器・土師器が多く出土した。

SE3965（Fig.61，PL.49）

138次調査区の東側に位置し，SE3960を切る。掘方は円形に近い隅丸方形を呈し，北西部は２段掘りとなる。掘方の規模は径約1.6m，深さ1.0mを測る。井戸枠は最下段の曲物が残るのみである。曲物は径50㎝，高さ40㎝で，二重にまわしている。井戸底面の標高は29.75mである。埋土の上層には焼土を含む赤褐色土が堆積しており，ここから長沙窯青磁片が出土した。 **長沙窯青磁**

SE3970（Fig.61，PL.50）

138次調査区の中央部やや西寄りで検出した井戸で，SD3962を切る。掘方は2.00×2.35mの隅丸方形を呈するが，東壁は後世の土坑によって削平されている。深さは0.80mを測る。井戸枠は掘方のやや西南に偏って検出された。構造は四隅に径７～８㎝の丸太材を支柱として立て，それに枘穴を穿って両端を切り欠いた丸太材を横桟とし，支柱に組み合わせることによって縦板を支えたものである。縦板は原位置をとどめず上下２段分がずり落ちた状態で検出した。縦板材は幅15～20㎝，現存の厚さ0.5㎝前後で，一辺に５枚ずつ使用する。井戸底面の標高は29.80mである。

井戸の掘方の周囲には多数のピットがみられ，掘り込みの深さも近しいことから覆い屋に伴う柱穴になると考えられる。ピットの配置からすると４本柱構造になると推定されるが，重複するような掘り込みもあることから，建替えも行われた可能性がある。覆い屋に伴う雨落ち溝は，遺構面が削平を受けていることもあって検出していない。重複関係にあるSD3962も無関係でないかもしれないが，直接関連性を示すような状況は確認できなかった。 **覆い屋**

堆積土中からは，井戸廃棄時に投棄されたと考えられる多量の土器類とともに，膜状の漆も出土した。本来漆器が埋没していたのかもしれない。 **膜状の漆**

SE3975（Fig.60，PL.51）

138次調査区の西壁中央際で検出した井戸で，西半分は調査区外となる。掘方は隅丸方形を呈し，径1.0m，深さ0.7mを測る。井戸枠は一辺0.45mの方形縦板構造で残存する板材から考えると幅16㎝，厚さ１㎝の板材を５枚ずつ使用しているようである。井戸底には径0.4m，高さ0.25mの曲物を据える。曲物は地山面よりもわずかに浮いている。井戸底面の標高は29.80mである。

（5）木棺墓

SX2600（Fig.56・62，PL.21・51）

88次調査区の東側に位置する。墓壙は細長く，規模は上端で長さ1.80m，幅は中央で少し狭くなるが平均0.45m，深さ0.22mを測る。主軸はN95°30′Wにとる。墓壙内から鉄釘片が出土したことから，木棺墓とみられるが，棺材は遺存していなかった。

墓壙内の東端に遺物が集中しており，頭位を東にしたことが推測される。遺物は土師器皿・杯，鉄刀子，鉄鏃，鉛玉が出土した。鉛玉を除いていずれも墓壙の底面よりもかなり浮いた状態で出土し，棺蓋上に副葬されていた遺物の可能性が高い。本遺構と同様の掘り込みとして，同じ88次調査区の北東部に位置する土坑SK2548を挙げることができるが，遺物が少なく性格は不明である。

副葬遺物

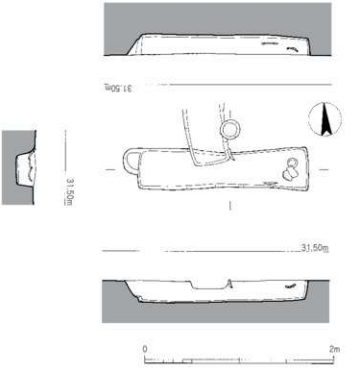


Fig.62　木棺墓 SX2600実測図（1/40）

（6）地鎮遺構

SX2670（Fig.56・63・付図，PL.25・52）

92次調査区東北部に位置し，SB2645の東面柱列南から３番目の柱穴の北西に近接し，

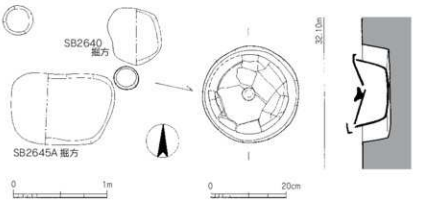


Fig.63　地鎮遺構 SX2670実測図（1/40，1/10）

SB2640の東梁側中央柱掘方の南側に近接する。掘方の平面形は円形を呈し，規模は径0.25m，深度0.08mである。

掘方の中に土師器無高台椀を据え，これに土師器蓋を被せている。蓋・身ともに丁寧なヘラミガキを施した良質な土器であり，殊に椀形の身はこれまでに見られない例であり，特別の役割のもとに作られた可能性がある。このような状況から，SX2670を地鎮遺構と判断した。ただし，SB2640やSB2645と関連するかどうかは不明である。

（7）炉　跡

SX2751（Fig.56・64・付図，PL.52）

94次調査区北半部の中ほどに位置し，南北溝SD2700・2705などと直交する東西方向の溝SD2745の埋土上面で検出した。規模は直径14cm，深さ5cmほどで，浅い擂鉢状を呈する。その周囲は径28～30cm，厚さ5cmほどが被熱によって赤変していた。鍛冶や鋳造に関わる炉の底部のみが遺存しているものと考えられるが，直接遺構の性格を示すような遺物の出土はなかった。なお，概報では付近に同じような炉跡が1基確認されたことが報告されているが，原図等に注記がないため遺構の特定は難しいが，日誌の略図に基づけばSX2751のすぐ西隣にあるピットの可能性がある。

SX4019（Fig.56・64・付図）

146次調査区のやや北寄りに位置し，遺構検出面に直径17cmほどの被熱による赤変部が遺存するのみで，ほとんど削平されてしまっていた。深さは1cm程度である。付近には多数のピットが存在するが，炉跡との関連は不明である。周囲からは坩堝・小銅塊等も出土しているので，付近に鋳造等に関わる遺構の存在が推測できる。

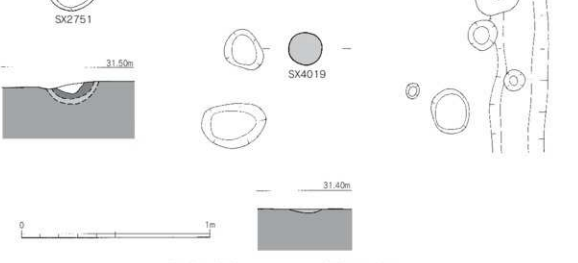


Fig.64　炉跡 SX2751・4019実測図（1/20）

第Ⅳ章　総　　括

（1）はじめに

本書は，大宰府政庁周辺官衙跡の大楠地区で検出された遺構・遺物を網羅的に掲載する正式報告書であるが，大楠地区は不丁地区に次いで遺構密度・遺物量が多量で，かつ建物の数的には不丁地区と同数であり，規模的にも何等遜色はない。また，従前から大楠・広丸両地区は，日吉・不丁地区とは性格が異なり，官人が居住した区域との見解が提示されており，官衙区域とした日吉・不丁地区との詳細な比較・検討を要する地区である。単年度で遺構・遺物を吟味し，詳細な検討を加えた正式報告書を刊行するには時間的・体制的にも無理が生じることから，大楠地区の報告に際しては遺構編・遺物編の二分冊とし，当年度で遺構編を刊行し，考察を含めた遺物編は次年度の刊行予定とした。なお，本章では，発掘調査によって得られた大楠地区における成果を主要な遺構ごとにまとめ，総括とする。

（2）大楠地区の範囲

発掘調査で判明した大楠地区の範囲は，東縁が14・76・104次調査区で検出し，延長約156mを確認した境界溝SD320によって不丁地区とは画される。また，94次調査区の東端部で検出し，延長約78mを確認した南北溝SD2680とSD320との心々距離が官衙域一区画の東西幅（単位幅90m）に近似する88.6mを測ることから，SD2680を西の境界溝とすることが可能である。さらに，SD2680から西に90m程行った29次調査Aトレンチで検出したL形の溝SD530を境界溝とすることが可能であれば，当該溝は政庁中軸線から丁度4区画目の西端に当たる。この様に考えると，大楠地区の東西は２区画分を占めることとなる。

境界溝SD2680

北縁は蔵司地区官衙と接するため，官衙南端の東西方向の築地SA1410が大楠地区との境をなす。南縁に関しては，朱雀門礎出土地点から東西方向に延長した線（区画施設の推定線）で，その距離は約220mを測ることから南北は大凡２区画半となる。

（3）検出遺構

大楠地区においては，建物64棟，柵27列，境界溝３条，区画溝19条，その他の溝53条，井戸27基，土坑，落込，鋳造遺構２基，地鎮遺構１基，木棺墓１基等を検出した。ここでは，建物，区画施設，井戸，その他の遺構として地鎮遺構，木棺墓を取り上げる。なお，今回の報告書では遺構の時期については特段ふれておらず，時期・前後関係に関しては遺物編において提示することとしたい。

1）建　物

大楠地区では64棟の掘立柱建物を確認した。その内訳は，四面廂建物１棟，二面廂建物5棟，片廂建物４棟，総柱建物10棟，側柱建物43棟で，側柱建物の中には梁行１間×桁行２間ないしは３間の小型建物が４棟含まれる。身舎の梁行が３間の大型建物は，SB2620（桁行５間）・2689（桁行６間）・3227（桁行不明）の３棟が存在する。なお，88次調査で確認した桁行８間（SB2550）及び10間（SB2555）の大規模な掘立柱建物は，柱掘方が小規模な円形を呈し，柱間も狭く，井戸を伴う点などからも官衙建物ではなく，官人居宅との見解が示されたが，遺跡内容に関わる重要事項であり，変遷を含め改めて検討する。なお，建物群の分布は，区画溝

官人居住域とする見解

SD2350・2582間に存在する一群とSD2582以南に存在する一群とに大別されるが，SD2350以北にも建物が展開するかは，未調査部分を残すため詳細は明らかではない。

2）区画施設

区画施設としては，溝・柵を検出している。中でも，SD320は東接する不丁官衙との境界溝をなすが，11世紀後半代には完全に埋没したとみられ，大宰府政庁の終焉と軌を一にする。94次調査区東端で検出した南北溝SD2680は，SD320との心々距離が88.6mと一区画の東西幅に近似する数値であることから，SD2680にも境界溝としての性格を付与することが可能である。また，SD2680の西側4.2mに位置する南北溝SD2700は，SD2680の後継をなすとみられる。さらに，その後継をなすのがSD2705と考えられるが，当該溝の南端は西側に大きく屈曲し，この周辺は通路の交差点的様相を呈する。

東西方向に走る溝には，北からSD2350A・2350B・2582・2581があり，SD2350AとSD2582の心々距離は約86mを測ることから，区域を南北に画す溝とみられる。また，比較的規模が大きく区画施設とみられる柵には，南北方向の柵にSA2684（7間以上）・2702（4間以上）・2703（4間以上）・2714（5間以上）があり，東西方向の柵にSA2564（5間以上）・2707（5間以上）があるものの，他の遺構との切り合いなどにより全容はつかめていないものが多い。

3）井　戸

井戸は調査区全体で27基確認した。年代的には9世紀中頃から10世紀初頭とみられ，建物に供伴する。しかし，政庁跡南面の官衙域における井戸の存在自体が，大楠地区を官人居住域とする根拠の一つとなっており，この点に関しても建物との関連性を含め再検討を行う。

官衙域における井戸の存在意義

4）その他の遺構

①地鎮遺構SX2670

92次調査区の北東に位置し，SB2645の南東隅柱から北に3番目の柱掘方に近接して検出した。丁寧なヘラミガキを施した土師器の蓋と椀がセットで出土しており，検出遺構の中でも最古期（8世紀前半頃）であり，大楠地区の土地利用の開始時期を示す。

②木棺墓SX2600

88次調査区の東端部で1基検出した。年代的には11世紀中頃であり，大楠地区における土地利用の変遷を考察する上で重要な意義を持つ。

なお，報告予定の特殊遺物には，服飾具（腰帯），文字関連資料（墨書・刻書土器，陶硯），生産関連資料（製塩土器・漆付着土器・擂鉢・鍛冶鋳造関連遺物等），木製品，金属製品，土製品，石製品等がある。ただ，両地区に跨がるSD320出土品は，不丁地区出土品として報告しているが，本来大楠地区に含めるべきものもある。しかし，生産に関わる遺物の絶対量は少なく，明らかに不丁地区官衙とは性格を異にする点は指摘できる。

（4）おわりに

今回，大宰府政庁周辺官衙跡Ⅶとして，大楠地区遺構編の報告を行ったが，従前の“官人居住域”とした当該地区の性格付けに関しては，大宰府の職制に関わる重要な問題を孕んでおり，建物群の時期・配列・変遷，他の遺構との関連，出土遺物等を詳細に検討するとともに日吉・不丁地区官衙との比較検討を経た上で改めて言及したい。

Tab.3　大柚地区遺構一覧（官衙跡Ⅶ掲載分）

遺構種別	遺構番号	次数	S番	概　　要	前後関係(古→新)	掲載
建　物	SB2018	76	－	1α×2α東西棟	SK2003と重複	再
	SB2550	88	2～21･23･241･305･306	4×8南北棟・二面廂	SB2550→SB2555･2565,SE2553	
	SB2555		41～46･209･217･222･228･232～234･242～248･250～255･257～259･263･268･285	4×10南北棟・二面廂	SB2560･2565･2595･2613と重複	
	SB2560		193･194･203･206･223･235･266･267･279･282･301･307～311	4×5東西棟・四面廂	SB2555･2610･2613他と重複	
	SB2565		27～40	3×5東西棟・片廂	SB2550･2555･2570と重複	
	SB2570		151･152	2×2南北棟	SB2565,SD2572と重複	
	SB2575		157･159･161～163･314	2×3α東西棟	SD2573と重複	新
	SB2580		－	1×4東西棟	SB2590,SD2578と重複	新
	SB2585		－	2×3α東西棟	SB2590･2615･2616と重複	
	SB2590		69	2×6α東西棟	SB2580･2585･2616と重複	新
	SB2595		256･277･280	2×3東西棟	SB2555･2610･2613他と重複	
	SB2610		190･219･273･274･278･288	4×5東西棟・二面廂	SB2555･2560･2595･2613他と重複	
	SB2613		204･219･226	2×4東西棟	SB2555･2560･2595･2610他と重複	新
	SB2615		88･90･116･126･127･132･133･140	2×5南北棟	SB2616･2617,SK2606と重複	新
	SB2616		65･73･78･86･94･103	3×4南北棟・片廂	SB2585･2615と重複	新
	SB2617		111･134･147	2×2総柱	SB2615,SE2556 ～ 2559と重複	新
	SB2620	92	194～196･201･202･207･209･214･280～288	3×5東西棟	SD2627→SB2620→SB2689→SB2668	
	SB2625A		189･273	2×4東西棟	SB2625A→SB2625B→SK2642	
	SB2625B		187･188･265～272･274	2×4東西棟	SB2625A→SB2625B→SK2642	新
	SB2630		289～283･295～297	2×2総柱	SB2672→SB2630	
	SB2635		168･175･298～304	2×2総柱	SB2635→SB2645A→SB2640→SB2645B	
	SB2640		78･154･156･158･161～163･320～329	2×5東西棟	SB2635→SB2645A→SB2640→SB2645B	
	SB2645A		172･307～309･312,2-68･70･71	2×5東西棟	SB2635→SB2645A→SB2640→SB2645B	
	SB2645B		159･169･173･176･305･306･311,2-57･124	3×5東西棟・片廂	SB2635→SB2645A→SB2640→SB2645B	
	SB2650		275～279,2-115～121	2×6α東西棟		
	SB2655		37～41･85～88,2-91	2×7南北棟	SB2675→SB2655→SB2683･2691･2697	
	SB2660	92-2	50･51･52･59･60･67･74･79･80･83･84･94～96	2×5東西棟	SB2360→SB2677,SA2707,SD2350	
	SB2665		108	3×3総柱	SB2688,SD2638･2672･2758と重複	新
	SB2668	92	199･203･227	1×3東西棟	SB2620→SB2689→SB2668	新
	SB2672		294	2×2総柱	SB2672→SB2630	新
	SB2673		－	1×2東西棟・薬区門？		新
	SB2674		243･246･256･259	2×4総柱	SB2655→SB2691→SB2674	新
	SB2675		89･90･92～95･315～317,2-(90)	3×4南北棟	SB2675→SB2655→SB2683･2691･2697	新
	SB2676		71･77･230･232	2×3南北棟	SB2694,SA2708と重複	新
	SB2677	92-2	16･18	2×4東西棟	SB2679・2685と重複	新
	SB2679		42･61	2×4東西棟	SB2677･2685,SX2672と重複	新
	SB2681	92	64	3×3南北棟	SB2635･2645A･2692･2693他と重複	新
	SB2682		148･257	2×4α東西棟	SD2627→SB268, SB2695と重複	新
	SB2683	92-2	5･10･50･54･59	2×2総柱	SB2675→SB2655→SB2683	新
	SB2685		22･23･32･36･39～41	2×3南北棟・総柱	SB2677･2679,SD2672と重複	新
	SB2687A		113	2×3南北棟	SB2645A･B→SB2687A→SB2687B	新
	SB2687B		－	2×3南北棟	SB2645A･B→SB2687A→SB2687B	新
	SB2688		88･109	1α×2α	SB2665,SD2638･2758と重複	新
	SB2689	92	197･198･333～337	3×6東西棟	SD2627→SB2620→SB2689→SB2668	新
	SB2691		79･105･112	1×2東西棟	SB2655→SB2691	新
	SB2692		－	2×2南北棟	SB2640･2675･2676･2681他と重複	新
	SB2693		2-102･108･113	2×5南北棟	SB2640･2675･2681･2692他と重複	新
	SB2694		219･224･225･237･239･247･248･253	2×5南北棟	SD2627→SB2694	新
	SB2695		118･127	2×5南北棟	SB2697→SB2674	新
	SB2696		20･46･48･57	3×2α南北棟	SB2675→SB2655→SB2696	新
	SB2697		13･22･33	3×7南北棟	SB2655･2675･2683→SB2697	新
	SB2728	94	南53～57･59	2×3α東西棟・総柱？	SD2680→SB2728	
	SB2739		南44･46	1α×1α		新
	SB3223	110	6･16	1α×3東西棟？	SB3225･3227 ～ 3229と重複	新
	SB3225		－	2α×5東西棟・二面廂	SB3223･3227 ～ 3229と重複	新
	SB3227		9･11	1α×5南北棟・二面廂	SB3223･3225･3228･3229と重複	新
	SB3228		8･23	2×3α南北棟	SB3223･3225･3727と重複	新
	SB3229		－	1×2東西棟	SB3223･3225･3227と重複	新
	SB3711	125	9	東西2間	SX3706と重複	新
	SB3968	138	5･9･11･13	1×2東西棟		新
	SB3978	139	11･18･20	南北棟？，梁行2間	SD3980と重複	
	SB4078	152	18･23･24･26	2×2α南北棟		新
	SB4620	194	18･58	2×2総柱	SB4620→SB4625→SD2705	
	SB4625		5･9･37･47･54	1α×3α南北棟	SB4620→SB4625→SD2705	

遺構種別	遺構番号	次数	S番	概　　要	前後関係(古→新)	掲載
横	SA321	14	321	2α，建物？		新
	SA2564	88・196	88-60・75～77, 196-4	東西横	SD2582→SA2564	
	SA2609	88	198・208・270・272	東西3間	SB2555,SD2568と重複	新
	SA2611		281	東西4間	SB2555・2595・2610と重複	新
	SA2612		211	東西4間	SB2560と重複	新
	SA2684	92	－	南北7間	SD2629,SE2623,SK2652と重複	新
	SA2686		－	東西2間		新
	SA2701	94	南9・11～13	南北3α間	SD2860と重複	新
	SA2702		南5～8	南北4α間	SD2705Aと重複	新
	SA2703		南23	南北4α間		新
	SA2704	92-2	－	南北3α間	SA2701と重複	新
	SA2707		－	東西5間	SB2660→SD2350A→SA2707	新
	SA2708		－	東西3間	SB2676と重複	新
	SA2709		－	東西5間		新
	SA2714		南26	南北5α間		新
	SA2721		－	南北3間		新
	SA2753	94	－	南北2間		新
	SA3969	138	42・45・63	南北方向，3間以上	SD3962・3963と重複	新
	SA3971		27・41・58	南北方向，3間以上	SD3962・3963と重複	新
	SA3972		28・38・57	南北方向，3間以上	SA3971,SD3962・63と重複	新
	SA3977	139	7	東西2間	SD3979・3985と重複	
	SA3981	139・146	139-5・9・15, 146-16・28	東西方向	SD3980,SK4026と重複	
	SA4021	146	3・8・13	東西方向，3間以上	SD4025と重複	
	SA4079	152	8・10	南北方向，3間以上	SX4092と重複	新
	SA4624	194	50・53・56・57	斜め方向	SB4620→SB4625→SA4624	
	SA4652	92-3	11	東西4α間		
	SA4654		6	東西2α間		
境界溝	SD2680	92・94	92-150, 94-南52・150, 北150	南北境界溝	SD2680→SB2728,SB2682と重複	
	SD2700	94	南15・33, 北1・33A	南北境界溝	SD2700→SD2705	
	SD2705A	94・194	94-南10C・21・22, 94-北10C, 194-3	南北区画溝，194次で屈曲	SB4625・SA4624→SD2705B	
	SD2705B	194	32	南北区画溝，194次で屈曲	SB4625・SA4624→SD2705B	
区画溝	SD323	14	323	南北溝，SD326と一連？		新
	SD326		326	南北溝，SD323と一連？	SD326→SK327	新
	SD2011	76	18・30	東西溝，SD320に接続	SD2011→SX2019	
	SD2012		19・35	東西溝，SD320に接続	SD2012→SX2019	
	SD2350A	92-2・110	92-2(2),110-14	東西区画溝，SD2350A→2350B	SB2660→SD2350→SA2707	
	SD2350B		92-2(2B),110-14下	東西区画溝	SB2660→SD2350	
	SD2571	88	229	東西区画溝	SB2555と重複	
	SD2572		160	東西区画溝	SB2555・2570と重複	
	SD2581		53	東西区画溝	SD2578に接続	
	SD2582	88・196	88-54,196-1・3	東西区画溝	SD2582→SA2564	
	SD2710	94	北33B	南北区画溝	SD2710→SD2705	
他の区画溝	SD2569	88	－	東西小溝	SD2568と重複	新
	SD2573		148	南北溝	SB2570と重複	
	SD2576		155	南北小溝	SB2575と重複	新
	SD2578		50	L字形小溝	SB2580・2590,SD2582と重複	
	SD2636	92-2	1	東西溝	SD2752→SD2636	新
	SD2752		65	東西溝	SD2752→SD2636	新
	SD3962	138	16・55(土器集中ヶ所)	東西溝	SD3962→SE3970	
	SD3985	139	3	南北溝	SA3977と重複	
	SD4025	146	31	南北溝	SA3981・4021と重複	
他の溝	SD319	14	319			新
	SD329		－			新
	SD2547	88	289	南北小溝	SB2555・2560・2610・2613と重複	新
	SD2566		188	東西溝	SB2560・2610・2613と重複	
	SD2567		200	東西小溝	SB2610と重複	
	SD2568		－	南北小溝	SB2610,SA260,SD2572と重複	新
	SD2574		－	南北小溝	SB2550と重複	新
	SD2577		－	東西小溝	SK2602と重複	新
	SD2579		－	東西小溝		
	SD2618		149	南北小溝		新
	SD2626	92	210	東西溝	SK2639と重複	新
	SD2627		145	東西溝	建物・土坑より古い	
	SD2628		－	東西小溝		新
	SD2629		110	南北小溝	SD2627→SD2629,SB2682と重複	新
	SD2631		111	コ字形小溝	SD2631→SD2629	新
	SD2632		99	東西小溝	SB2697と重複	新
	SD2633		－	南北小溝	SB2655・2674・2691と重複	新

遺構種別	遺構番号	次数	S番	概　　要	前後関係(古→新)	掲載
他の溝	SD2634	92	−	東西小溝	SB2655･2675と重複	新
	SD2637	92-2	−	南北小溝	SD2672に接続	新
	SD2638		−	南北小溝	SB2665･2688と重複	新
	SD2672		19･35	東西溝	SB2665･2677･2685･2697と重複	新
	SD2709	94	南62	東西小溝	SD2680･2710と重複	新
	SD2712		北13	南北溝	SD2712→SD2745	新
	SD2716		南31	南北の浅い溝		新
	SD2717		南1	南北溝	SD2717→SD2700→SD2705	新
	SD2719		南21･22	南北溝	SD2705上層	新
	SD2727		南52	SD2680上層		新
	SD2736		南65	東西小溝	SD2700と重複	新
	SD2737		南67	南北小溝		新
	SD2745		−	東西方向の溝状遺構	SD2710→SD2015→SD2745	新
	SD2748		−	南北小溝		新
	SD2749	92-2	37	南北小溝	SD2749→SD2350A･2752	新
	SD2754		75	土坑状の東西溝	SD2754→SD2350B,SB2660と重複	新
	SD2755		89	南北小溝	SD2755→SD2350	新
	SD2756		105	東西小溝	SB2675･2693･2697と重複	新
	SD2757		−	南北小溝	SD2672に接続	新
	SD2758		−	南北小溝	SB2665･2688と重複	新
	SD3057	104	8	東西小溝、SD3058に接続	SD320→SD3057	新
	SD3058		6	東西小溝、SD3057に接続	SK3066・SD3057と重複	新
	SD3226	110	20	東西小溝		新
	SD3963	138	17	北東-南西溝	SD3963→SD3962？	
	SD3979	139	2	東西小溝、SD3980と重複	SK3976→SD3979	
	SD3980		1	南北溝	SK3976→SD3980	
	SD4022	146	25	南北小溝		
	SD4091	152	4	東西小溝		新
	SD4621	194	−	東西小溝		
	SD4626		12	東西小溝		新
	SD4633		13	東西小溝		新
	SD4634		14	東西小溝		新
	SD4645	196	2	南北溝	SA2564と重複	
	SD4653	92-3	8	北西-南東溝		
	SD4655		13	南北溝		
	SD4656		12	南北溝		
井戸	SE2551	88	231	板組井戸	SK2586→SE2551	
	SE2552		210	曲物	SB2555→SE2552→SD2572	
	SE2553		1	板組井戸	SB2550→SE2553	
	SE2554		47	板組井戸		
	SE2556		110	板組井戸	SB2615･2617と重複	
	SE2557		115	板組井戸	SB2615･2617と重複	
	SE2558		119	曲物	SE2558→SE2559	
	SE2559		119	板組井戸	SE2558→SE2559	
	SE2561		120	板組井戸	SB2615と重複	
	SE2562		169	曲物		
	SE2563		167	板組井戸		
	SE2621	92	180	板組井戸		
	SE2622		160	板組井戸	SK2649→SE2622	
	SE2623		70	瓦組井戸	SK2652→SE2623	
	SE2624	92-2	85	板組井戸	SB2665と重複	
	SE2715	94	南40	板組井戸	SE2715→SD2705	
	SE2720		南35	素掘り井戸？	SE2725→SE2720	
	SE2725		南35	素掘り井戸？	SE2725→SE2720	
	SE2730		南34	板組井戸		
	SE2735		南25	板組井戸		
	SE2740		北14	板組井戸		
	SE3069	104補	井1	板組井戸		
	SE3070		井2	板組井戸		
	SE3960	138	3	板組井戸	SE3960→SE3965	
	SE3965		1･2	曲物	SE3960→SE3965	
	SE3970		35･61(井戸の覆屋)	板組井戸	SD3962→SE3970	
	SE3975		46	板組井戸		
窟	SX2600	88	230	木棺窟	SX2600→SK2601	
地鎮	SX2670	92	170		SB2640と重複	
炉跡	SX2751	94	−		SD2745→SX2751	
	SX4019	146	29			

建物は，梁×桁間数

Administrative structures surrounding Kyushu's government headquarters

In the *Dazaifu*(大宰府) complex Ⅶ

— the *Okusu*(大楠) area —

Contents

Chapter Ⅰ Preface

(1) A special historic site, the *Dazaifu* complex

(2) Excavation progress

(3) Excavation organisation

Chapter Ⅱ Excavation outline

(1) Excavation outline

(2) Fundamental stratification

Chapter Ⅲ Features discovered

(1) Post-built structures

(2) Palisades

(3) Ditches and gullies

(4) Wells

(5) Wooden coffin burial

(6) Features for repose of souls

(7) Fireplace remains

Chapter Ⅳ Summary

(1) Introduction

(2) The range of the *Okusu* area

(3) Features discovered

(4) Conclusion

Summary

This volume is the official excavation report of the *Okusu*（大楠） area where there were administrative structures surrounding Kyushu's government headquarters in the *Dazaifu*（大宰府） complex.

The excavation unveiled 64 post-built structures, 27 palisades, 3 boundary ditches, 4 compartment gullies, 27 wells, 1 wooden coffin burial, 1 features for repose of souls, 1 feature related to casting, and many earthen pits and hollows. The same number of post-built structures as the *Fucho*（不丁） area was found in the *Okusu* area, and there are many small post-holes and structures with a narrow space between two posts in the *Okusu* area, compared with those in the *Fucho* area. Because of this, it is regarded that the post-built structures found in the *Okusu* area are not government offices, but residences of public officials. However, they need to be re-examined with archaeological finds found from the structures.

Ditches and palisades found in the excavation can be regarded as facilities to divide the *Okusu* area. The north-south ditch SD320 is the boundary ditch with the *Fucho* area on the east side of the *Okusu* area. The western boundary ditches seems to be SD2350A and SD2700, and the distance between SD320 and these is about 89m. The east-west boundary ditches are SD2350A・2350B・2581・2582, and the distance between SD2350A and SD2582 is about 86m.

Many wells are dated from the middle of the10 th century A.D. till the beginning of 10 th century A.D. Although the wells suggest that public officials inhabited the *Okusu* area, there is also a need to be re-examined with archaeological finds found from the area in this regard.

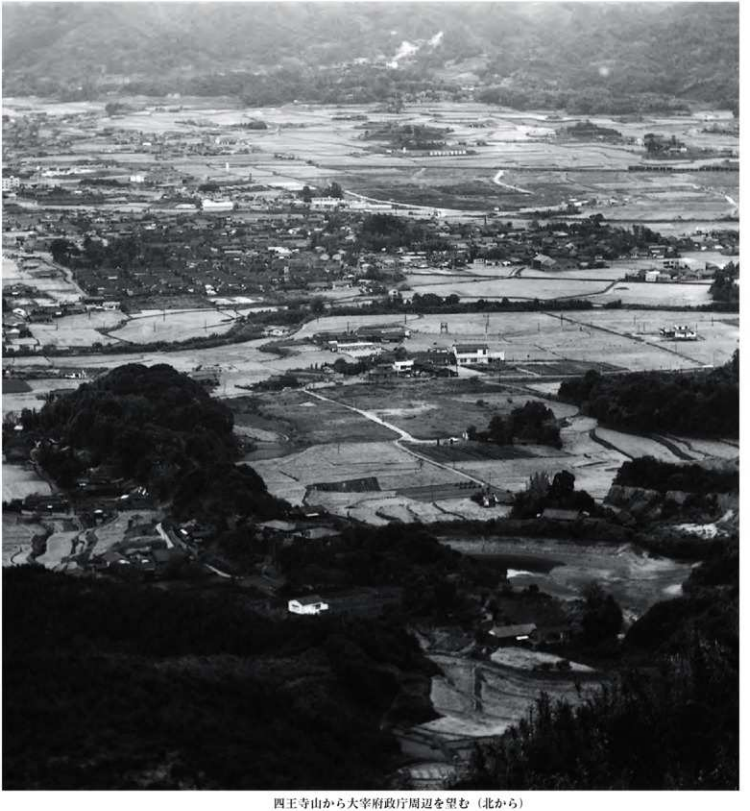
The feature for repose of souls SX2670 was found around the post-built structure SB2645. The ceramic vessels found from the feature are dated the first half of the 8 th century A.D. which can show the beginning period of land use in the *Okusu* area.

The wooden coffin burial SX2600 dated the middle of the 11 th century A.D. is also important for considering the land use in the area.

A variety of features were found in the excavation of the *Okusu* area, as presented above. There is a plan to conduct comprehensive examinations of these natures, including finds found from the area.

P L A T E S

大宰府政庁跡と大楠地区（上が北）



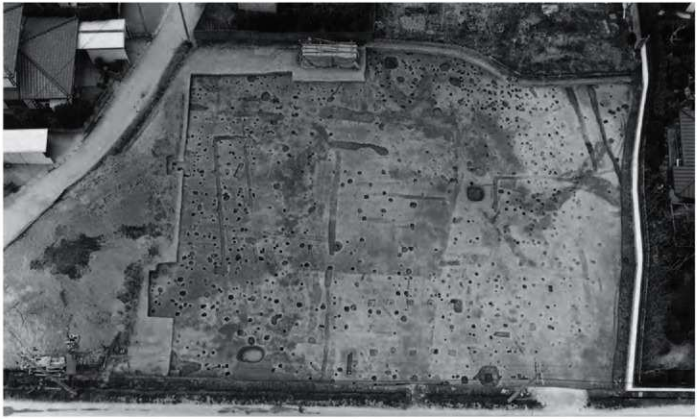
四王寺山から大宰府政庁周辺を望む（北から）

大宰府政庁跡と政庁周辺官衙跡遠景（北から）

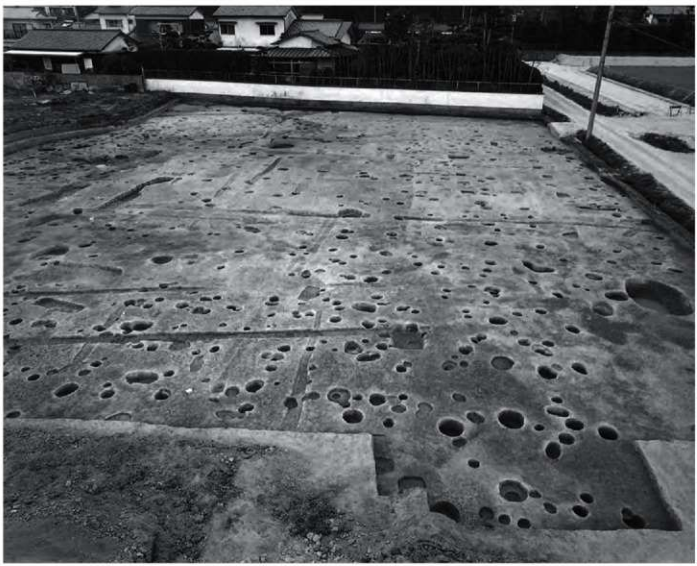
政庁周辺官衙跡遠景（西から）

大楠地区から四王寺山を望む（92次，南から）

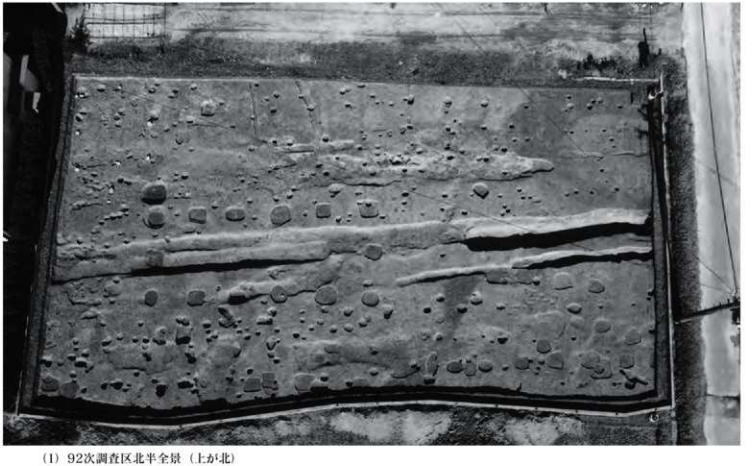
大楠・広丸地区から南を望む（北から）



(1) 88次調査区全景（右が北）

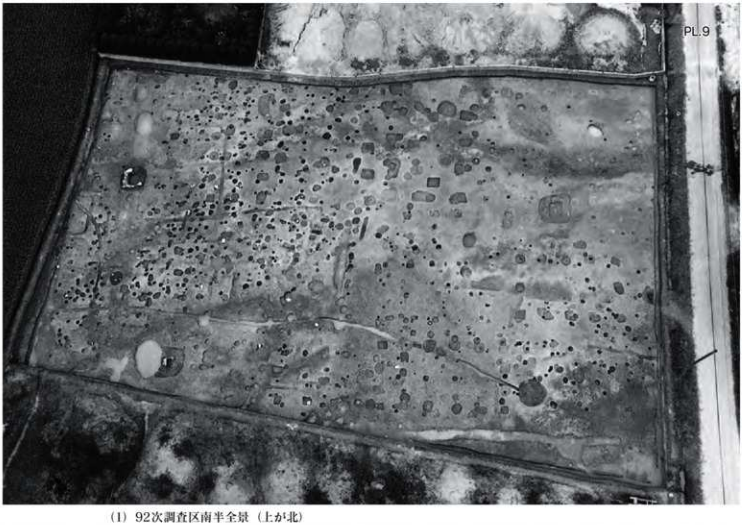


(2) 88次調査区全景（南から）



(1) 92次調査区北半全景（上が北）

(2) 92次調査区北半全景（東から）



(1) 92次調査区南半全景（上が北）

(2) 92次調査区南半全景（東から）

(1) 92-3次調査区全景（東から）

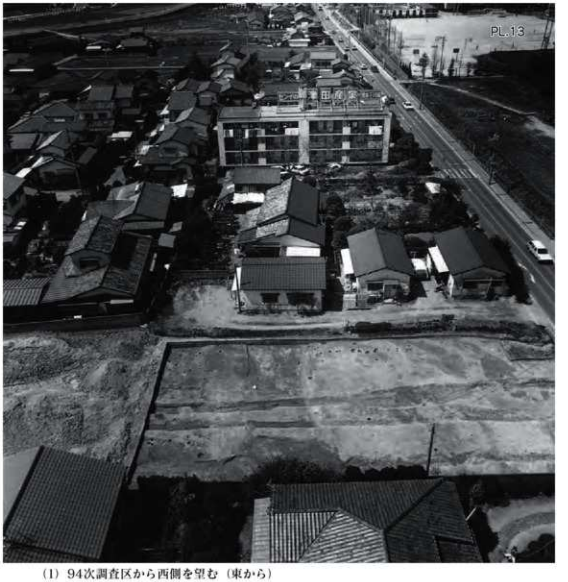
(2) 92-3次調査区西側（北から）

(1) 94次調査区南半全景（上が北）

(2) 94次調査区南半全景（北から）

(1) 94次調査区北半全景（上が北）

(2) 94次調査区北半全景（南から）



(1) 94次調査区から西側を望む（東から）

(2) 125次調査区全景（南から）

(1) 138次調査区全景（上が北）

(2) 138次調査区全景（西から）

(3) 138次調査区全景（北から）

(1) 139次調査区全景（下が北）

(2) 139次調査区全景（東から）

(1) 146次調査区東半部（西から）

(2) 146次調査区西半部（東から）

(1) 152次調査区全景（北から）

(2) 171次調査状況（西から）

(3) 171次調査状況（東から）

(1) 194次調査区全景（南から）

(2) 194次調査区南半部（北から）

(1) 196次調査Aトレンチ（西から）

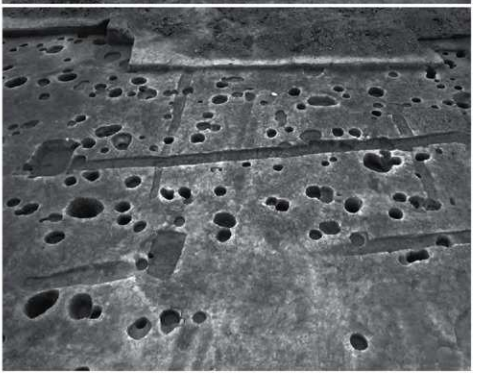
(2) 196次調査Bトレンチ（東から）

(1) 196次調査C・Dトレンチ（北から）

(2) 196次調査C・Dトレンチ（南から）

(1) 掘立柱建物SB2550,
木棺墓SX2600（南から）

(2) 掘立柱建物SB2555（南から）



(3) 掘立柱建物SB2560・2610（北から）

(1) 掘立柱建物SB2565，溝SD2572（南から）

(2) 掘立柱建物SB2575（東から）

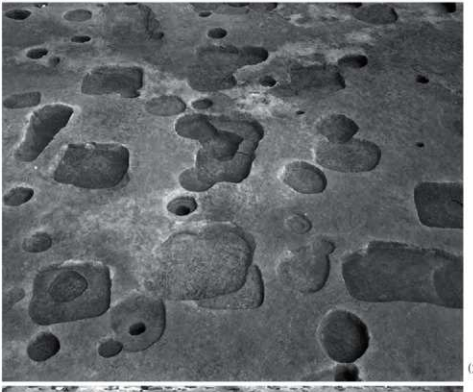
(3) 掘立柱建物SB2580・2590・2616，
溝SD2581・2582（東から）

(1) 掘立柱建物SB2620・2689，
柵2686（北から）

(2) 掘立柱建物SB2625A・B，
土坑SK2642（南から）

(3) 掘立柱建物SB2625A・B，
土坑SK2642（東から）

(1) 掘立柱建物SB2630（南から）



(2) 掘立柱建物SB2635（南から）

(3) 掘立柱建物SB2635（東から）

(1) 掘立柱建物SB2665・2688（東から）

(2) 掘立柱建物SB2640，地鎮遺構SX2670（東から）

(3) 掘立柱建物SB2645A・B（東から）

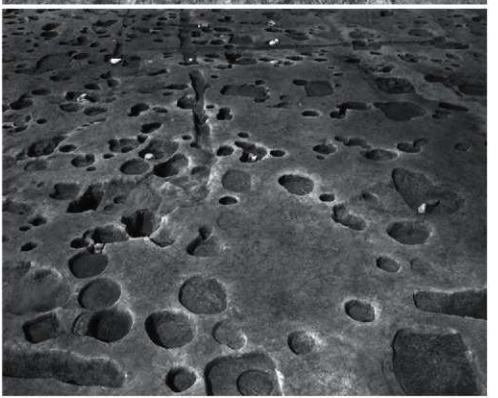
(1) 掘立柱建物SB2650（東から）

(2) 掘立柱建物SB2655・2675（南から）

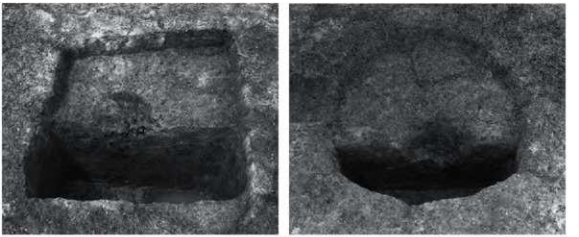
(3) 掘立柱建物SB2655・2675・2697（東から）

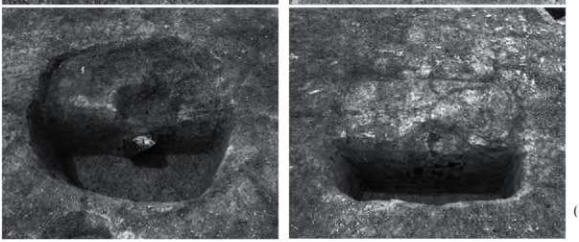
(1) 掘立柱建物SB2660，柵SA2707，溝SD2350（北から）

(2) 掘立柱建物SB2660，柵SA2707，溝SD2350（東から）

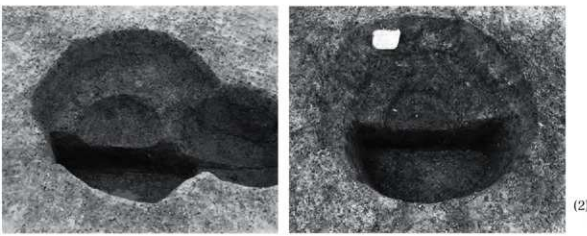


(3) 掘立柱建物SB2692，柵SA2708（東から）

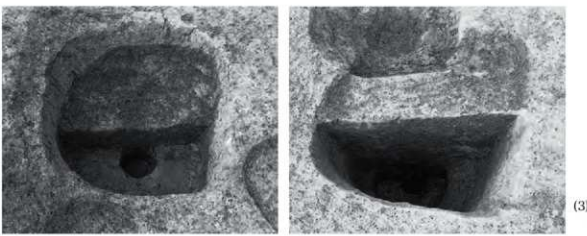




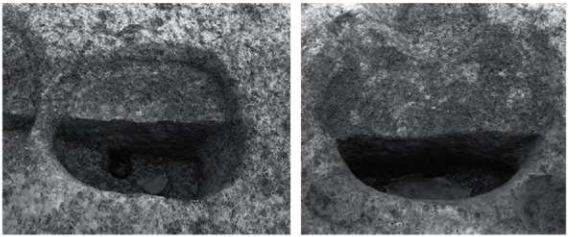
(1)掘立柱建物
SB2550柱掘方

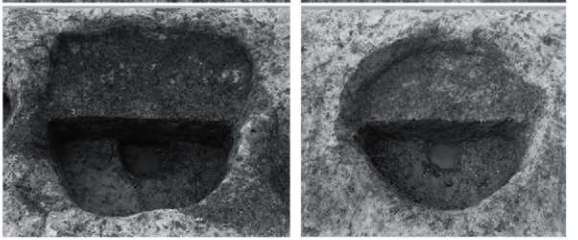


(2)掘立柱建物
SB2555柱掘方

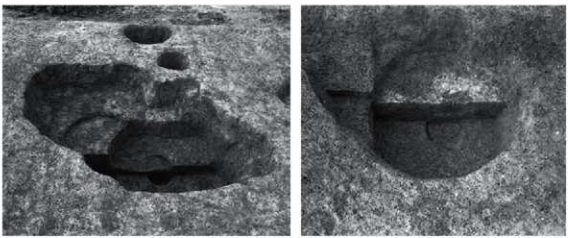


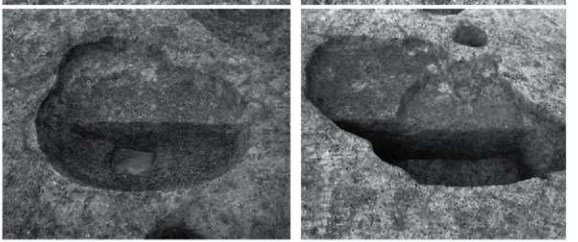
(3)掘立柱建物
SB2620柱掘方



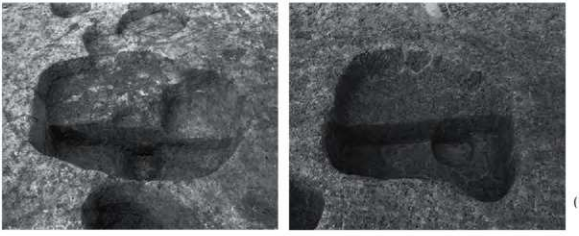


(1)掘立柱建物
SB2620柱掘方

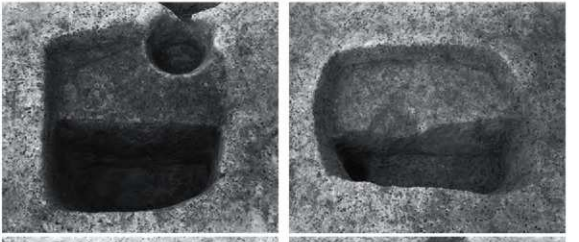




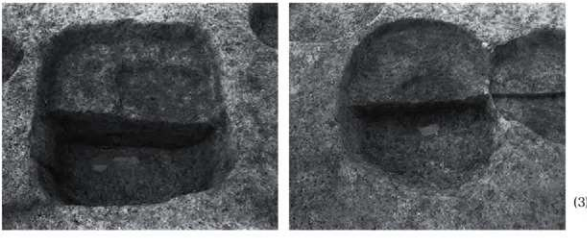
(2)掘立柱建物
SB2625A・B柱掘方



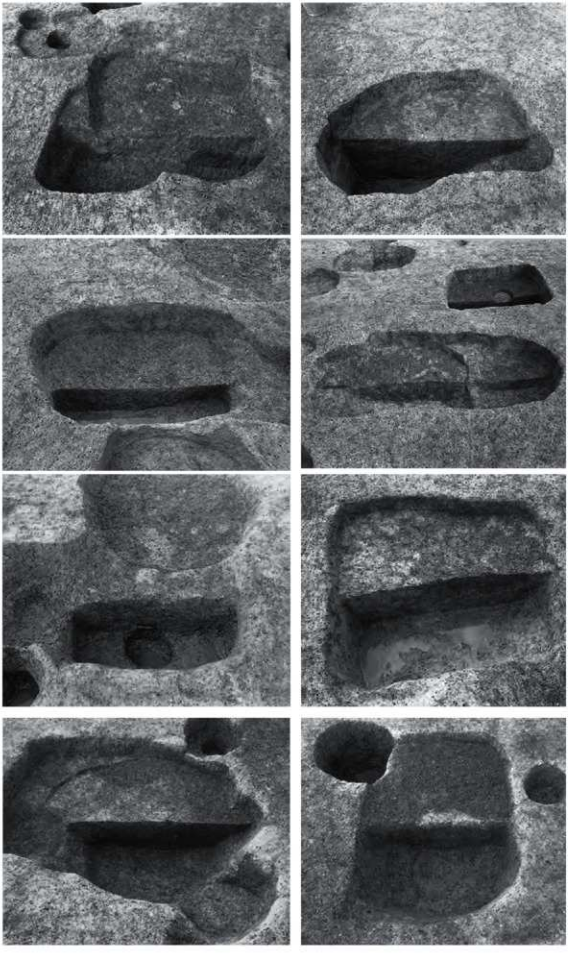
(1)掘立柱建物
SB2625A・B柱掘方



(2)掘立柱建物
SB2630柱掘方

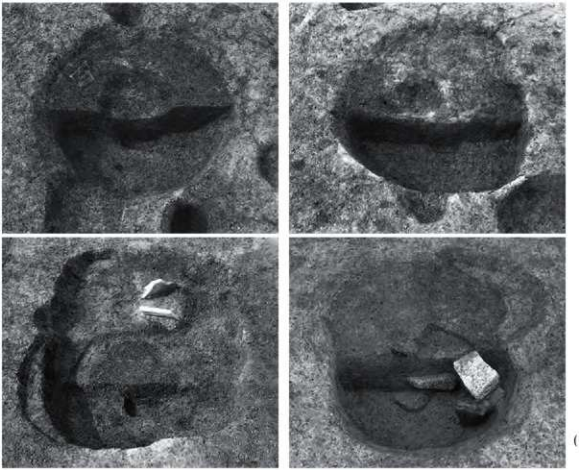


(3)掘立柱建物
SB2635柱掘方

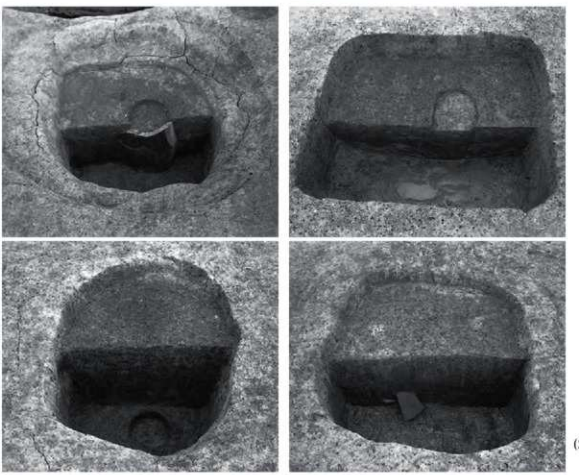


(1)掘立柱建物
SB2645A・B柱掘方

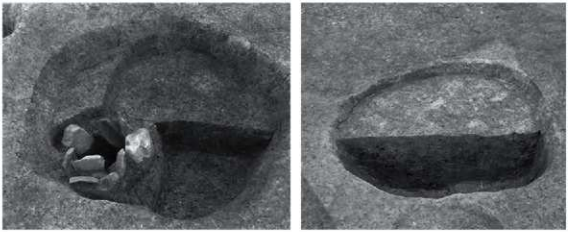
(2)掘立柱建物
SB2655柱掘方



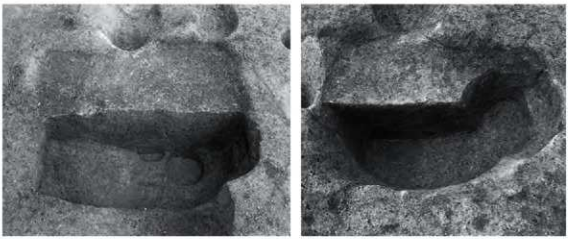
(1)掘立柱建物
SB2655柱掘方

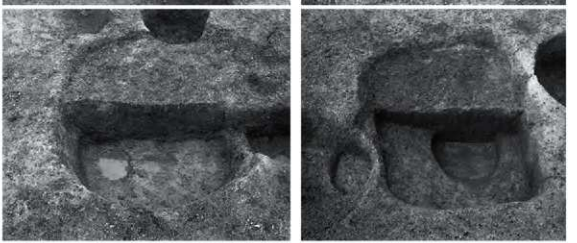


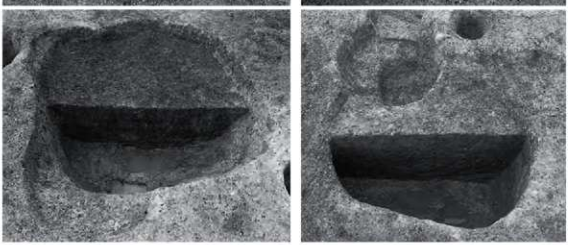
(2)掘立柱建物
SB2660柱掘方



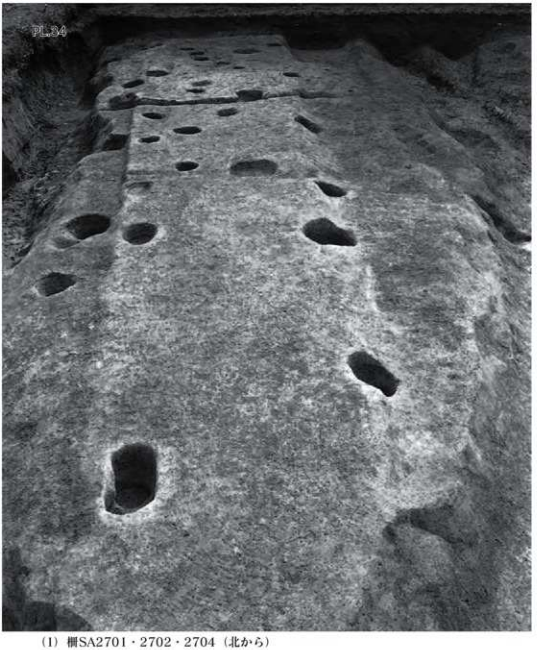
(1)掘立柱建物
SB2660柱掘方







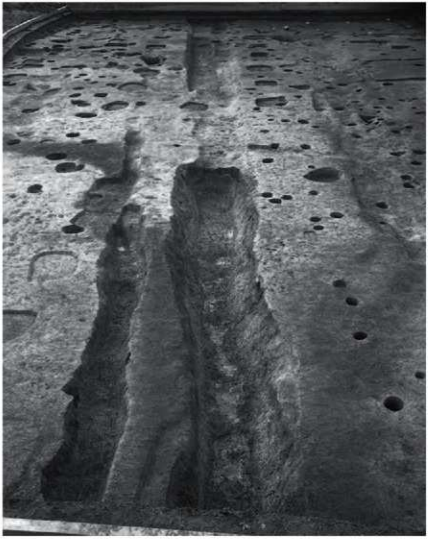
(2)掘立柱建物
SB2675柱掘方



(1) 柵SA2701・2702・2704（北から）

(2) 柵SA2703・2714（北から）

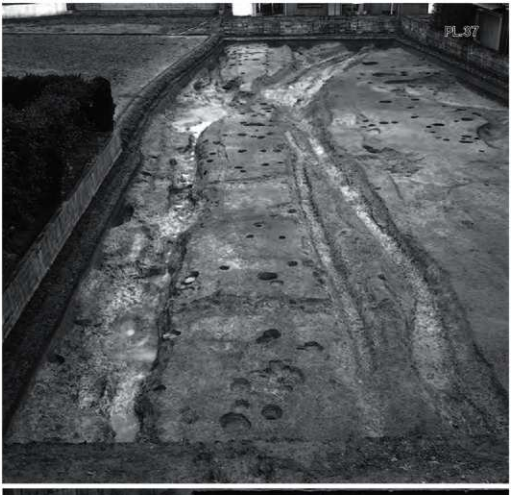
(1) 柵SA4652・4654（西から）



(2) 溝SD2350A・B，2636（東から）

(1) 溝SD2350A・B土層（西から）

(2) 溝SD2581・2582（東から）



(1) 溝SD2680・2700・2705南半（北から）

(2)溝SD2680北半（北から）

(1)溝SD2700・2705北半
（南から）

(2)溝SD2705A
（194次，西から）

(1)溝SD2680上層
（南から）

(2) 溝SD2700上層
（北から）

(3) 溝SD2705上層
（北から）

(1)溝SD2700・2705土層
（南から）

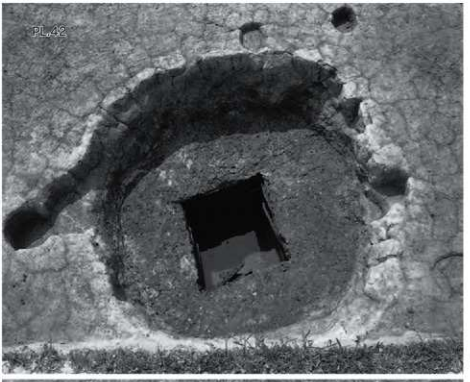
(2)溝SD4653（北から）

(3)溝SD4655（南東から）

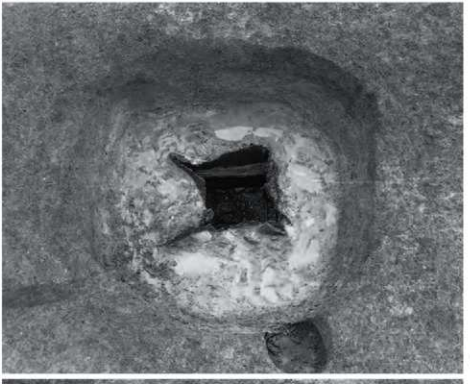
(1)井戸SE2551（西から）

(2)井戸SE2552土層（南から）

(3)井戸SE2552（南から）

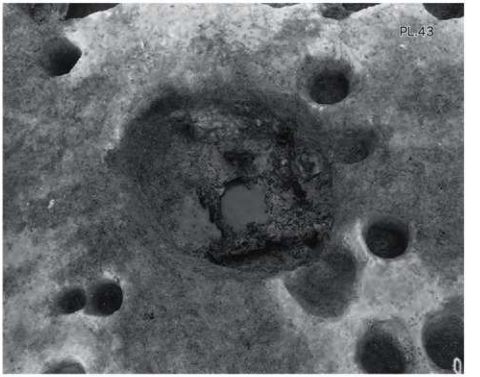


(1) 井戸SE2553（東から）

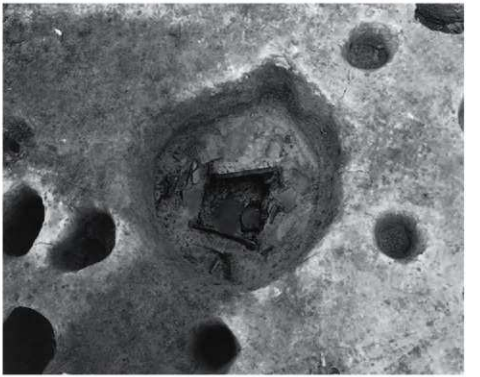


(2) 井戸SE2554（西から）

(3) 井戸SE2554（南から）



(1) 井戸SE2556（東から）



(2) 井戸SE2557（東から）

(3) 井戸SE2558（南から）

(1) 井戸SE2561（南から）

(2) 井戸SE2562（東から）

(3) 井戸SE2563（南東から）

(1) 井戸SE2621（東から）

(2) 井戸SE2621下部（東から）

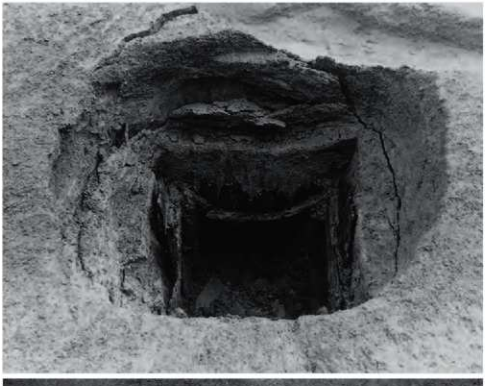
(3) 井戸SE2622（北から）

(1) 井戸SE2623（東から）

(2) 井戸SE2623細部（東から）

(3) 井戸SE2624（西から）

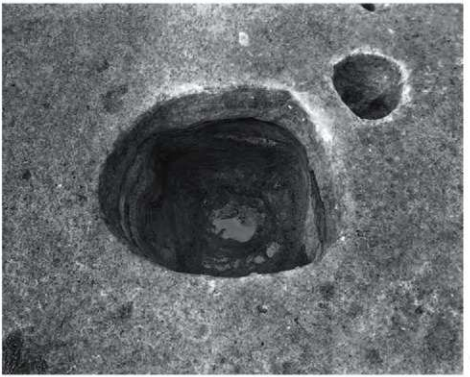
(1) 井戸SE2715（北から）



(2) 井戸SE2715（西から）

(3) 井戸SE2720・2725（東から）

(1) 井戸SE2730（東から）



(2) 井戸SE2735（東から）

(3) 井戸SE2740（南から）

(1) 井戸SE3960・3965,
土坑SK3965（北から）

(2) 井戸SE3960（南から）

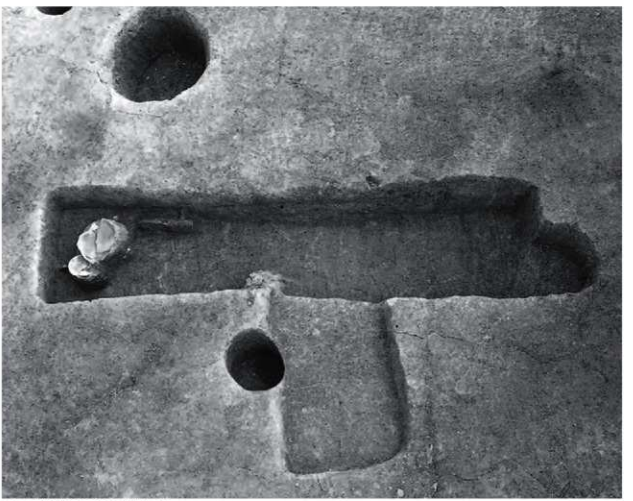
(3) 井戸SE3965（南西から）

(1) 井戸SE3970（下が北）

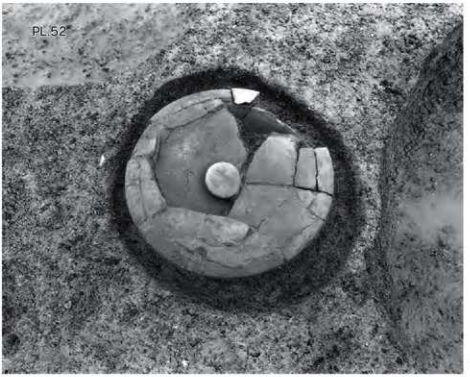
(2) 井戸SE3970（北から）

(3) 井戸SE3970（東から）

(1) 井戸SE3975（東から）

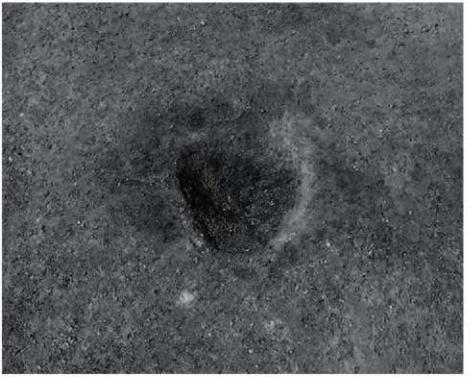


(2) 木棺墓SX2600（北から）



(1) 地鎮遺構SX2670（北から）

(2) 地鎮遺構SX2670（蓋除去後，北から）



(3) 炉跡SX2751（南から）

報告書抄録

ふりがな	だざいふせいちょうしゅうへんかんがあと
書　　名	大宰府政庁周辺官衙跡
副 書 名	大楠地区遺構編
巻　　次	Ⅶ
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	小田和利・杉原敏之・下原幸裕（編集）・岡田　諭
編 集 機 関	九州歴史資料館
所 在 地	〒838-0106　福岡県小郡市三沢5208－3　Tel. 0942－75－9575
発行年月日	平成27（2015）年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		(㎡)	
だざいふせいちょうしゅうへんかんがあと（おおくすちく）	ふくおかけんだざいふしかんぜおおんじ	40221	210316	33′30′45″	130′30′45″	1971.08.20～2004.06.08	8,510	学術調査 住宅建設
大宰府政庁周辺官衙跡（大楠地区）	福岡県太宰府市観世音寺2丁目10番地 他							

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大宰府政庁周辺官衙跡（大楠地区）	官　衙	奈良～平安時代	掘立柱建物・柵・溝・井戸・土坑・木棺墓・地鎮遺構・炉跡・整地層	土器・陶磁器・瓦類・木製品・金属製品・土製品・石製品	多数の建物・井戸

概　要	本報告書は，昭和46年度から九州歴史資料館が進めてきた大宰府史跡の発掘調査の中で，大宰府政庁の周辺に広がる官衙地区のうち，大楠地区に関する正式報告書である。 調査の結果，東側の不丁地区との境をなす境界溝SD320の西側にも多数の建物等が展開していることが判明した。掘立柱建物の棟数は不丁地区に比肩するほど多く，奈良時代から平安時代にかけて数時期に及ぶ変遷が想定される。なお，柱掘方の規模が旧古地区や不丁地区に比べて小型の事例が多く，官衙ではなく官人居住域とする見解もあるが，本地区の性格については次巻において出土遺物も含めた総合的な検討・考察を行う。 当地区では区画溝とみられる東西溝や南北溝が確認でき，不丁地区の状況を踏まえるとSD2680やSD2700などの南北溝はSD320とともに一辺90mに復原される条坊区画に相当する境界溝と考えられる。さらに東西溝SD2350A・Bについても大楠地区の中を区画する溝といえる。この他にも多くの溝が見つかっており，建物等の配置に応じた区画溝などの機能が推定される。また，奈良時代から平安時代にかけての多数の井戸や木棺墓，地鎮遺構，炉跡など多様な遺構を確認し，大楠地区の土地利用の歴史を復原する上で，重要な成果が得られた。

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年号 26	登録番号 0020

大宰府政庁周辺官衙跡Ⅶ
－大楠地区遺構編－

平成27(2015)年3月31日

発　行　九州歴史資料館
福岡県小郡市三沢5208－3

印　刷　株式会社　三　光
福岡市博多区山王１丁目14-4